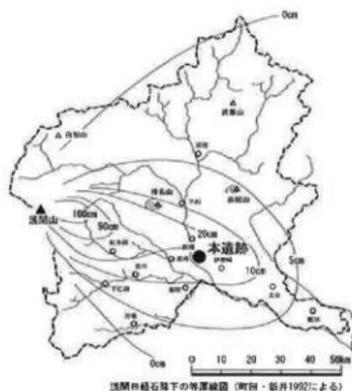


南部拠点地区遺跡群No. 10

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2014. 9

前橋市教育委員会
前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合
有限会社毛野考古学研究所



B区、1号南北大畦畔・W-6号溝跡（南から）



C区、3号東西大畦畔とH-1号住居跡（上が北）

巻頭写真



C区、H-1号住居跡 遺物出土状態（南西から）



H-1号住居跡 出土遺物

例言

- 1 本書は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴い実施した、南部拠点地区遺跡群No.10の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、前橋市教育委員会の指導・監督のもとに、前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合の委託を受け、有限会社毛野考古学研究所が実施した。調査担当は同研究所員 井上 太、有山径世、山本千春である。
- 3 発掘調査・整理作業の実施期間は、平成26年3月19日～平成26年9月29日である。
- 4 本調査の調査区の地番、面積及び遺跡番号、並びに略称は下記のとおりである。

所在地地番：前橋市鶴光路町113-2 外17筆 面積：9,850㎡

遺跡番号：00785

略称：25G84

- 5 本調査の遺情測量は、小出拓磨、設楽和也（有限会社毛野考古学研究所員）が担当した。
- 6 本書の編集は有限会社毛野考古学研究所が行い、井上が担当した。
- 7 本書の執筆は、Iを藤坂和延（前橋市教育委員会）、その他を井上が担当した。
- 8 調査に関わる資料は、括弧して前橋市教育委員会文化財保護課が保管している。
- 9 発掘調査・整理作業に関わった方々は下記のとおりである。（五十音順、敬称略。）

[発掘調査] 赤尾嘉章 赤見公一 浅川正行 新井健吾 新井正治 磯井俊人 人竹 努 小野田勝
金田 守 狩野友好 神山春寿 亀田浩子 川上晋平 川田敏夫 菊池文男 北山信一
小暮悠樹 佐藤幸了 篠原孝宏 清水 勝 清水千代 志村久子 須賀保・関口孝行
関口勝司 高田和正 高橋智子 高林 操 武井みち子 都丸夏雄 中原国隆 荻戸埜子
橋本幸明 堀川聖一 堀越同光 松平昭光 松倉秀樹 水島利茂 矢島義秋 山崎美紀香
山田明男 渡辺信夫

[整理作業] 青柳美保 池内麻美 小野沢絹子 合田幸子 小谷貴世美 下條真美代 瀬尾則子
伴場りく 武久美子 永島美和子 貞下弘美

- 10 発掘調査の実施から報告書刊行に至る間、以下の機関・方々のご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げます。（順不同）株式会社ベイスア 清水建設株式会社 赤坂次郎 坂口 一 田口一郎 永井智教 三浦京子

凡例

- 1 挿図の座標北には、世界測地系（国家座標第IX系）を使用した。方位記号は座標北を示す。
- 2 等高線や断面図中における水準値は、海拔標高を示す（単位：m）。
- 3 掲載の遺構図の縮尺率は、各挿図中にスケールで表示した。
- 4 グリッドは、原点（X=37,300・Y=67,400）より、西から東へX0、X1…、北から南へY0、Y1…と付した。
- 5 本書中のテフラの呼称は、下記のとおりである。
A s - A、A軽石：1783年（天明3年）に噴出した浅間Aテフラ。
A s - B、B軽石：1108年（大仁元年）に噴出した浅間Bテフラ。
H r - F A、F A：6世紀初頭に噴出した榛名二ツ岳新川テフラ。
A s - C、C軽石：4世紀初頭頃に噴出した浅間Cテフラ。
- 6 本書掲載第1図には、国土交通省国土地理院発行の1/200,000「長野・1宇都宮」、第2図に同院発行の1/25,000地勢図「前橋」・「高崎」、第3図には「前橋市都市計画図」1/2,500を一部加工して使用した。
- 7 表紙には2011年国土地理院撮影の空中写真を使用した。

目 次

例言	1
凡例	1
目次	1
挿図目次	1
表目次	1
写真図版目次	1
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	4
2 調査の経過	5

IV 遺跡の概要	6
1 基本層序	6
2 遺構・遺跡の概要	6
V 検出遺構	7
1 平安時代末以降	7
2 古墳時代	31
VI 出土遺物	39
1 平安時代末以降	39
2 古墳時代	41
VII まとめ	51
1 平安時代末以降	51
2 古墳時代	53

写真図版
抄 録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡	3
第3図 調査地位置図	4
第4図 調査区全体図	5
第5図 基本層序	6
第6図 A区全体図及び断面図	8
第7図 A区As-B下水田断面図	9
第8図 A区上坑	9
第9図 A区溝跡断面図	10
第10図 B区全体図及び断面図	11
第11図 B区As-B下水田断面図	12
第12図 B区上坑	13
第13図 B区溝跡断面図	13
第14図 C区平安時代以降全体図及び断面図(1)	15
第15図 C区平安時代以降全体図及び断面図(2)	16
第16図 C区平安時代以降全体図及び断面図(3)	17
第17図 C区As-B下水田断面図	18
第18図 C区十坑	19
第19図 C区井戸跡	21
第20図 C区溝跡断面図(1)	23
第21図 C区溝跡断面図(2)	25

第22図 C区溝跡断面図(3)	27
第23図 C区窪地断面図	30
第24図 C区古墳時代全体図	31
第25図 C区II-1号住居跡遺物出土状況	32
第26図 C区H-1号住居跡	33
第27図 C区H-2号住居跡・3号住居跡	35
第28図 C区II 2号住居跡、3号住居跡遺物出土状況	36
第29図 C区古墳時代土坑	38
第30図 調査区出土遺物	39
第31図 溝跡出土遺物	40
第32図 II 1号住居跡出土遺物(1)	42
第33図 H-1号住居跡出土遺物(2)	43
第34図 H-1号住居跡出土遺物(3)	44
第35図 H-1号住居跡出土遺物(4)	45
第36図 H-2号住居跡出土遺物(1)	45
第37図 H-2号住居跡出土遺物(2)	46
第38図 H-3号住居跡出土遺物	46
第39図 I墳山上遺物	47
第40図 多里型地割り想定図	51
第41図 C区平安時代末以降の溝跡位置図	52

表目次

第1表 周辺遺跡検出遺構	2	第7表 H-1号住居跡出土遺物観察表(2)	49
第2表 A区出土遺物観察表	47	第8表 II-2号住居跡山上遺物観察表(1)	49
第3表 C区出土遺物観察表	47	第9表 H-2号住居跡出土遺物観察表(2)	50
第4表 溝跡山上遺物観察表(1)	47	第10表 II-3号住居跡山上遺物観察表	50
第5表 溝跡出土遺物観察表(2)	48	第11表 土坑出土遺物観察表	50
第6表 H-1号住居跡出土遺物観察表(1)	48		

写真図版目次

巻頭写真

- B区、1号南北大畦畔・W-6号溝跡
- C区、3号東西大畦畔とH-1号住居跡
- C区、H-1号住居跡 遺物出土状態
- H-1号住居跡 出土遺物

P.L. 1

- 調査地から模名山方向を望む
- A区・B区 全景

P.L. 2 (A区)

- A区 全景
- As-B下水田 1号東西大畦畔・W-2号溝跡
- As-B下水田 1号東西大畦畔 水口1
- As-B下水田 1号東西大畦畔 S1
- As-B下水田 1号東西大畦畔 S-2断ち割り

P.L. 3 (A区)

- As-B下水田 1号東西大畦畔・W-2号溝跡 土層断面
- A区東半部 As-B下水田
- A区西半部 As-B下水田
- As-B下水田面 耕具痕

A区 遺物出土状態

- D-1号土坑
- D-2号土坑
- W-1号溝跡

P.L. 4 (A・B区)

- W-3号溝跡
- W-4号溝跡
- W-4号溝跡 土層断面
- A区 基本層序
- B区 全景

P.L. 5 (B区)

- As-B下水田 1号南北大畦畔・W-6号溝跡
- As-B下水田 1号南北大畦畔・W-6号溝跡

- As-B下水田 1号南北大畦畔・W-6号溝跡 土層断面F

As-B下水田 2号東西大畦畔

- B区南半部 As-B下水田
- D-3号土坑
- D-4号土坑
- W-5号溝跡

P.L. 6 (C区)

C区 全景

P.L. 7 (C区)

- C区 全景
- C区北半部 As-B下水田と1号南北大畦畔

P.L. 8 (C区)

- C区南半部 As-B下水田とH-2号・3号住居跡
- As-B下水田 1号南北大畦畔
- As-B下水田 1号南北大畦畔 西脇の足痕
- As-B下水田 1号南北大畦畔 断ち割りA
- As-B下水田 3号東西大畦畔 西半部・W-10号溝跡

P.L. 9 (C区)

- As-B下水田 3号東西大畦畔・W-10号溝跡
- As-B下水田 水口1
- As-B下水田 水口3
- As-B下水田 水口5
- As-B下水田 2号南北大畦畔水口6
- As-B下水田 水口7
- As-B下水田面 凹凸状況
- As-B下水田 畦畔断ち割りD

P.L. 10 (C区)

- D-5号土坑
- D-7号土坑
- D-8号土坑
- D-9号土坑

- D-10 号土坑
D-10 号土坑 土层断面
D-11 号土坑
D-12 号土坑
- P L. 11 (C 区)**
D-13 号土坑
I 1 号井尸跡
W-7 号溝跡
W-8 号溝跡
W-9 号溝跡·X-1 号窪地
W-11 号溝跡
W-12 号溝跡
W-13 号溝跡、16号·17号溝跡
- P L. 12 (C 区)**
W-14 号溝跡
W-15 号溝跡
W-15 号溝跡 土层断面
W-16 号~18 号溝跡 北端部
W-16 号~18 号溝跡 上層断面A
W-16 号·17 号溝跡 中央付近屈曲部
W-19 号溝跡、21 号溝跡
W-20 号溝跡
- P L. 13 (C 区)**
W-22 号溝跡
W-22 号溝跡 土层断面A
W-23 号溝跡
W-24 号溝跡
W-24 号·25 号·29 号溝跡 交差部
W-25 号·26 号·28 号溝跡
W-26 号溝跡 上層断面A
W-27 号溝跡
- P L. 14 (C 区)**
W-30 号溝跡
W-31 号·32 号溝跡
W-31 号·32 号溝跡 土层断面
W-33 号溝跡
W-34 号溝跡 東辺
W-34 号溝跡 東辺最深部
W-34 号·39 号溝跡 交差部上層断面A
W-35 号溝跡 西辺、36 号溝跡
- P L. 15 (C 区)**
W-37 号溝跡 西辺、38 号溝跡
W-38 号溝跡 上層断面A
W-39 号溝跡
- W-40 号、16 号·17 号溝跡
X-1 号窪地·W-9 号溝跡
X-1 号窪地 土层断面
X-2 号窪地
X-2 号窪地 上層断面
- P L. 16 (C 区)**
C区、古墳時代遺構 全景
H-1 号住居跡
H-1 号住居跡 外周溝南辺
H-1 号住居跡 外周溝東辺
H-1 号住居跡 外周溝北辺
- P L. 17 (C 区)**
H-1 号住居跡 外周溝南辺遺物出土状態
H-1 号住居跡 外周溝北辺遺物出土状態
H-1 号住居跡 外周溝北辺部土层断面
H-2 号住居跡
H-2 号住居跡 外周溝南西部
H-2 号住居跡 外周溝西部遺物出土状態
H-2 号住居跡 外周溝土层断面A
H-3 号住居跡
- P L. 18 (C 区)**
H-3 号住居跡 遺物出土状態
D-6 号土坑
D-6 号土坑 遺物出土状態
D-14 号土坑
D-14 号土坑 土层断面
D-15 号土坑
D-16 号土坑
D-17 号土坑
- P L. 19**
A区 出土遺物
C区 出土遺物
溝跡 山上遺物
H-1 号住居跡 出土遺物 (1)
- P L. 20**
H-1 号住居跡 出土遺物 (2)
- P L. 21**
H-1 号住居跡 出土遺物 (3)
- P L. 22**
H-1 号住居跡 出土遺物 (4)
H-2 号住居跡 出土遺物
- P L. 23**
H-3 号住居跡 出土遺物
土坑 出土遺物

I 調査に至る経緯

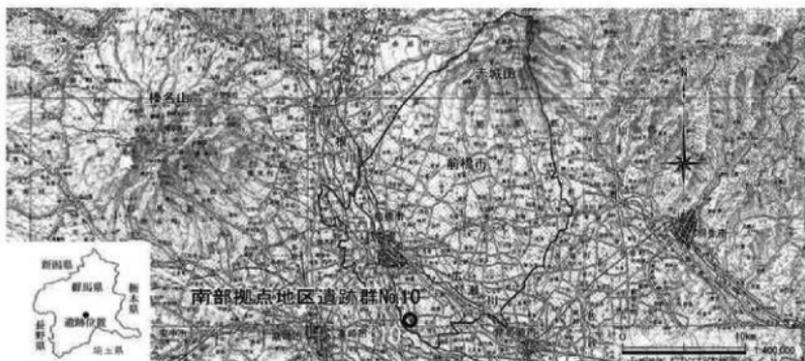
平成25年6月5日付けで前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合より埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出され、同年7月3日～8月30日にかけて試験調査を実施し、浅間B噴石で覆われた水田跡を確認した。試験調査に際しては、開発面積が広大であるため原則20mピッチでトレンチを設定し、孟楯により遺構確認を行った。なお、試験面積は8,659㎡であった。試験調査の結果を受け、埋蔵文化財の保護について協議を重ねたが、設計変更は不可能であるため発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることで合意を得た。前橋市教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導人事務取扱要綱」に則り、前橋市教育委員会の作成する調査仕様書に基づき監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成26年3月7日付けで前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合、民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所、前橋市教育委員会との間で発掘調査実施に関する協定書が締結された。同年3月10日から適時調査準備を開始、同年3月25日から土木重機の投入による表土除去が実施され、現地での発掘調査が開始された。

なお、遺跡名称「南部拠点地区遺跡群No.10」の「南部拠点地区」は区画整理事業名を採用し、数字の「No.10」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡は、前橋市城の南東部「前橋台地」の後背灌地に立地する。前橋台地は、約2万年前の浅間川噴火による山体崩壊を起源とする「前橋泥流」が、利根川によって赤城・榛名山間から関東平野に流出する部分に堆積して形成された扇状地性台地である。台地上にはその後の中小河川の浸食によって、北西から南東方向に多くの自然堤防・後背灌地が形成されている。台地の東辺は、利根川の本流路である広瀬川氾地帯の段丘崖によって画されている。この崖上には高標な地形が帯状に連なり、その西方には高崎市・玉村町にかけて広大な水田地帯が広がっている。現在この水田域の中を、中世に流路が変流したと考えられている利根川が貫流している。東方には前橋台地北部の氾地帯に源をもち、古墳時代から水田開墾に利用されてきたと考えられる「端氣川（はげがわ）」が南流している。調査地は現在の利根川の左岸から300m前後、端氣川の右岸からは約1kmに位置する。



第1図 遺跡の位置

2 歴史的環境

木造跡周辺の前橋台地東半部では弥生時代から前の遺跡の立地は非常に少ない。ここでは遺跡数が急増する古墳時代以降の様相について記していく。

古墳時代前期には周辺の自然堤防や微高地上に多数の集落が立地してくる。徳丸仲田遺跡 (14) 東辺のII・I区、公田池尻遺跡 (34) 北端部、本遺跡北西の横手早稲田遺跡 (26)・横手湯田遺跡 (24) A・B区で住居跡が検出されている。このうち横手早稲田・横手湯田遺跡の住居跡は、周囲に溝をめぐらせたものである。また、下阿内窓町畑遺跡 (12) I区から西田遺跡B区 (14) にかけてでは、この時期の祭祀跡とみられる痕跡も発見されている。その他、A-C関係の水田跡や溝跡などが周辺部で多数検出されている。前代までと大きく様相が変わる背景として、台地上の小河川の利用や川排水路の開鑿などによる低地部の水田開発が考えられている。また、徳丸仲田遺跡では堰を伴った大規模な用水路が発見され、広範囲に及ぶ組織的な開発が行われたと考えられている。

これらの水田開発を主導したとみられる首長層の墳墓が築かれた地として、台地の東辺に朝倉・広瀬古墳群が分布している。前期に限っても、全長 130 m の東日本最大の前方後方墳である前橋八幡山古墳、129 m の前方後円墳で三角縁神獣鏡などを出土した前橋入神山古墳が占地しているほか、同時期の円墳である朝倉II号古墳などが知られている。また、公田東遺跡 (35) では前方後方形周溝墓も検出されている。

古墳時代中期から後期の集落遺跡は台地の北辺部以外には今のところ発見例がない。少量ながら後期の土器が出土する遺跡もみられ、前期とは地点を替えて存在するものと考えられる。水田跡はH-r-F AやH-r-F Bに関わる水田が 22 遺跡で確認されており、水田域の拡大に伴い集落域が移動している可能性がある。

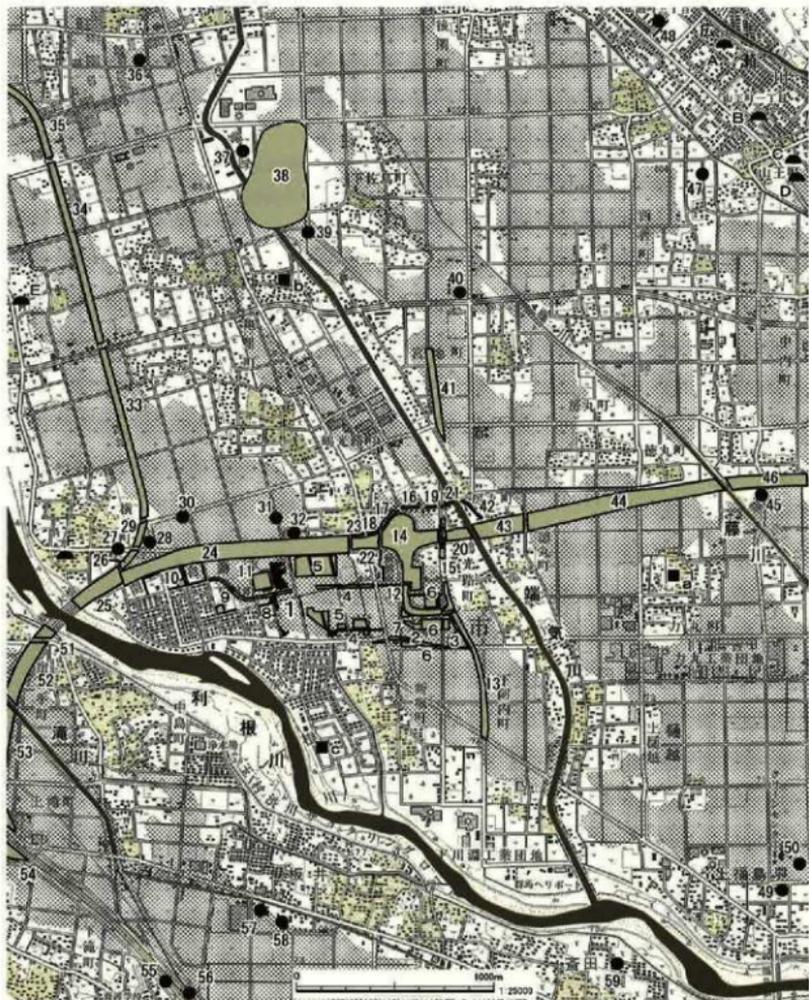
朝倉・広瀬古墳群ではその後も 7 世紀代まで有力古墳の築造が続き、全体としては 160 基以上の古墳が存在したことが判明している。

奈良・平安時代では、再び周辺の微高地上に広く集落が展開してくる。西善尺遺跡 (46) やその東方の中内村前遺跡などでは大規模集落が発見されている。平安時代末期のA s-B層直下の水田跡は周辺のほとんどの遺跡で検出される状況で、その区画は条里区画を継承していることが判明している。周辺一帯の条里制の施行に伴い、集落域の再編が行われたことも考えられている。

中近世については、大きな特色として環濠遺跡群の存在があげられる。玉村町にかけての一帯には、方形を基調とする濠をめぐらせた屋敷地や寺院などが散在し、環濠の一部と考えられる溝跡が検出された遺跡も数多い。方丸城址や宿阿内城址 (a・b) はこのような環濠層数が複合・発展した形態と考えられている。

第1表 周辺遺跡松山遺構

遺跡の種別	遺跡名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28		
高瀬時代の水田跡	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
古墳時代の祭祀遺跡	祭祀跡																														
	祭祀跡																														
	祭祀跡																														
	祭祀跡																														
	祭祀跡																														
中・近世時代の水田跡	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														
	Aa-c 遺土層上																														



- | | | | | | | |
|----------------|------------------|------------|--------------|---------------|------------------|-----------|
| 1 本道路 | 11 南沼田地区道路群No.11 | 21 鶴光路桜橋 | 31 龜里油免口 | 41 吉池中江 | 51 西沼田地区道路群No.51 | (近湖古墳群) |
| 2 南沼田地区道路群No.2 | 12 下阿内七町通 | 22 村中 | 32 鶴光路神引 | 42 徳久北塚田・IV | 52 西沼田地区道路群No.52 | A 亀塚山古墳 |
| 3 南沼田地区道路群No.3 | 13 下阿内前面 | 23 村中 | 33 龜里平塚 | 43 徳久北塚田・I・II | 53 滝川 | B 金谷塚古墳 |
| 4 南沼田地区道路群No.4 | 14 西田 | 24 村中 | 34 公園池尻 | 44 徳久北塚田・III | 54 上湖五反塚 | C 文華山古墳 |
| 5 南沼田地区道路群No.5 | 15 西田II | 25 榎手宮田 | 35 公園池尻 | 45 西沼田 | 55 滝川 | D 神野山古墳 |
| 6 南沼田地区道路群No.6 | 16 西田III | 26 榎手宮田 | 36 上沼田中塚 | 46 西沼田門・I・II | 56 上湖社宮司 | E 下湖第3号古墳 |
| 7 南沼田地区道路群No.7 | 17 西田IV | 27 井戸南 | 37 下佐島 | 47 西沼田津屋 | 57 天神前 | F 浅間神社古墳 |
| 8 南沼田地区道路群No.8 | 18 西田V | 28 榎手宮田 | 38 榎手宮田池尻1~6 | 48 山王古古II | 58 山口下階敷 | a 力丸塚 |
| 9 南沼田地区道路群No.9 | 19 西田VI | 29 榎手宮田 | 39 川島 | 49 金光 | 59 山口下階敷 | b 富内塚 |
| | 20 鶴光路橋 | 30 龜里橋田・II | 40 東田 | 50 石町 | | c 新橋塚 |

第2図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

前橋市教育委員会が実施した試掘調査結果から、調査対象地内にはA s - B層下の水田跡が広範囲に展開していることが予想され、一部には遺物包含層も確認されていた。今回の開発事業の計画内容は大型店舗の建物等の建設であり、調査範囲は遺跡に破壊が及ぶ部分となるA・B・C3カ所の調査区が決定された。調査区の面積はA区1,148.37㎡、B区1,223.44㎡、C区7,581.55㎡、合計で9,953.36㎡となった(第3図)。

調査はB区から着手し、その後A区、C区へと順次進めていった。調査の方法は、表土からA s - B層の上部までバック・ホーで掘削し、A s - B層の遺存しない部分についてはA s - B層の下層となる層位まで掘削した。このため、A s - B層より上部から掘削された遺構は、土層断面の観察により本来の期り込み面を確認した。重機による表土除去後は人力により遺構の確認と検出にあたった。また、A s - B層下面の水田の調査終了後、C区で認められた遺物包含層の部分を調査し、古墳時代後期、及び前期の住居跡を検出した。

遺構の精査後は写真撮影、測量図等の記録を作成した。写真は、35mmモノクロフィルム及びびりバーサルフィルムと、デジタルカメラで撮影し、全体の遺構検出終了後には空中写真撮影を実施した。図面測量は、平面図はトータルステーションを用いて作成し、断面図は手実測で1/20縮尺で実施した。

検出された遺構は調査区・時代などに関わらず検出順に種類毎に記号番号を付した。記号は、Hが住居跡、Dは土坑、Iが井戸跡、Wは溝跡、Xは不明遺構を表している。本書では原則調査時の遺構番号をそのまま使用しているが、東西大睦畔についてはのみは調査時の1号を2号に、2号を3号にそれぞれ変更した。



第3図 調査地位位置図

2 調査の経過

平成 26 年 3 月 19 日より準備作業を開始。基準杭や調査区の設定、器材の搬入、現地事務所用プレハブ・トイレの設置などを行う。

3 月 25 日から重機による表土掘削を B 区から開始、31 日からは重機を 2 組として A 区も並行して表土掘削を開始した。両区の表土の除去は 4 月 3 日に終了し、引き続き C 区の表土掘削に移行した。最終的に C 区までの掘削が終了したのは 4 月 18 日であった。

この間、3 月 22 日からは作業員による遺構検出作業を、B 区の南半部から開始した。B 区の遺構検出は 4 月 7 日に終了し、引き続き A 区の西半部から掘下げを開始した。A 区は 4 月 14 日に精査を終了し、15 日には A・B 両区の空中写真撮影業務を実施した。16 日から 23 日にかけては A・B 区の遺構測量業務と補足調査を実施した。

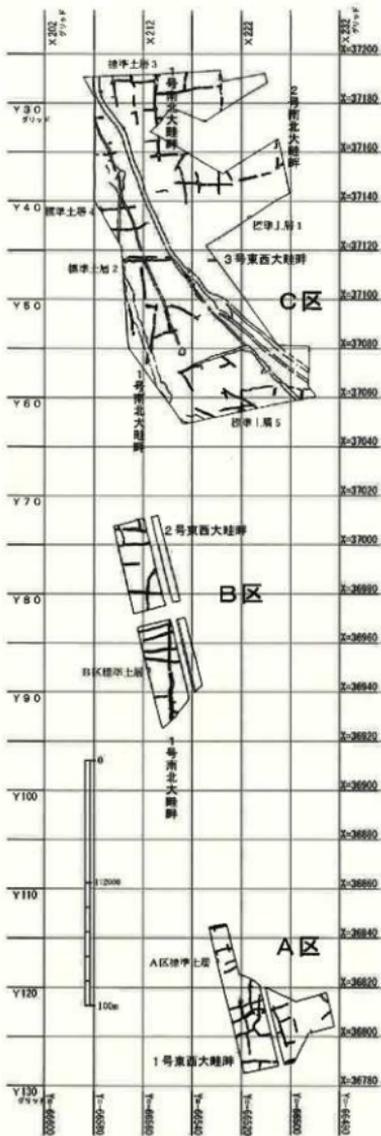
C 区は 4 月 15 日から遺構の検出作業に取りかかり、A s-B 層の遺存度が良い北西部から遺構検出作業を開始した。4 月 25 日に W-16 号溝から西の A s-B 層下面の精査を終了し、その後再び北方から、東半部の精査にあたった。A s-B 層下面での遺構検出は 5 月 15 日に終了したが、この間 5 月 12 日からは下層の古墳時代の遺構の調査を開始し、22 日に終了した。

5 月 19 日からは C 区の空中写真撮影実施に向けて、調査区内の清掃や器材の撤去・搬出作業を開始。23 日にラジコン・ヘリにより空中写真を撮影。

C 区の遺構測量業務は、この間 5 月 1 日から断続的に実施した。

5 月 24 日には C 区の補足調査や測量業務を行い、現地での作業をすべて終了した。

整理・報告書作成業務については、平成 26 年 5 月 26 日から 9 月にかけて有限会社毛野考古学研究所において実施した。



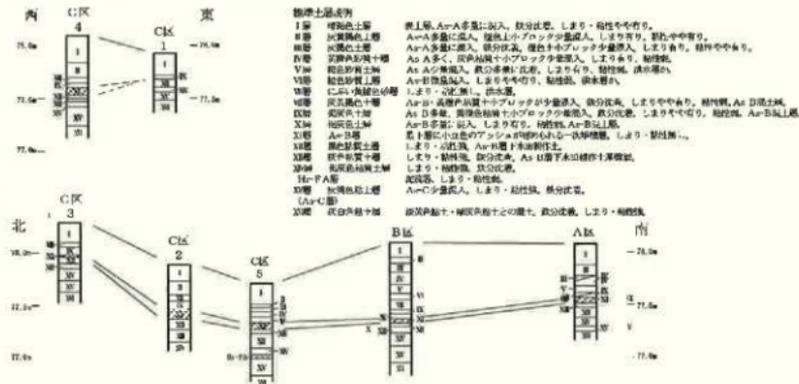
第4図 調査区全体図

IV 遺跡の概要

1 基本層序

調査地は昭和40年代の耕地整理によって整然とした水田区画が造成されている。標高はC区の北西部が78.3mほどで、全体的に南東方向にゆるやかに傾斜し、A区南東部との高低差は1.4mという現況であった。

標準土層はB区で良好な層準が確認でき、A区においても比較的良好な状況がみられた。しかし、C区中央では第XI層のA s-B層の下面は、北西から南東方向への浅い谷地形となっており、第XI層より上部の堆積は地点によって大きく異なっていた。さらに、C区中央の東半部側は第XI層まで削平されて残存せず、本来この付近は微高地状の地形であったことが想定された。古墳時代の住居跡はこの地点で検出されている。C区南端の谷部では第XIV層と第XV層の間にII r-F A泥流層が薄く確認されたが、その他では古墳時代前期の住居跡外周溝の覆土上部に部分的に検出されたのみであった。またA s-C層は純層が確認された地点はなく、軽石の混入から第XV層の下層での降下が考えられた。



第5図 基本層序

2 遺構・遺物の概要

検出された遺構は、A区とB区で平安時代末のA s-B層直下の水田跡及び溝跡3条、中世以降のA s-B混土の溝跡2条、土坑4基、近世以降の溝跡1条で、C区では古墳時代前期の住居跡2軒、上坑5基、古墳時代後期の住居跡1軒、A s-B層直下の水田跡及び溝跡7条、窪地状遺構1基、A s-B混土の土坑8基、井戸跡1基、溝跡24条、窪地状遺構1基、近世以降の溝跡3条であった。

A s-B層直下の水田跡は、A区とB区ではA s-B層のトまで耕地整理の削平が及んでいる部分があったものの、全体的に畦畔などが良好に検出された。C区では調査区中央付近の東側がやはりA s-B層下まですでに削平されており水田跡は検出されなかった。一帯は調査区のほぼ全域にわたって水田跡が展開していたとみられる。

遺物は、A区・B区ではほとんど出土がなかった。C区でもA s-B層直下の水田跡や溝跡などに係わるものは検出されなかったが、中世以後の溝跡などからは土師器や陶磁器の破片など少量の遺物が出上した。しかし土師器類についてはすべて混入によるものである。一方、古墳時代前期の住居跡では、外周溝の部分から良好な土師器群の出土があった。

V 検出遺構

1 平安時代末以降

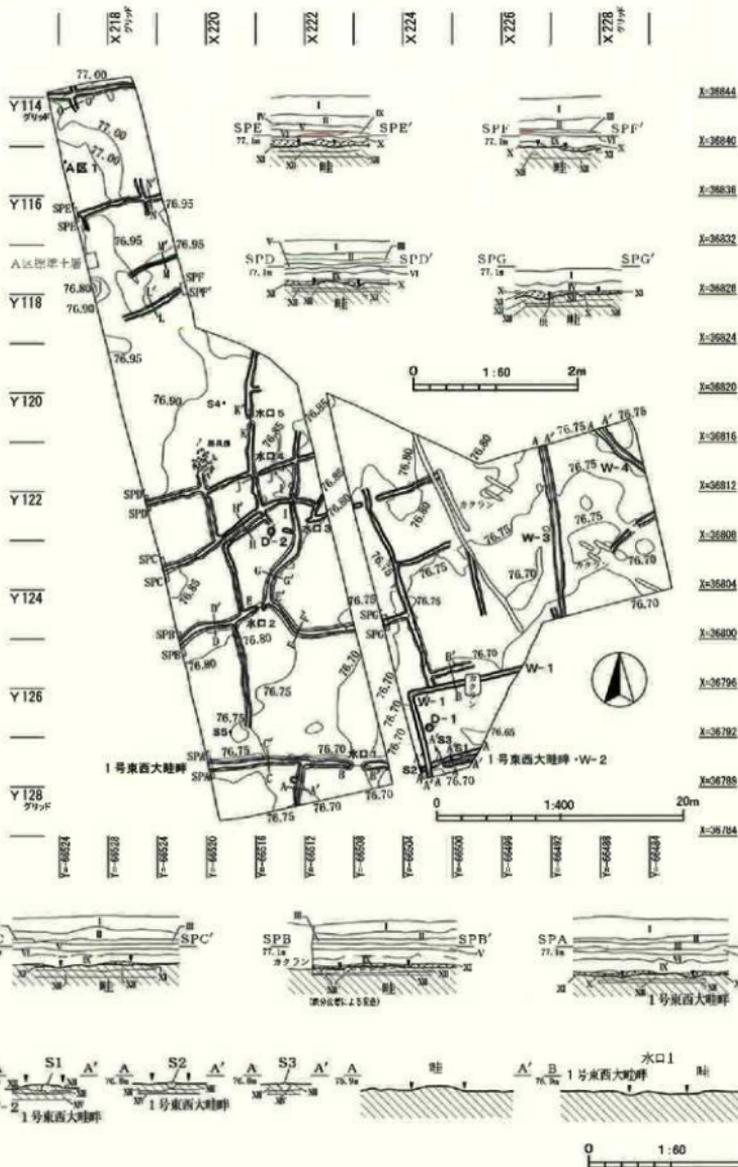
1 A 区

調査区中央付近を南北に深い排水路が走っており、調査区は東西に分かれていた。東半部では過去の耕地整理の削平を受けて、60cm近く低い段差となっていた。このため、西半部では第XI層(A s-B層)も含めて良好な層相が認められたが、東半部では表土層の直下に辛うじて第XI層が薄く残る程度の部分が多く、第XI層上面も後世の耕作などによる擾乱が激しかった。以下、中・近世の遺構も含めて種別、番号順に記載する。

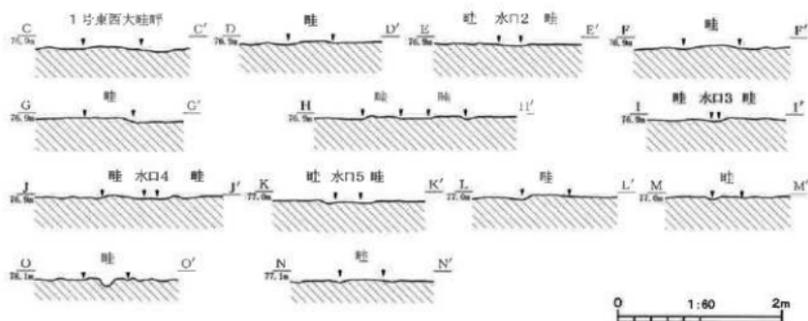
なお以下の記述中、X…、Y…についてはグリッド番号を表している。

1 A s-B層下水田跡 (第6・7図、PL、2・3)

位置：調査区のはほぼ全域で検出された。重複：中世以降のW-1号・3号溝跡、D-1号・2号土坑に切られている。地形：北西部で標高77m強、南東端部が76m強と1mの差があり、ゆるやかに傾斜している。畦畔：調査区の南端部X220～225、Y127で、22mの長さにわたって**1号東西大畦畔**が検出された。西半部はほぼ東西方向の走向であるが、東半部は20°程北に振れた方向であった。規模は、最大幅は94cm、最大高は6cmほどを計る。削平を受けているため小規模な部分が多かったが、他の小畦畔よりは全体に規模が大きかった。東端部ではA s-B層下で直接埋没したW-2号溝が併行して走っていた。本来は人畦畔の中央部にあったものが、畦畔の南側が削平された結果と考えられる。このW-2号溝の西の畦畔上(X224)には2カ所(藤(S-1・2))が検出された。10cm強ほどの碑石安山岩で、藤の大部分が畦畔の中に埋まった状況であり盛り込みなどは認められなかった。この北の水田面(X224、Y127)にも同様に藤が1点(S-3)検出された。さらに中央付近(X223)には幅70cmと広い水口1が設けられ、南の調査区外へ続く南北小畦畔(X221)が1条取り付いていた。その他の小畦畔も含め畦畔の高さはあまりなく、盛り上はすべて水田面と同じA s-B層直下の第XI層の黒色粘質土で形成されていた。区画：全形が捉えられた水田区画は調査区中央付近の不定形な6枚程度であった。一部には南北(X223、Y122～125)、東西方向(X218、Y121・122)に小畦畔の目が通る部分もあり、調査区西半の北側や東半部の付近は長方形の区画を指向している様が見られた。しかし、調査区中央付近では小さな三角形や菱形の区画をはじめ不定形な区画が多く、最小の三角形の区画(X221、Y122)は2㎡ほどと極小であった。水田面は黒色粘質土で全体的に10cm内外の厚層があり、1号東西大畦畔の北側から上記の不定形な区画の部分にかけては、上面が茶褐色に変色した部分が認められ、鉄分の沈着によるものとみられた。また、この付近の水田面は凹凸が目立つ状況であったが、凹凸自体は風化しているようであった。調査区西半の中央部では、A s-B層で直接覆われた掘削痕が集中する鋤跡(X219、Y121)が検出された。幅10cm強の平らな刃先を持つ鋤状の耕具によるもので、50個以上の痕跡が残る、ほとんどが西あるいは北西方向からの掘削であった。南側の途切れた小畦畔の状況と合わせてみると、畦畔を崩す行為がなされていたと考えられる。水口：人畦畔以外に4カ所(水口2～5)で確認されたが、前記の不定形な区画群の付近にまとまるように検出されている。遺物：調査区の北辺付近(X217・Y115、第6図A区1)で灰釉陶器Ⅲ(第30図)の破片が出土したが、洪水起源とみられる灰黄褐色シルト質土の堆積する浅い窪地部分からの出土であった。



第 6 图 A 区全体图及び断面图



第7図 A区Aa-B下水田断面図

2 土 坑

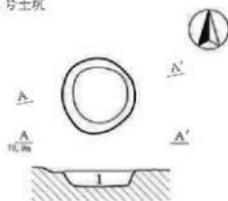
D-1号土坑 (第8図、P.L.3)

位置:調査区東半部の南端付近、X224、Y126で検出された。重複:A s-B層を掘り込みA s-B下水田面を切っていた。規模・形態:やや不整な円形で、長径61cm、深さは13cmを計る。断面形は円筒形である。埋没状態:B軽石を多量に含む埋土で、A s-Bの降下後あまり時間を経ない段階での掘削とみられる。遺物の出土はなかった。時期:埋土の状況から中世とみられる。

D-2号土坑 (第8図、P.L.3)

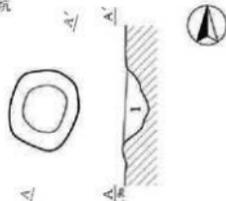
位置:調査区西半部の中央部 X221、Y122で検出された。重複:A s-B層を掘り込みA s-B下水田面を切っていた。規模・形態:長径63cmの楕円形で、深さは20cmほどである。断面形はなべ底状を呈していた。埋没状態:埋土中にはB軽石を多量に含み、D-1号土坑と同様であった。遺物はなかった。時期:埋土の状況から中世とみられる。

D-1号土坑



1 褐色土 A s-B多量に含む。しりりあり。粘性土B混1層

D-2号土坑



1 褐色土 A s-B多量に含む。しりりあり。粘性土B混1層

第8図 A区土坑

3 溝 跡

W-1号溝跡 (第6・9図、P.L.3)

位置:調査区東半のX224~226、Y125~127で検出された。重複:A s-B層を掘り込み、1号東西大畦畔などA s-B下水田を切っている。規模・形態:L字形にほぼ直角に走る北辺部と西辺部で、北辺部9.3m、西辺部7mが検出された。上幅は40cm前後で、深さは最深部でも25cmほどと浅かった。断面形は箱状で、底面には掘削痕の凹みがみられた。埋没状態:埋土中はB軽石と粘質土を多く含んでいた。時期:埋土の状況から中世とみられる。

W-2号溝跡 (第6・9図、P.L. 2)

位置：調査区南東端部 X224・225、Y127 で、1号東西大畦畔に沿って検出された。重複：第Ⅳ層よりも下位からの掘り込みである。規模・形態：調査区東壁から2.7mの長さが検出されたが、西側はすでに畦畔とともに削平を受け残存していなかった。上幅は40～60cmほどで、深さは5cm弱ほどの浅い皿状の断面形であった。人畦畔に伴う溝と考えられる。埋没状態：A s Bの降下で直接埋没しており、流水の痕跡は認められなかった。

時期：1号東西大畦畔と同じく平安時代末である。

W-3号溝跡 (第6・9図、P.L. 4)

位置：調査区東半部 X226・227、Y121～124 で南北方向に縦断して検出された。重複：第Ⅳ層よりも下位からの掘り込みで、第Ⅱ層を切っている。規模・形態：ほぼ南北の走向で、14mの長さが検出された。南北両端は調査区外へ続いている。北端部では上幅60cm、深さ30cmほどであったが、南端側は幅20cm、深さは数cmほどとなっていた。断面形はなべ底状を呈する。埋没状態：B 軽石を多く、粘質土の小ブロックを少量含んでいた。遺物：軟質陶器や陶器の小片が数点出土した。時期：埋土や遺物の状況から中世とみられる。

W-4号溝跡 (第6・9図、P.L. 4)

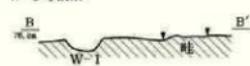
位置：調査区の東端 X227・228、Y120・121 で検出された。重複：第Ⅳ層よりも下位からの掘り込みで、第Ⅱ層を切っている。規模・形態：北西から南東方向へやや東に湾曲しながら走る。両端とも調査区外へ続いている。長さ5m弱が検出され、規模は上幅40～25cm前後、最深部で5cmほどであった。断面形は、浅い皿状である。埋没状態：A s-Bの降下によって埋没している。時期：埋土の状況から、A s-B 下水田と同時期の平安時代末である。

W-1号溝跡

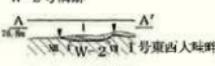


- 1 黄褐色土 A s-B、粘質土質土を多量に含む。灰の少量に富み、しまり、軽石やあり。
- 2 黄褐色土 硬質土質土ブロックを少量含む。しまり、軽石やあり。

W-1号溝跡



W-2号溝跡



- 1 A s-B 泥状埋土

W-3号溝跡

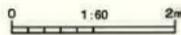


- 1 灰黄褐色土 A s-Bを多量含む。灰分豊富。しまり、軽石やあり。
- 2 灰黄褐色土 A s-B。硬質土質土ブロックを少量含む。しまり、軽石やあり。

W-4号溝跡



- 1 A s-B 泥状埋土



第9図 A区溝跡断面図

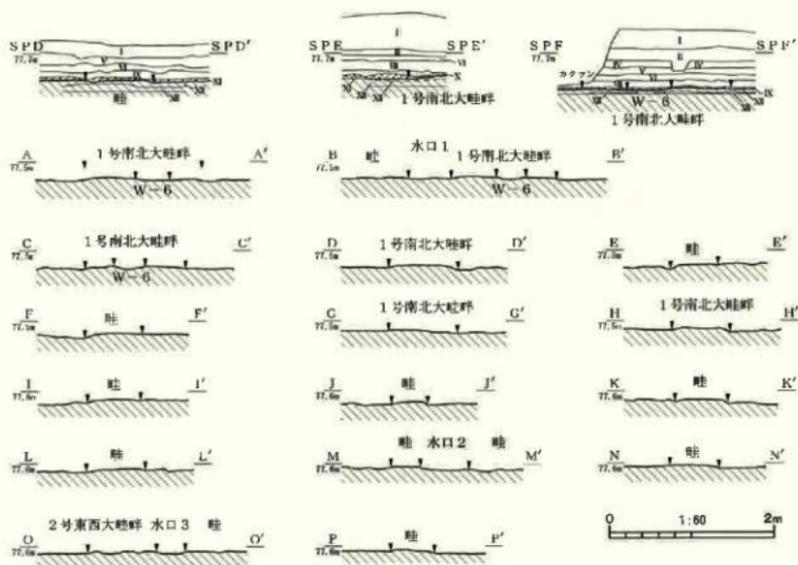
2 B区

A区の北方85mほどに位置する。A区と同じく調査区の東辺部を南北方向に排水路が縦断し、さらに中央部には幅5mの道路が東西に走っているため調査区は4分割された。排水路の東側はやはり耕地整理で大きく削平されて現土の上では60cmほどの段差があり、東側ではA s-B層(Ⅱ層)や第Ⅱ層までがすでにほとんど失われていた。その他の部分はA s-B層は全体に良好に遺存していた。

1 A s-B層下水田跡 (第10・11図、P.L. 4・5)

位置：調査区のほぼ全域で検出された。重複：D-3号・4号土坑、W-5号溝跡に切られている。地形：

水田面である第Ⅲ層の標高は、北西端の最高所で77.60 mほど、残存部の南東端部は77.25 mほどで、本来はゆるやかな傾斜地形で、全面に水田が広がっていたとみられる。畦畔：調査区南半部の中央 (X212、Y82～92) を縦断して約41.5 mにわたって1号南北大畦畔が検出された。わずかに屈曲するものの走向はほぼ南北方向であった。規模は、W-5号溝と重複する部分の南側半分ほど (Y88～92) は幅が1.5～1.2 mほどと広く、その中央部にはW-6号溝跡が走っていた。これに対して北側 (Y82～87) は45 cm～1 mの幅と縮小されていた。高さは最高部でも5 cmほどしかなかったが、これは他の畦畔全体でも同様の遺存状況であり、As-B層の被覆状態からみると後世の削平などによる結果ではなく、本来As-Bの降下時点で畦畔はあまり高い状態になかったことによるものと考えられた。W-6号溝跡は大畦畔に伴うものでAs-B層に直接覆われていた。東西の小畦畔が交差するように派生していたが、それらの走向は一定していなかった。西側に水口1 (X212、Y90) が設けられていた。調査区北辺部 (X207～210、Y73) では2号東西大畦畔が13 mの長さで検出された。小さな屈曲はあるがほぼ東西方向に走行していた。幅は0.5～1.5 mと小畦畔よりやや幅広程度の規模で、高さは最高部でも5.5 cmほどであった。西瀬部付近で南北の小畦畔が交差する部分 (X207、Y73) が1カ所検出されたが、後世の多数の大小のピットが集中し掘乱されていた。また北側に水口3 (X209、Y73) が設けられていた。その他の小畦畔ではやや幅広のものが多い状況であった。畦畔の盛り土はすべて水田面と同じ第Ⅲ層黒色粘質土層であった。区画：全形が検出された区画はなかった。総じて整然とした形状とはなっていないが長方形を基調としており、一区画の面積が広く変則的な小区画はみられなかった。水田面の第Ⅲ層は、一部に鉄分の沈着により橙褐色に変色した部分が認められた。水口：大畦畔以外に1カ所水口2 (X208、Y75) が確認されたのみであった。遺物：水田面の2カ所で小礫S-6 (X212、Y91)・7 (X212、Y84) が検出された。10 cm強ほどの輝石安山岩で、第Ⅲ層中に入り込んでいたが特に掘り込みなどは認められなかった。



第11図 B区A-S-B下水田断面図

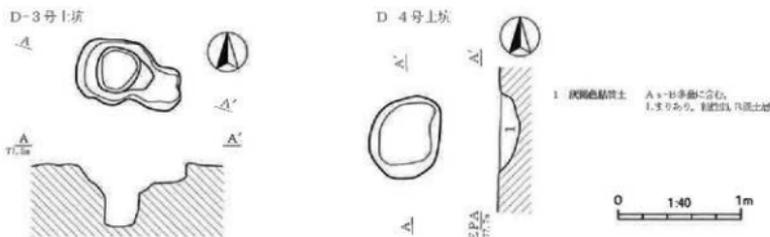
2 土坑

D-3号土坑 (第12図, P.L. 5)

位置: 調査区南半部のX211、Y87で検出された。重複: A s-B 下水田の東西方向の小畦畔を切っていた。規模・形態: 平面形は東西に長い瓢箪形であるが基本は西半の円形部分である。東半部は浅く二段掘りになっている。長軸で87cm、深さは円形部が最深50cm、二段掘り部で15cmを計る。円形部の断面形は上部が開く漏斗状であった。埋没状態: B軽石を多量に含む埋土で、遺物はなかった。時期: 埋土の状況から中世とみられる。

D-4号土坑 (第12図, P.L. 5)

位置: 調査区北端X208、Y73で検出された。重複: A s-B 下水田面を切っていた。規模・形態: 南北にやや長い楕円形で、長径は70cm、深さ15cmを計る。断面形はなべ底状を呈する。埋没状態: B軽石を多量に含む埋土であった。時期: 埋土の状況から中世とみられる。



第12図 B区土坑

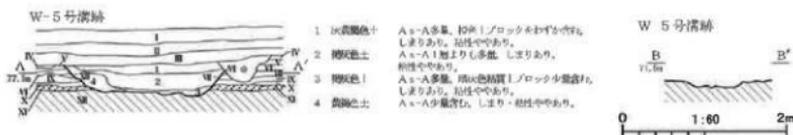
3 溝跡

W-5号溝跡 (第10・13図, P.L. 5)

位置: 調査区南半の中央付近X210～214、Y87・88で検出された。重複: 1号南北大畦畔を切っている。規模・形態: 西南西から東北東方向へ、17mの長さが検出された。両端部は調査区外へ続く。検出面での規模は、西半部は掘り直したため幅が広く上幅1.4m前後、東端部では上幅20cm狭程度となり、深さは最深部で50cmほどであった。断面形は皿状で、底面は全体として東へゆるやかに下がっていた。埋没状態: 掘り込み面は第V層より上部からであり、埋土中にはA軽石を多量に含んでいた。遺物: 軟質陶器や陶器の小片が少量出土した。時期: 掘り込み面や埋土・遺物の状況から近世とみられる。

W-6号溝跡 (第10・11図, P.L. 5)

位置: 1号南北大畦畔に付随して中央を走る (X212、Y88～92)。規模・形態: 調査区南端から14mほど北へ延びて一旦途切れ、65cmほど間をおいて再び3.5mほど続いていた。北端はW-5号溝に切られていて不明である。上幅40cm内外で、深さは最深部で6cmほどと浅く、断面形は皿状であった。底面は全体として南へゆるやかに下がっていた。埋没状態: A s-Bの降下で直接埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。時期: 1号南北大畦畔と同じ平安時代末である。



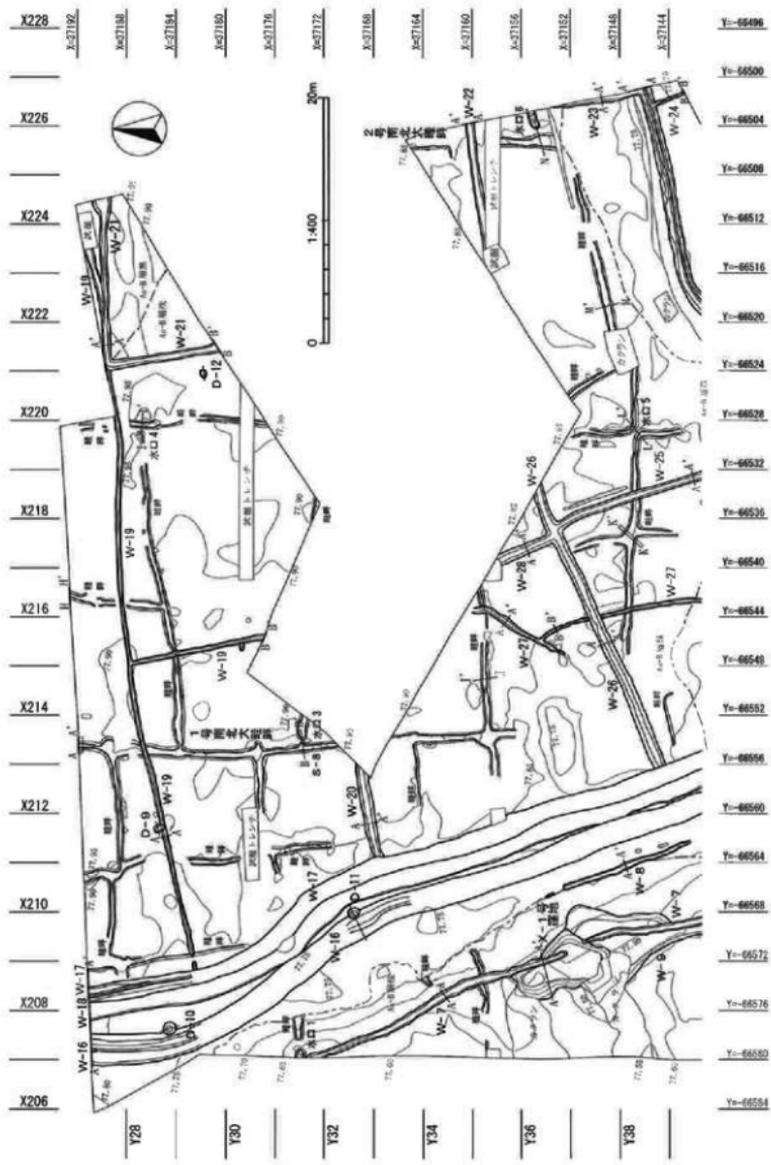
第13図 B区溝跡断面図

3 C 区

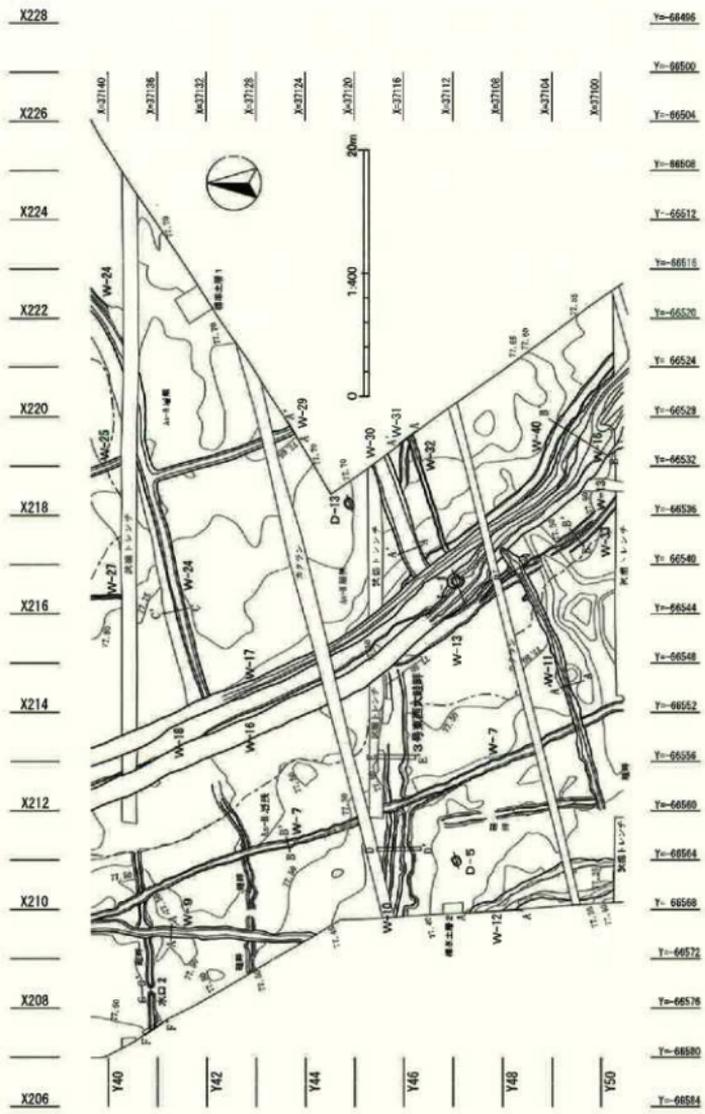
調査区の北端から南端まで約140mあり、調査前の標高は北端で78.3m、南端で77.7mと60cmほどの比高差があった。第Ⅱ層(A s-B層)を取り除いた第Ⅲ層(黒色粘質土層)上面では南北の高差差は地表面と同程度であったが、調査区の東半部は本来微高地状の地形で、調査区中央部を北西から南東に向かう浅い谷地形が入っていたことが明らかになった。このため調査区の西半側の谷部ではA s-B層が良好に残っていたものの、中央部東側付近はA s-B層はすでに削平されて失われており、調査区の北東部も薄く残存する程度であった。

1 A s-B層下水田跡 (第14・15・16・17図、P.L. 6~9)

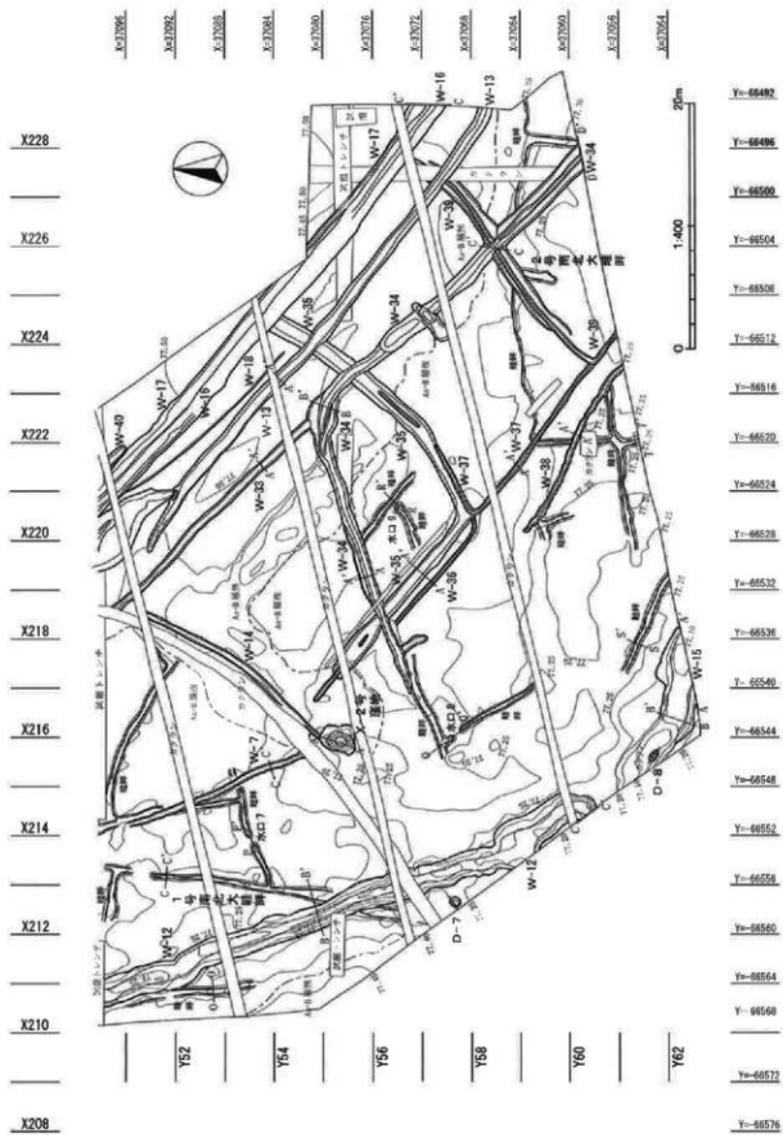
位置: 調査区中央から南東部のA s-B層が欠われていた部分を除いて、ほぼ全域にかけて検出された。本末は調査区全体に広がっていたと考えられる。重複: 水田と同時期のW-9号・10号・12号・15号・27号・31号・38号溝以外はすべて後世の遺構である。また、W-10号・31号溝以外の上記の溝は水田の畦畔を切っていた。地形: 前記のように水田面の第Ⅲ層上面は調査区西半では谷状地形となっており北西で標高77.80m、南端で77.20mであった。北東部は78.00mほどと高くなっていた。畦畔: 調査区の中央西寄りX213ライン付近に1号南北大畦畔(第14・16図)が検出された。B区の1号南北大畦畔の北側延長部分にあたる。中央の削平を受けた部分では確認できなかったが、北半側Y27~36で35.5m、南半側Y50~56で26mが検出された。北半側はほぼ南北方向の走行であるが、南半側は谷部にあたるためか東に振れた走向であった。幅は北半側の1.4mが最も広く、南半側の49cmが最も狭い。高さは最も高い部分でも5.8cmほどであった。北半側Y31には水口3が検出され、その南の畦畔上には小角礫(S・8)が1点埋もれていたが、掘り込みなどは確認されなかった。またこの付近には人の足跡が点在していたが、規則性はみられなかった。調査区東辺部のX225ライン付近では、北のY34~36(第14図)と南端のY59(第16図)の2か所で南北方向の規模の大きい畦畔が検出された。北の部分は南側は削平されていたが長さ12mまで残存していた。最大幅が1.4mで高さは9cm弱の規模があった。また南の部分では検出長は3m弱で、最大幅が1mほどであった。北側は削平を受けており、南は途切れていて延長部は検出されなかった。これらは部分的でもあったため調査時点では認識し得なかったが、大畦畔と考えられ2号南北大畦畔とした。調査区の中央部では、西の谷部側Y46ライン付近で3号東西大畦畔(第15図)が検出されたが、東側はすでに削平されていて不明であった。検出長は20.5mでほぼ東西方向に走り、幅は最大部で2.6m、高さも最高8.6cmと大規模であった。畦畔の中央にはA s-B層に直接覆われたW-10号溝が走っていた。この延長上の調査区東端X219付近では同じくA s-B層で埋没したW-31号溝が検出されており、東西人畦畔に伴っていたものと考えられる。小畦畔は谷部で検出されたものは比較的高さが残っていた。畦畔の盛り土は水田面と同じ第Ⅲ層(黒色粘質土層)であった。断面図M-M'(X222、Y37)の部分では畦畔内に小礫(S-9)が埋まっていた。区画: 区画全体が捉えられた水田面は数枚程度であった。区画の形態は3号東西大畦畔を挟んで南北で大きく異なっていた。北半部は小畦畔が東西・南北方向を指向しており、比較的整然とした長方形の区画が連続していた。南半部は不明な部分が多いが小畦畔の走向の乱れが著しく、不定形な区画が連続していたとみられる。区画自体にはさほど狭小な水田は認められなかった。水田面の状況は、浅く小さな窪みが疎にする程度の比較的平坦なものが多かったが、南半部の中央付近では凹凸の顕著な部分が認められた。またこの部分では鉄分の沈着によるものか、水田面の第Ⅲ層上面が茶褐色を呈している状況が認められた。水口: 全体に9カ所(水口1~9)で検出された。水口5(X220、Y38)では北西から南東の区画へ流下させていた。遺物: 調査区の北辺部で、水田上面から土師質土器(第30図)の破片が出土した。



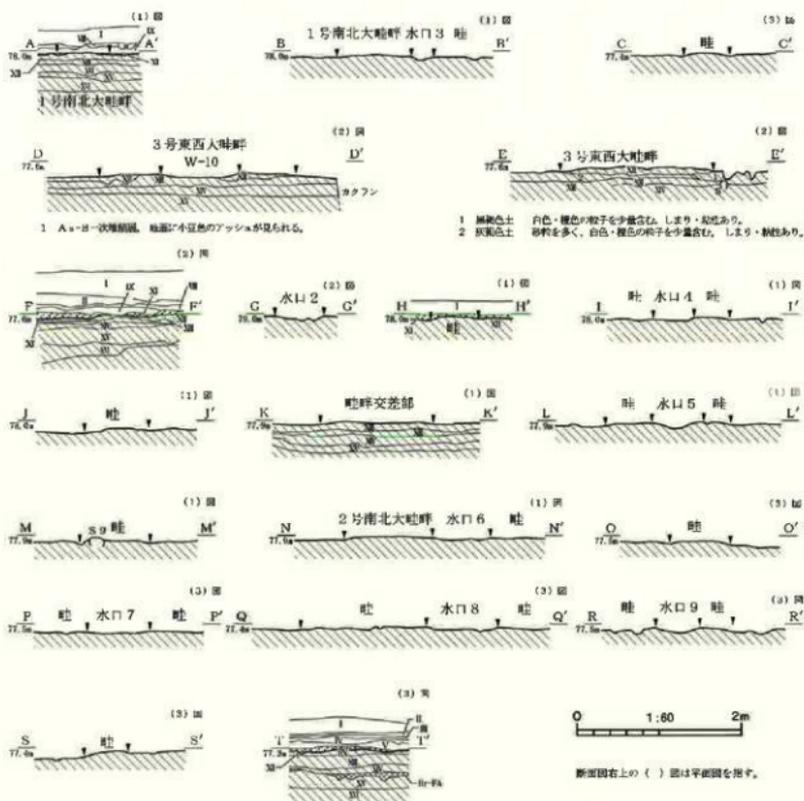
第 14 图 C 区平安时代以降全体図及 U 断面图 (1)



第15図 C区平安時代以降全体図及び断面図(2)



第16図 C区平安時代以降全体図及び断面図(3)



第 17 図 C 区 A-S-B 下水田断面図

2 土 坑

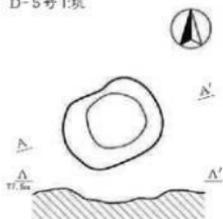
D-5号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区中央の西部、X211、Y47 で検出された。重複：A-S-B 下水田面を切っている。規模・形態：平面は隅丸長方形で、東西の最長部が 80cm、南北 60cm、深さは 13cm ほどである。断面形は皿状で、底面にはやや凹凸が目立った。埋没状態：埋土は B 軽石を多量に含む灰褐色土であった。時期：埋土の状況から、中世とみられる。

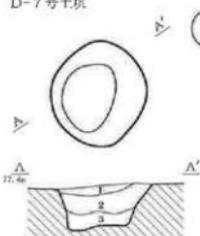
D-7号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区の南西部、X212、Y57 で検出された。重複：A-S-B 下水田面を切っている。規模・形態：長方形で、南北の最長部が 87cm、東西は 77cm ほどである。深さは 36cm ほどあり、やや上部が開く円筒状の断面形であった。埋没状態：埋土は B 軽石中に暗褐色土のブロックを少量含むものであった。時期：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

D-5号土坑

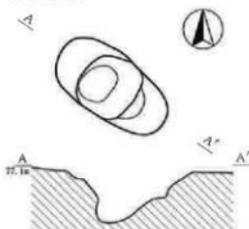


D-7号土坑



- 1 褐色土 A-a: 中に暗褐色土ブロック多数、黄褐色土ブロック少量含む。しまりややあり、粘りややあり。
- 2 褐色土 A-a: 中に暗褐色土ブロック少量含む。しまりややあり、粘りややあり。
- 3 褐色土 A-a: 中より、暗褐色土ブロック少量含む。しまりややあり、粘りややあり。

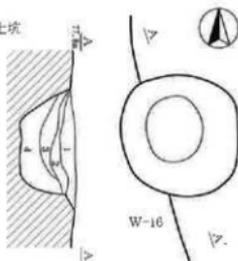
D-8号土坑



D-9号土坑

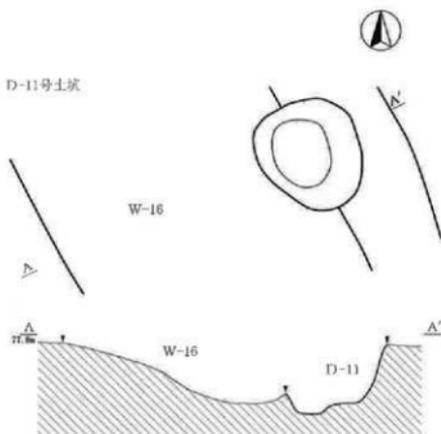


D-10号土坑

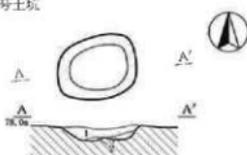


- 1 黄褐色土 A-a: 中多量、粘り強。しまりややあり、粘り強。
- 2 褐色土 A-a: D-10に比べ黄褐色土ブロック多量に代り、粘り強。しまりややあり、粘り強。
- 3 褐色土 A-a: 中多量、暗褐色土ブロック少量含む。しまりややあり。
- 4 褐色土 A-a: D-10に比べ暗褐色土ブロック少量含む。しまりややあり。

D-11号土坑

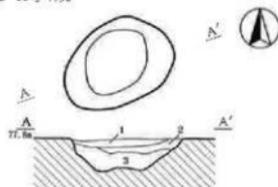


D-12号土坑

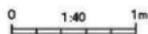


- 1 黄褐色土 A-a: D-10体、粘り強。しまり・粘り強。
- 2 褐色土 A-a: 中多量、褐色土多量に含む。しまり・粘りややあり。

D-13号土坑



- 1 暗褐色土 A-a: D-10・黄褐色土ブロックを多数に含む。しまりややあり、粘り強。
- 2 褐色土 A-a: 中多量、黄褐色土ブロックを少量含む。しまり・粘りややあり。
- 3 褐色土 A-a: 中多量、黄褐色土ブロックを少量含む。しまりややあり、粘りややあり。



第18図 C区土坑

D-8号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区の南西端、X215、Y61で検出された。重複：洪水層とみられる黄灰褐色シルト質土で埋まった窪みの下部で検出され、A s-B下水田面を掘り込んでいた。規模・形態：上面は長円形であったが、二段掘り状になっており、内部は凹形を呈する。上面の長径が88cm、内部の凹形部の径が47cm、最深部が42cmほどを計る。断面形は上部は皿状で、下部はU字状で斜めに掘り込まれていた。底面はやや凹凸が見られた。埋没状態：B軽石を多量に含んだ埋土であった。時期：埋土の状況から中世とみられる。

D-9号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区の北西部、X211、Y28で検出された。重複：W-19号溝を切っていた。規模・形態：倒卵形の平面で、南北の最長部が87cm、深さは15cmほどである。断面形はなべ底状を呈する。埋没状態：B軽石を多量に含む埋土であった。時期：埋土の状況から中世とみられる。

D-10号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区北西端のX207、Y28で検出された。重複：W-16号溝の肩部を切っていた。規模・形態：やや不整な円形で、径1m前後を計る。深さは45cmほどで、断面形は上部が開き気味の円筒状であった。埋没状態：埋土は、B軽石が主体のものであった。わずかに湧水がみられた。時期：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

D-11号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区北西部のX210、Y32で検出された。重複：W-16号溝の肩部を切っていた。規模・形態：平面形は倒卵形状で、最長部が94cm、深さは55cmほどであった。円筒状の断面形で、底面はやや凹凸が見られた。埋没状態：埋土はD-10号土坑と同様で、B軽石を主体とする状況であった。やはりわずかに湧水があった。規模・形態も含め前記のD-10号土坑と非常に似た様相であり、W-16号溝との位置関係も合わせ考えると、この2基は湧水量の多いW-16号溝を利用した水溜めの目的であったものではないかと考えられる。後述するI-1号井戸も規模はやや大きいと同様の立地形態である。灌漑用の簡易な貯水穴とみられる。遺物：混入の土師器小片が少量出土している。時期：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

D-12号土坑 (第18図、P.L.10)

位置：調査区北東部のX220、Y29で検出された。重複：A s-B下水田面を切っている。規模・形態：隅丸長方形の平面形で、長辺が65cm、深さは14cmほどを計る。皿状の断面形で、底面には凹凸が見られた。埋没状態：埋土中にはB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

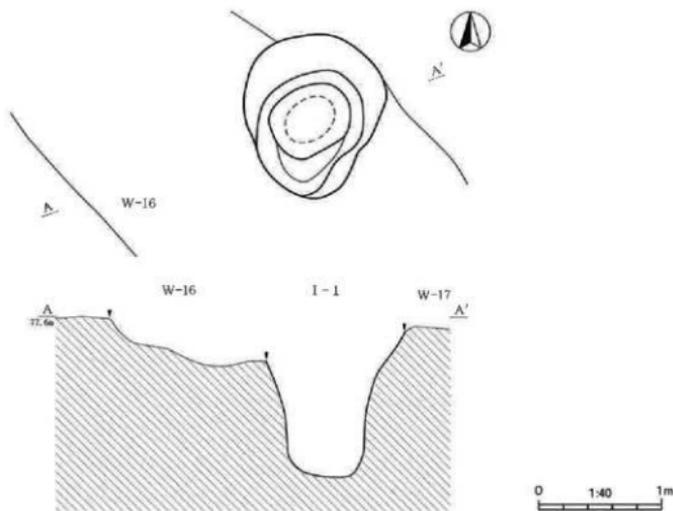
D-13号土坑 (第18図、P.L.11)

位置：調査区中央の東辺、X218、Y44で検出された。重複：削平を受けている部分であったが、A s-B下水田面を切っていたと考えられる。規模・形態：倒卵状の平面形で、長径93cm、深さは25cmほどを計る。上部が開き気味の円筒状の断面形を呈する。底面にはやや凹凸がみられた。埋没状態：埋土中には多量のB軽石を含んでいた。遺物：混入の土師器小片が数点出土している。時期：埋土の状況から中世とみられる。

3 井戸跡

I-1号井戸跡 (第19図、P.L.11)

位置：調査区中央部のX216、Y47で検出された。重複：W-16号溝と重複するが新旧関係は不明。規模・形態：小規模な素掘りの井戸で、平面形は円形、断面形は上部がゆるやかに開き、下部は円筒形の漏斗状であった。上面はW-16号溝の肩部との取積のため明確ではないが径1.4mほどあったものと考えられる。底面は径40cmほどで、ほぼ平坦であった。深さは1.2mで、湧水はあるものの少量で底面から20cm程度の湧水量であった。現状では常時頻繁に生活に使用できる状態ではなかった。重複するW-16号溝との位置関係や埋土の状況からみ



第19図 C区井戸跡

ると、上流側で湧水がありある程度の水流があったとみられるW-16号溝から引水・貯留して、灌漑用に利用していた可能性が考えられる。埋没状態：B軽石を多量に含む埋土が主でW-16号溝の埋土と同様であり、同時に存在した可能性がある。遺物：混入の土師器小破片が数点出土したのみである。時期：埋土の状況から、A s-B降下からあまり時を経ない平安末から中世の間割とみられる。

4 溝跡

W-7号溝跡 (第14・15・16・20図、P.L.11)

位置：調査区西半部で、Y31からY54にかけて検出された。重複：A s-B下水田、X-1号窪地を切り、W-11号溝に切られていた。規模・形態：北北西から南南東方向に、やや屈曲部分もあるが直線的に走り、長さ98mが検出された。北端は調査区外へ続いている、南端は攪乱のため不明確であったがX-2号窪地に接続して終わっていたとみられる。上幅は50～60cm、深さ3～7cmほどで、断面形は重状である。底面は細かい凹内が目立った。底面の比高は南端側で30cmほど低かった。埋没状態：B軽石を多量に含む埋土であった。遺物：混入品の土師器・陶器の小片が数点出土した。時期：埋土の状況から、平安時代末から中世とみられる。

W-8号溝跡 (第14・20図、P.L.11)

位置：調査区北半の西側、X210～211、Y36～39で検出された。重複：A s-B下水田面が削平されている部分であったが、これを切っていたとみられる。規模・形態：北北西から南南東方向に、長さ約11mが検出され、両端は浅くなって終わっていた。上幅40～50cm、深さ10cm前後を計り、U字状の断面形である。埋没状態：埋土中にはB軽石を多量に含んでいた。遺物：混入品の土師器小片が数点出土した。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-9号溝跡 (第14・15・20図、P.L.11)

位置：調査区北半の西辺、X208・209、Y37～44にかけて検出された。重複：X-1号窪地と同時期で、B下水田の畦畔を切っており、W-7号溝に切られていた。規模・形態：X-1号窪地から派生して、直線的に長さ29mほど南下し、調査区外へ続いている。北端側はX-1号窪地との関係から幅4mほどの広さがあるが、急速に狭まって60cm～1mの幅となっていた。深さは北端部で10cm強で、南端は8cmほど、断面形は浅い皿状である。北端と南端の底面は比高差10cmほどで、全体としては南に下がっていた。埋没状態：A s-Bの降下で直接埋没しており、底面には水田面と同様に小豆色の灰層が認められた。時期：平安時代末。

W-10号溝跡 (第15・17図、P.L.8)

位置：3号東西大畦畔の中央部に検出された。重複：W-7号溝に東端部をわずかに切られていた。規模・形態：3号東西大畦畔の検出範囲の西半部のみ存在し、東半部には認められなかった。西側は調査区外へ延びていく。検出長は9mで、上幅は75cm～1.2m、深さは最深部で8cmほど、断面形は皿状を呈する。埋没状態：A s-Bで直接埋没していた。時期：埋土の状況から平安時代末である

W-11号溝跡 (第15・20図、P.L.11)

位置：調査区中央部 X212～217、Y48・49にかけて検出された。重複：A s-B下水田や、W-7号・13号・16号・33号溝を切っていた。規模・形態：東北東から西南西の走向で、北へわずかに湾曲している。約23mの長さが検出され、東端はW-16号溝に接する部分からはじまり、西端は徐々に浅くなって消えていた。上幅は出入りが多く50cm～1mほどで、深さはW-16号溝に接する部分へ深くなり30cmほどであった。断面形はU字形で、底面の比高差は約20cmあった。埋没状態：埋土はB軽石を多量に含み、最下部には砂層が認められた。水路と考えられる。遺物：混入の土師器小片が数点出土した。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-12号溝跡 (第15・16・20図、P.L.11)

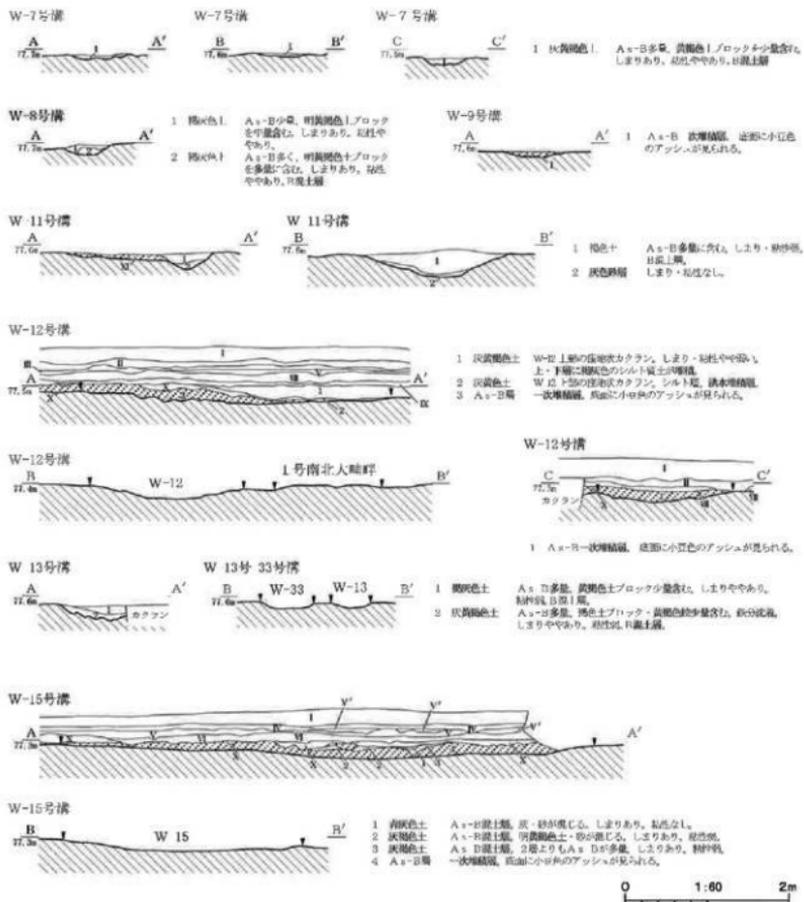
位置：調査区南半の西辺、X210～214、Y47～60で検出された。重複：A s-B下水田の畦畔を切っていた。規模・形態：北北西から南南東の走向で、南端部は西へ折れて調査区外へ続く可能性がある。検出長は56mであった。全体には直線的であったが、部分的に出入りの多い不整な形態で、上幅は1.5m～3.4m前後であった。深さも場所により5～20cmほどと様ではなく、断面形は非常に浅い皿状であった。底面の比高差は南端が20cmほど低くなる程度であった。埋没状態：全体がA s-Bの降下で埋没しており、底面には降下当初の火山灰が認められた。時期：埋没状況から平安時代末である。

W-13号溝跡 (第15・16・20図、P.L.11)

位置：調査区中央部から南半部の東辺、X215～228、Y45～58にかけて検出された。途中一部は削平を受けて消滅していた。重複：A s-B下水田を切り、W-11号・35号・39号溝に切られている。規模・形態：W-16号溝との接点から南東方向に調査区南半を縦断し、さらに調査区外へ延びていた。検出長は77mほどであった。規模は北端では10cm弱と浅く、南東へ向かって拡大し、上幅は1.1m、深さ20cmほどとなっていた。断面形は皿状で、底面は凹凸が目立っていた。埋没状態：埋土中には多量のB軽石を含んでいた。遺物：北半部からは土師器や須恵器の小片が20点ほど、南半部からは多量の土師器片が出土したが、いずれも混入によるものであった。時期：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

W-14号溝跡 (第16図、P.L.12)

位置：調査区南半の X216～218、Y51～53で検出された。重複：X-2号窪地を切っている。規模・形態：北東から南西方向に、現代の攪乱溝に沿うように弧状に走っており、両端は徐々に浅くなって消滅していた。検出長は約17mで、上幅は約50cm前後、深さは最深部で10cm前後と小規模であった。断面形は皿状で、底面は凹凸がみられた。埋没状態：埋土はB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。



第20図 C区溝跡断面図(1)

W-15号溝跡 (第16・20図、P.L. 12)

位置：調査区南西端部 X216・217、Y61で検出された。重複：北端は、後世の洪水層とみられる黄灰褐色のシルト質土で埋まった障みに切られていた。規模・形態：西北西のW-12号溝の方向から南東に向かう走行で、9mほどまで検出され南端は調査区外へ延びていた。不整な形態で上幅は2.5～4mほど、深さは南へ深くなり最深部で20cmほどであった。断面形は皿状を呈していた。埋没状態：全体がA-Bの降下で埋没していた。規模・形態も合わせてW-12号溝と同種の遺構と考えられる。時期：堀土の状況から平安末である。

W-16号溝跡 (第14・15・16・21図、P.L. 6・11・12・15)

位置：調査区の北西端から南東端 X207～227、Y27～57にかけて、調査区を縦断して検出された。重複：3号東西大畦畔を切り、W-17号・18号溝に切られている。規模・形態：北西から南東へ、途中二度屈曲しな

がら東へ湾曲して走っていた。両端はさらに調査区外へ続いていた。約 152 m の長さが確認できたが、半分以上は底面まで検出できなかった。上幅は北端部が最大で 2.5 m、南端部では 1.5 m ほどとなっていた。深さはほぼ一定で 1 m ほどであった。調査区北壁の七層断面では、掘り込み面は第Ⅱ層よりも上層であることが知られた。断面形は二段掘り状で、上部は大きく広がり、下部は幅広の U 字状を呈していた。北端部付近 (X207 ~ 210・Y27 ~ 34) ではゆるやかに S 字状に屈曲しており、この付近では底面から湧水がみられた。調査区中央付近 (X215 ~ 272・Y46 ~ 51) の肩面部では溝幅が広がり、枝分かれ上の突出部が確認された。この突出部基部の底面には西壁側に 15cm 内外の礫 4 点が並び置かれた状態で検出された。簡易な塚のような構造物が設けられていた可能性がある。突出部は急激に浅くなり、南方へは続かなかった。本溝跡は、西側の谷部と東側の微高地の地形の変換線に削整されており、調査区内で最大の規模の溝跡であり、後世の W-17 号溝が全く走行を同じくしていることや、東西方向の溝跡がいずれも本溝跡を起点あるいは終点としているとみられることから、その後の土地利用において重要な基壇となったものであることがうかがえる。埋没状態：断面の観察から少なくとも 1 回以上は掘り直しが行われたとみられる。埋土は B 軽石を主体とする土層で、下層には洗砂層の堆積がみられ水路跡と考えられた。遺物：北端部では土師器や陶器の破片が少量、中央部では土師器破片が多数、東端部では土師器と陶器などの破片が多数出土している (第 31 図) が、土師器については混入品であった。時期：埋土や遺物の状況から平安末から中世とみられる。

W-17号溝跡 (第 14・15・16・21 図、P.L. 6・11・12・15)

位置：調査区の北西端から南東端、X208 ~ 227、Y27 ~ 56 にかけて、W 16 号溝と並走して調査区を縦断していた。重複：W-40 号溝に切れ、A s-B 下水田の畦畔、W-16 号・18 号・20 号・24 号・26 号・30 号・32 号溝を切っていた。規模・形態：2 か所の肩面部も含めて W-16 号溝と全く併行の走向で、検出長も同じく 152 m である。底面までの掘り下げは部分的にとどまった。数回の掘り直しが行われたようで、最終的な掘り込み面は第Ⅳ層か第Ⅲ層であった。掘り込み面での上幅は北端部では 2 m 近い幅であった。深さも北端部が深く約 1 m で、南端部では 50 cm ほどであった。断面形は二段掘り状で、上部は漏斗状に開き下部は浅い U 字形であった。埋没状態：A 軽石を多量に含む埋土であった。遺物：北端部では土師器、須石器、軟質陶器や陶器の破片が少量し、明治 15 年の銅貨も出土した。中央部では土師器破片が多数、陶磁器片 (第 31 図) が少量出土し、東端部では陶器片が少量出土している。土師器や須石器片は混入品であった。時期：埋土や遺物の状況から近世から近代とみられる。

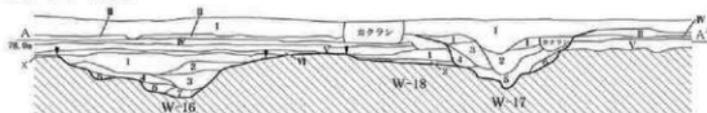
W-18号溝跡 (第 14・15・16・21 図、P.L. 12)

位置：調査区の北西端から南東、X207 ~ 223、Y27 ~ 54 にかけて、W 16 号・17 号溝の間を中心に検出された。重複：W-16 号溝を切り、W-17 号溝には切られていた。規模・形態：非常に浅く、西壁側がかろうじて残っていた程度のため不明な点が多い。東壁側は W-17 号溝とほぼ重なっていたとみられる。深さは最深部でも 10cm 程度であった。断面形は浅い幅広の形だが、西壁側の立ち上がりは明瞭であった。溝跡とするにはやや不明確であったが、W-16 号・17 号溝に併行していることから溝とした。埋没状態：埋土は B 軽石を多く含み、固く締まった土層であった。遺物：北端部では土師器、軟質陶器、陶磁器の破片 (第 31 図) が多数出土し、中央から南半部では土師器片多数と軟質陶器・陶磁器片が少量出土している。土師器については混入品であった。時期：埋土や遺物の状況から、中世から近世にかけてとみられる。

W-19号溝跡 (第 14・21 図、P.L. 12)

位置：調査区北辺部の X208 ~ 223、Y27 ~ 30 で検出された。重複：A s-B 下水田の畦畔を切り、W-17 号・21 号溝に切られている。規模・形態：T 字形に、東西方向に屈曲気味に走る部分とそれに直交する南北方向の部分からなる。東西方向は 55 m、南北方向は 11 m ほどの長さが検出された。東端部と南端部は調査区外へ続く。上幅 25 ~ 45cm、深さは 10cm ほどと小規模で、断面形は U 字状であった。底面は、全体としてはわずかに数 cm 西方へ下がるようであった。掘り込み面は第Ⅳ層よりも上位であった。埋没状態：A s-B を多く含む埋

W 16号・17号・18号溝



- W-16号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 D s-B中層、砂質 A s-B少量。褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 3 灰黄褐色土 灰黄土。砂質 A s-B中層、灰黄土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 4 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 5 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 6 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 7 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。

- W-17号溝**
- 1 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 2 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 3 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 4 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 5 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。

- W-18号溝**
- 1 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。

W 16号・17号・40号溝



- W-16号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 2 灰黄褐色土 暗褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 3 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 4 灰黄褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 5 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 6 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 7 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。
 - 8 褐色土 A s-B中層を含む。粘りやあり。

- W-17号溝**
- 1 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。
- W-40号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。しまりやあり。

W-16号・17号溝



- W-16号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 3 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 4 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 5 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。

- W-17号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。

W-19号溝



W-19号溝



- W-19号溝**
- 1 灰黄褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。

W-20号溝



- W-20号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 3 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 4 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。

W-21号溝



W 21号溝



- W 21号溝**
- 1 暗褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。

W-22号溝



- W-22号溝**
- 1 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。
 - 2 褐色土 A s-B中層、暗褐色土ブロック少量含む。粘りやあり。



第 21 図 C:K溝跡断面図 (2)

士であった。遺物：土師器・須恵器の小片、軟質陶器・陶器の小片が少量山上したが、土師器・須恵器は混入による。時期：中世とみられる。

W-20号溝跡（第14・21図、P.L.12）

位置：調査区北半のX211・212、Y32で検出された。重複：A s-B 下水出面を切って、W-17号溝に切られている。規模・形態：東から西方向にほぼ直線的約8mが検出され、東端は調査区外へ延びていた。上幅1m弱、深さ25cmほどの規模で、断面形は逆台形を呈する。底面はわずかに東へトがる。埋没状態：B軽石を多く含む埋土であった。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-21号溝跡（第14・21図、P.L.12）

位置：調査区北東部のX221～224、Y27～29で検出された。重複：W-19号溝を切っている。規模・形態：鋸形に南北・東西方向に走る。南北辺が9m、東西辺が13.5mまで検出され、南端・東端ともに調査区外へ続いていた。上幅50～75cmで、深さは20cm前後であった。断面形は逆台形を呈する。底面は東西辺から南北辺へわずかに低くなっていた。埋没状態：B軽石を多く含む埋土であった。遺物：常滑大甕の小片のほか、混入の土師器小片などが数点出土した。時期：埋土や遺物の状況から中世とみられる。

W-22号溝跡（第14・21図、P.L.13）

位置：調査区北半部X223～225、Y35で検出された。重複：A s-B 下水出面を切っていた。規模・形態：東西方向で10m強の長さが検出され、両端は調査区外へ続いていた。西側はW-26号溝に連続する可能性がある。上幅50～60cmで、深さは20cm前後、断面は逆台形であった。掘り込み面は第IX層より上部であった。埋没状態：B軽石を多く含む埋土であった。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-23号溝跡（第14・22図、P.L.13）

位置：調査区東辺のX226、Y36～38で検出された。重複：W-24号溝とは同時期とみられる。規模・形態：南北方向に約8mの長さが検出された。北端は調査区外へ延び、南端はW-24号溝に接続していた。上幅は50cm以上あり、深さは17cmほどとみられる。断面形は逆台形で、底面は南側へ傾斜していた。掘り込み面は第IX層より下であった。埋没状態：埋土はB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-24号溝跡（第14・15・22図、P.L.13）

位置：調査区中央部のX214～226、Y38～41で検出された。重複：W-17号溝に切れ、北壁側には段切り状の現代の溝が併行しており、上面が削平されていた。また、W-23号・29号溝とは1連の溝とみられる。形態：屈曲しながら東西方向に走り、東端付近ではT字状に南へ細い枝溝が続いていた。検出長は直線で52.5mであった。両端はW-17号溝に切られて終わり、東端は調査区外へ続くようであった。上幅は場所により60cm～1.1mと幅があり、南の枝溝状の部分では20～30cmであった。掘り直しが行われているため、東半部は2条の溝が並走するような形となっていた。深さは最深部で16cmほどであった。底面は両端でほとんど標高差はなかった。掘り込み面は第X層より上部であった。埋没状態：埋土はB軽石を多く含んでいた。遺物：東半部からは陶磁器片多数と、混入の土師器・須恵器小片数点が出土し、西半部では混入品の土師器・須恵器小片数点が出土した。時期：埋土や遺物の状況から中世とみられる。

W-25号溝跡（第14・15・22図、P.L.13）

位置：調査区北半のX217～218、Y36～40で検出された。重複：A s-B 下水出面を切り、南端は攪乱の溝や試掘トレンチで切られていた。北端はW-26号・28号溝に接続しており同時期とみられる。規模・形態：北北西から南南東の走向で、長さ15.5m程が検出された。南端はW-24号溝に接続していたものとみられる。上幅が60～70cmほどで、深さは20～30cmを計る。断面形は幅広のU字状であった。底面は南端側が5cmほど低くなっていた。埋没状態：埋土はB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-23号・24号溝



W-23号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土を含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性やや弱。

W-23号溝



W-24号溝

- 1 褐色土 A+B多量を含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-24号溝



W-25号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性やや弱。

W-26号溝

- 1 灰黄褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性やや弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、砂質土、鉄分沈着、しりり・粘性弱。

W-25号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、砂質土、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-27号溝

- 1 A+B一次堆積層

W-27号溝

- 1 褐色土 A+B多量を含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B土壌に、灰黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-28号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、砂質土、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-29号溝

- 1 褐色土 A+B多量を含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B土壌に、灰黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-30号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、砂質土、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-31号・32号溝

- 1 褐色土 A+B多量を含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 3 褐色土 A+B多量、灰黄褐色土ブロックを少量含む、しりりあり、粘性弱。
- 4 褐色土 A+B多量、灰黄褐色土ブロックを少量含む、しりりあり、粘性弱。

W-31号溝 (3号程度大堆積層付)

- 1 A+B一次堆積層

W-33号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土を含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-34号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 3 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 4 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-34号溝 (参考)

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 3 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 4 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 5 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 6 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 7 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-34号溝



W-34号溝 (畦畔を含む)



W-34号・39号溝

- 1 灰黄褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量を含む、鉄分少量沈着、しりり・粘性弱。
- 3 灰褐色土 A+B多量、白色砂を少量含む、しりりあり、粘性弱。
- 4 灰褐色土 A+B多量を含む、しりり・粘性やや弱。



W-39号溝 (OC)

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分少量沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分少量沈着、しりりあり、粘性弱。
- 3 灰褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、しりり・粘性弱。

W-34号溝 (参考)

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土中量、白色砂を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 灰褐色土 A+B多量、白色砂を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 3 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 4 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。
- 5 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分沈着、しりりあり、粘性弱。

W-35号・36号溝

- 1 灰黄褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量を含む、鉄分少量沈着、しりり・粘性弱。
- 3 灰褐色土 A+B多量、白色砂を少量含む、しりりあり、粘性弱。
- 4 灰褐色土 A+B多量を含む、しりり・粘性やや弱。

W-37号溝

- 1 褐色土 A+B多量、黄褐色土ブロックを少量含む、鉄分少量沈着、しりりあり、粘性弱。
- 2 褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、鉄分少量沈着、しりりあり、粘性弱。
- 3 灰褐色土 A+B多量、黄褐色土を少量含む、しりり・粘性弱。

W-38号溝

- 1 A+B一次堆積層 畦畔に小石のアップス。

第22図 C区溝跡断面図(3)

W-26号溝跡 (第14・22図、P.L.13)

位置：調査区北半のX213～218、Y36～38で検出された。重複：A s-B下水田面とW-27号溝を切っており、W-17号溝に切られていた。W 25号・28号溝とは同時期とみられる。規模・形態：東北東から西南西の走向で、25 mの長さが検出され、東端は調査区外へ続いていた。東方で検出されたW-22号溝に連続するとみられる。上幅は西端が広めで1.1 mほど、東端では80 cmほどであった。深さは27 cm弱と一定していた。断面形は幅広のU字状を呈する。底面は西側へ10 cmほど低くなっていた。遺物：混入の土師器・須恵器小片が数点出土した。埋没状態：埋土中にはB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-27号溝跡 (第14・22図、P.L.13)

位置：調査区北半のX215・216、Y35～40で検出された。重複：A s-B下水田の畦畔を切っており、W-26号溝に切られていた。規模・形態：北北東から南南西方向に8 m走り、途中で南方に枝分かれして16 m続いていた。端部はすべて浅くなって消えていた。上幅は20～60 cmと幅があり、深さは最大でも5 cm程度であった。断面形は皿状で、底面には細かい凹凸が目立った。埋没状態：A s-Bの降下で直接埋没していた。時期：埋土の状況から平安時代末である。

W-28号溝跡 (第14・15・22図、P.L.13)

位置：調査区北半のX217、Y35・36で検出された。重複：A s-B下水田面を切っていた。南端部が接続するW-25号・26号溝とは同時期とみられる。規模・形態：北北西から南南東の走向で、5 mの長さで検出された。北端は調査区外へ延びていく。上幅は90 cm内外、深さは20 cmほどであった。断面形は幅広のU字状を呈する。埋没状態：埋土中にはB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-29号溝跡 (第15・22図、P.L.13)

位置：調査区中央付近のX219、Y41～43で検出された。重複：北端が接続するW-24号溝と同時期とみられる。規模・形態：北北西から南南東方向の走向で、12 mの長さが検出された。南端は調査区外へ延びていた。規模は上幅が80 cm前後で、深さは10 cm内外であった。断面形は逆台形で、底面の比高差はほとんどなかった。掘り込み面は第IX層より下であった。埋没状態：埋土はB軽石を多く含んでいた。遺物：土師器・軟質陶器・陶器片が数点ずつ出土した。時期：埋土や遺物などの状況から中世とみられる。

W-30号溝跡 (第15・22図、P.L.14)

位置：調査区中央部のX216～218、Y45・46西側付近で検出された。重複：W-17号溝に切れ、W-31号溝を切っていた。規模・形態：西北西から東南東方向に10 mが検出され、東端は調査区外へ続いていた。上幅が1.6～1.9 m、深さは15 cmほどで、断面形は皿状であった。底面は平坦であった。埋没状態：埋土はB軽石を多く含むものであった。遺物：土師器小片多数と陶器片数点が出土した。時期：埋土の状況や遺物から中世とみられる。

W-31号溝跡 (第15・22図、P.L.14)

位置：調査区中央部のX218・219、Y46で検出された。重複：W-30号・32号溝に切られていた。規模・形態：東西方向で3.4 mほどの検出長であった。上幅が70 cm、深さは5 cm程度で、断面形は皿状であった。西の延長方向にW-10号溝及び3号東西大畦畔が位置する。埋没状態：A s-B降下層に直接埋没していた。時期：埋土の状況から平安時代末であり、位置から3号東西大畦畔の中央を走るW-10号溝の延長部と考えられる。

W-32号溝跡 (第15・22図、P.L.14)

位置：調査区中央部のX217～219、Y46で検出された。重複：W-17号・40号溝に切れ、W-31号溝を切っていた。規模・形態：西北西から東南東方向に10 mまで検出され、東端は調査区外へ続いていた。上幅が30～50 cm、深さは最深で15 cmほどで、断面形はU字状であった。掘り込み面は第VIII層より下位であった。埋没状態：埋土中にはB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-33号溝跡 (第15・16・22岡、P.L.14)

位置：調査区中央から東半部のX216～222、Y47～54で検出された。重複：W 11号溝に切られていた。
規模・形態：W-13号溝の北端付近から枝分かれして南東方向に走り、W-34号溝に接して終わっていた。途中一部が削平のため消失していたが、38mの長さが検出された。上幅30～75cm、深さは最深部で15cmほどであった。断面形はU字状を呈し、底面は南端側へ10cmほど下がっていた。埋没状態：埋土はB軽石を多量に含むもので、W 13号溝と共通であった。遺物：土師器小片が多数出土したが、すべて混入品である。時期：埋土の状況から平安時代末から中世とみられる。

W-34号溝跡 (第16・22岡、P.L.14)

位置：調査区東半部のX216～227、Y54～60で検出された。重複：A s B下水口面を切っており、W-35号・36号・39号溝には切られていた。規模・形態：西南西から東北東方向に24m走り、南東方向に折れて30mの長さまで検出された。南端は調査区外へ続いていた。規模は北辺側がやや小規模で上幅70～1.1m、深さ20cmほど、東辺制溝端では幅1.9m、深さ17cmほどであった。断面形は、南端付近では二段掘り状であったが、その他では浅いU字状であった。北辺から東辺の屈曲部はゆるやかな曲線で、幅が広くやや深くなっていた。東辺の屈曲部寄りの部分では、やはり長さ4mほどに亘って幅が広く、深さ30cm以上となっている部分が検出され、さらに南には直交して長さ4m、最深部が35cmほどの土坑状の部分が検出された。埋土の様子からは同時期とみられた。掘り込み面は第Ⅷ層の上部からであった。埋没状態：埋土中には多量のB軽石を含んでいた。遺物：土師器小片が多数出土したが、すべて混入によるものであった。時期：埋土の状況などから中世とみられる。

W-35号溝跡 (第16・22岡、P.L.14)

位置：調査区東半部のX216～224、Y54～57で検出された。重複：W-13号・16号・34号溝を切り、W-37号溝に切られていた。規模・形態：北西から南東方向に走り、鉤形に屈曲して湾曲しながら北東方向へ続いていた。西辺側は20m、南辺側が22m検出され、東端部はW-16号溝に接して終わっていた。最大幅は1.6m、最小部で90cmほど、深さは最深部で17cmほどであった。断面形は胆状で底面はほぼ平坦であった。底面の標高は南辺の東端側が高くなっていた。埋没状態：埋土はB軽石を多く含むものであった。遺物：土師器小片が多数出土したが、混入によるものであった。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-36号溝跡 (第16・22岡、P.L.14)

位置：調査区東半部のX218～220、Y56～58で検出された。重複：W-35号溝を切っていた。規模・形態：W-35号溝の西側に沿って50cmほどの間隔を取りながら、北西から南東方向に直線的に走り、東へ屈曲してW-35号溝に抜けて終わっていた。11mの長さが検出された。上幅20～35cm、深さ10cm以下の規模で、浅いU字状の断面形であった。埋没状態：埋土中にはB軽石が多く認められた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-37号溝跡 (第16・22岡、P.L.15)

位置：調査区東半部のX220～223、Y56～60で検出された。重複：W-35号溝を切っていた。規模・形態：W-35号溝の南辺部と重複し北東から南西に13m走り、鋭角に折れて南東方向に19m続いていた。南端はW 39号溝に接して終わっていた。上幅は30～50cm、深さは最深部で20cm弱であった。断面形は浅いU字状であった。底面の標高は北辺が低くなっていた。埋没状態：埋土中にはB軽石を多く含んでいた。時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-38号溝跡 (第16・22岡、P.L.15)

位置：調査区南端部X220～223、Y59～61で検出された。重複：A s B下水田の畔畔を切っていた。規模・形態：西南西から東南東方向に、やや屈曲しながら16mほどが検出された。南端は調査区外へ延びていた。上幅は50cm前後であるが不整で、深さは最深部でも6cmほどであった。底面は細かい凹凸が顕著であった。埋

没状態：A s-Bの一次堆積で埋没している状態であった。 時期：埋土の状況から平安時代末である。

W-39号溝跡 (第16・22図, P.L.14・15)

位置：調査区東南端のX223～227, Y56～61で検出された。 重複：A s-B下水田の畦畔, W-13号・34号・37号溝を切っていた。 規模・形態：北東から南西方向に23mほど走り、鋭角気味に折れて南東方向に3.5mほどが検出された。北辺側は二段掘り状で、上幅1.3mほど、深さは17cm前後を計り、断面は皿状の下部を小さくU字形に二段に掘り込んだ形状であった。西へ向かって浅くなり、西辺側は下部の掘り込みのみが残り、上幅30cm、深さ6cm前後の規模になっていた。底面はやや細かい凹凸があり、標高は北辺の中央付近が低かった。

埋没状態：埋土中にはB軽石が多く含まれていた。 遺物：土師器の小片がやや多く出土したが、混入品である。 時期：埋土の状況から中世とみられる。

W-40号溝跡 (第15・16・22図, P.L.15)

位置：調査区中央部のX216～222, Y46～51で検出された。 重複：W-17号・30号・32号溝を切っていた。 規模・形態：W-17号溝に沿って、北西から南東方向に直線で30mの長さが検出された。上幅が90cm前後、深さは15cmほどで、断面形は皿状であった。底面の傾斜は認められなかった。 埋没状態：埋土中にはA軽石を少量含んでいた。 時期：埋土の状況から近代とみられる。

5 その他

X-1号窪地 (第14・23図, P.L.15)

位置：調査区北半部のX208・209, Y35～37で検出された。 重複：W-7号溝と攪乱の窪み2か所に切られていた。W-9号溝とは同時期である。 規模・形態：平面形は本来は南北に長い長円形であったとみられる。最長部で8mほどを計る。深さは最深部が約20cmで、立ち上りのゆるやかな皿状の断面形である。南端は狭くなりそのままW-9号溝に続いていた。 埋没状態：底面にはA s-Bの降下火山灰が認められ、上層も一次堆積の軽石の層理が確認された。 時期：埋土の状況から平安時代末である。

X-2号窪地 (第16・23図, P.L.15)

位置：調査区南半部のX215・216, Y55で検出された。 重複：W-14号溝に切られていた。 規模・形態：平面形は南北に長い不整の楕円形で、最長部が3mほどであった。深さは約34cmで、断面形は立ち上りのゆるやかな皿状であった。底面は凹凸が顕著であった。攪乱などにより確実にできなかったが、北側から延びてきたW-7号溝が接続していたものと考えられる。 埋没状態：埋土はW-7号溝と同じくB軽石を多量に含んでいた。 時期：埋土の状況から平安時代末から川世とみられる。

X-1号窪地

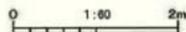


- 1 灰褐色土 A s-B多量、黄褐色土/ロックス少量含む。しまりあり。砂状であり、(M-7号窪地)。
- 2 灰褐色土 A s-B多量、黄褐色土少量含む。しまり・私瓦中やあり。
- 3 A s-B一次堆積層 灰褐色火山灰土状。下部に黒褐色火山灰。しまり・私性ややあり。
- 4 A s-B二次堆積層 黄色砂状火山灰。下部に黒褐色火山灰。しまり・砂砂等。
- 5 A s-B一次埋没層 灰褐色砂状土。軽石等の砂を含む。しまり・私性なし。
- 6 A s-B二次埋没層 灰褐色砂状土。黄・灰色の砂を含む。埋没面は小立石のアンジュ。しまり・私性無し。

X-2号窪地



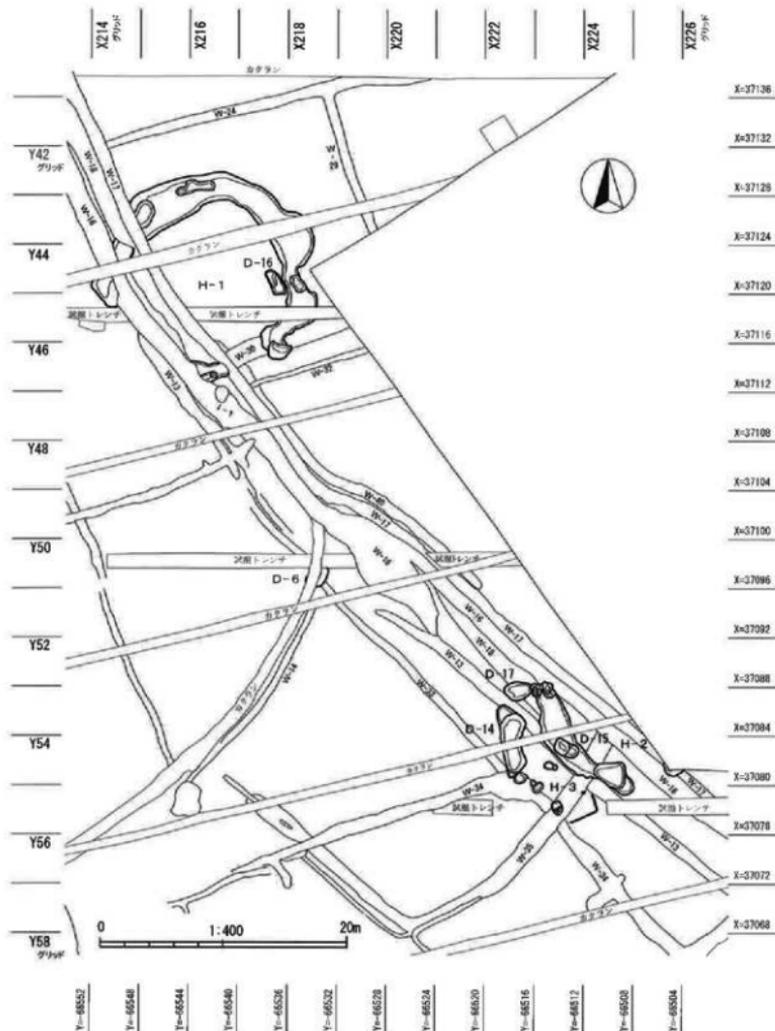
- 1 灰褐色土 A s-B多量、黄褐色土少量含む。しまり・私性なし。



第23図 C区窪地断面図

2 古墳時代

古墳時代の遺構は、C区の中央部の東半付近で集中的に検出された。西側の浅い谷地形に臨む微高地の縁辺に分布していた。A s-B層はすでに下層の第Ⅲ層あるいは第Ⅳ層まで耕地整理の削平が及んでいた。

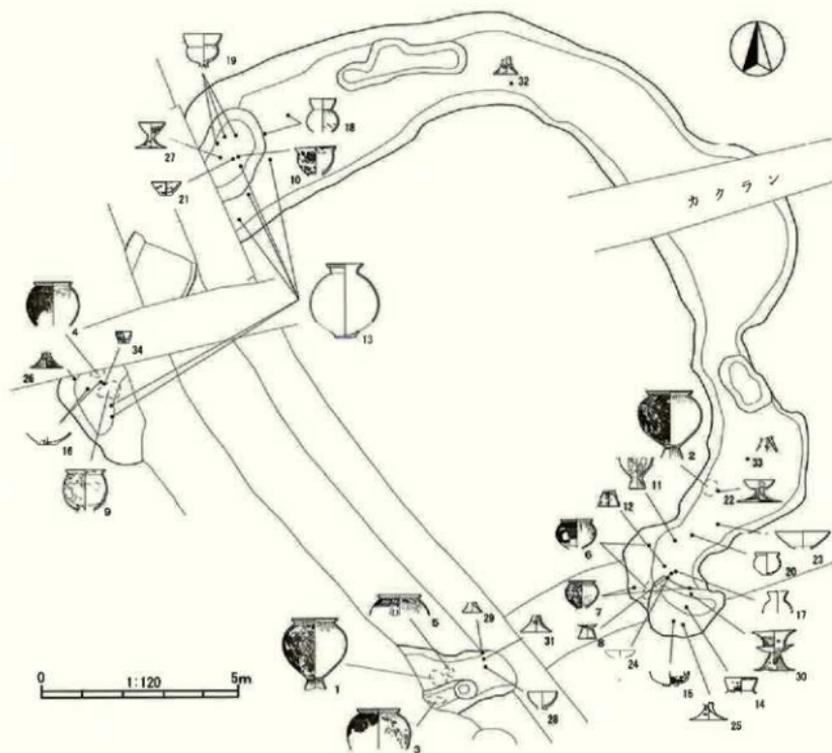


第 24 図 C区古墳時代全体図

1 住居跡

H-1号住居跡 (第25・26図、P.L.16・17)

位置：調査区中央のX214～218、Y42～46で検出された。重複：W-16～18号・30号溝に切れられ、現代の深い暗渠排水溝が東西に切っていた。規模・形態：住居跡の外側にめぐらされた外周溝部分のみの検出で、内部の構造などは不明である。隅丸方形の平面形を基調としているとみられ、外周溝は南辺の中央部が3m以上の幅で陥没状に掘り残され、南東隅部から東辺、北辺、さらに北西の隅部へと連続していた。西辺部については検出されなかった。規模は外周溝の内法で南北最長部が約11mを計る。東西も同規模であったとみられる。南北軸は30°西に振れていた。外周溝の形態は、内側は比較的直線に整えられ立ち上がりも急であったが、外側は不整形で幅や深さが一定ではなかった。概して隅部では幅が狭く浅くなっていたとみられる。底面には土坑状の深い落ち込みが数カ所認められ、北辺部の西では深さ40cmほどあった。掘り込み面は第XIV層よりも下位であった。埋没状態：C軽石を少量含む埋土で、北辺部の外側からの流入土にはやや多く含まれていた。また北辺部では上部に10cm割の厚さでHr-F A層の堆積が認められ、下層では炭化物を少量含んでいた。遺物：外周溝の中位から下位で多量の土器群が出土した(第32～35図)。南辺部と、北辺から北西隅部にかけての部分に集中しており、

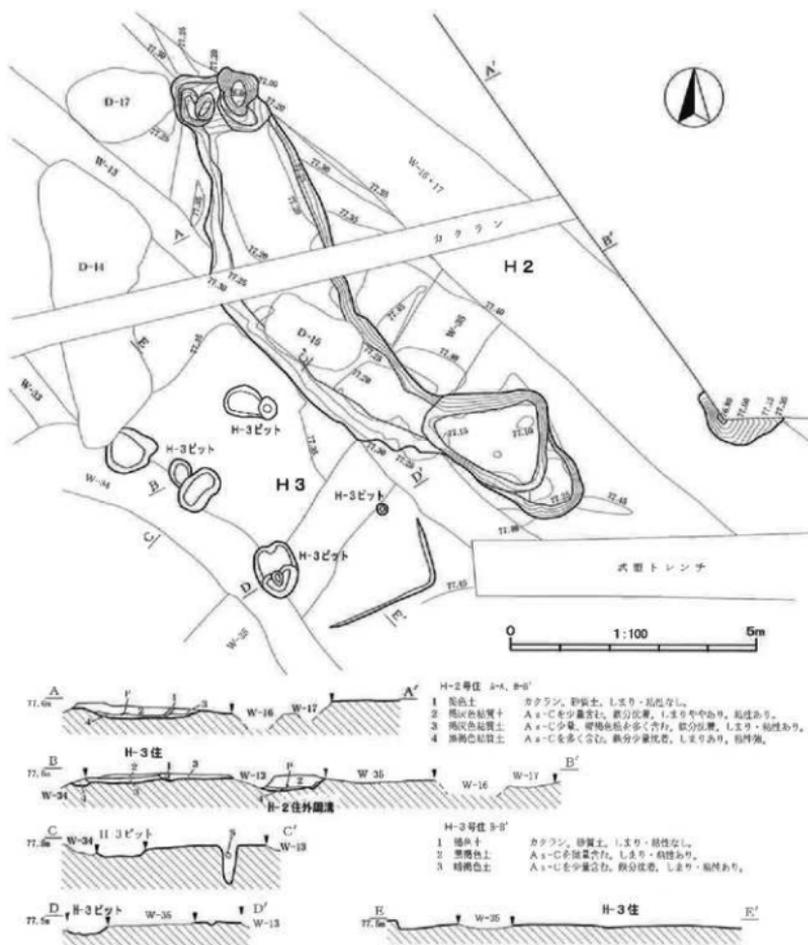


第25図 C区 H-1号住居跡遺物出土状況

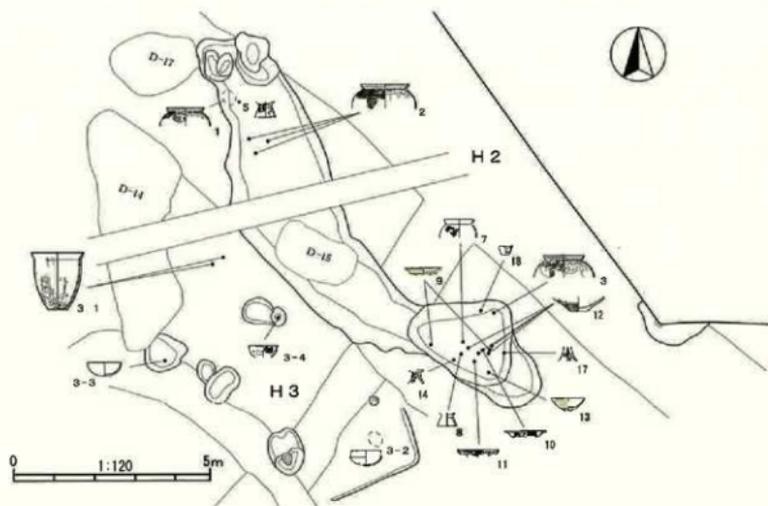
東辺部ではほとんど出土はなかった。 時期：古墳時代前期であり、A s - C の降下後の構築である。

H - 2 号住居跡 (第 27・28 図、P.L.17)

位置：調査区南半部の X223 ~ 225、Y52 ~ 55 で検出された。 重複：W-13 号・16 ~ 18 号・35 号溝、H-3 号住居に切られ、D-15 号・17 号土坑を切っていた。 規模・形態：外周溝部分のみが検出された。平面形は 1 号住居と同じく隅丸方形であったとみられる。外周溝は西辺部から南辺部側の隅部と、南辺の東側の一部分のみで、北辺側では検出されず東辺部は調査区外であった。南辺側は中央部が幅約 2.8 m の陸橋状に掘り残され



第 27 図 C 区 H-2 号住居跡・3 号住居跡



第28図 C区 II-2号住居跡、3号住居跡遺物出土状況

ていた。規模は、西辺の内法の長さからみて一辺8m以上で、南北軸は 20° ほど西に振れていたと考えられる。外周溝の形態は、外周側は不整形で立ち上がりもゆるやかであったが、内側は急であった。深さは全体に浅かったが、西辺北端と、南辺の東端部はビット状になり40～50cmの深さがあった。埋没状態：埋土中にはC軽石が少量含まれていた。A s-Cの降下以後の構築である。遺物：外周溝中、特に南辺の西側部からまとまって土器が出土した(第36・37図)。時期：古墳時代前期で、A s-Cの降下以後の構築である。

H-3号住居跡 (第27・28図、P.L. 17・18)

位置：調査区南半部のX222～224、Y54・55で検出された。重複：H-2号住居、D-14号土坑を切り、W-13号・34・35号溝に切られ、現代の暗渠排水溝にも切られていた。規模・形態：攪乱や重複のため明確なプランは捉えられなかった。南東側にL形に低い立ち上がりが見られたが、位置的に壁とは考えにくい。床面も明確な硬化面などは認められなかったが、柱穴とみられるビットを3カ所検出した。北のビットは深さ70cmほどであったが、西及び南のビットは20cm弱の深さであった。いずれも大きく浅いビットを伴っていた。東に検出したビットは小規模で柱穴とは考えられず、柱穴はW-35号溝の重複部に存在したものとみられた。D-14号上坑の南には貯蔵穴とみられるビットを検出した。長径1m、深さ15cmほどのビットで、内部からほぼ完形の甕が出土した。これらのビットや遺物の出土位置などを合わせ考えると、一辺7mほどの規模の住居であったとみられる。

埋没状態：埋土中にはC軽石が少量みられたが、H r-F Aは確認できなかった。遺物：遺物の出土は少なく、貯蔵穴(3-3)以外に、北のビット内から杯の破片(3-4)が、床面直上からは散在的に土器片(3-1・2)が出土した(第38図)。時期：出土遺物から古墳時代後期であり、H r-F A降下以前とみられる。

2 土 坑

D-6号土坑 (第29図、P.L.18)

位置：調査区中央付近X218、Y50で検出された。重複：W-33号溝とトレンチに上部を切られ、中央部分を現代の攪乱の溝に切られていた。規模・形態：平面形は長円形であったとみられ、残存部の南北長辺が1.7mを計る。深さは10cm強で、立ち上がりのゆるやかな皿状の断面形であった。埋没状態：C軽石を少量含んだ埋土であった。遺物：底面上から壺の大型破片などが出土した(第39図)。時期：遺物から古墳時代前期である。

D-14号土坑 (第29図、P.L.18)

位置：調査区東半部X222、Y53・54で検出された。重複：W-13号・33号溝に一部を切られ、中央部を東西に現代の暗渠排水溝に切られていた。規模・形態：中央部がくびれ、南北に長い溝状の平面形である。南北の両端にはゆるやかに立ち上がる突出部が付随している。本体の長辺部が4.7m、北半の最大部の幅が約2mと大型であった。深さも68cmあり、断面は逆台形状で、西壁側は垂直に近い立ち上がりであった。底面は平坦で、底面の直上からは湧水があった。掘り込み面は第XV層よりも下位であった。埋没状態：最下層は泥炭質の漆黒色土で、この上部には東から流れ込んだ状態でA s-Cの二次堆積層が見られた。この上部からはC軽石を含んだ埋土であり、さらに最上層にはH-r-F A層が薄く水平に堆積していた。遺物：C軽石の二次堆積層の上位の埋土中から高杯が出土した(第39図)。時期：埋土や遺物から古墳時代前期であり、A s-C降下以前の構築と考えられる。

D-15号土坑 (第29図、P.L.18)

位置：調査区の東半部X223、Y54で検出された。重複：H-2号住居外周溝に上部を切られていた。規模・形態：隅の丸い長方形の平面で、東西の長辺部で1mを計る。深さは40cmほどで、逆台形の断面形である。東半部は底面が10cm強ほど高かった。底面は平坦であった。埋没状態：D-14号土坑と同様で、最下層に厚く泥炭質土が堆積し、上部の埋土にはC軽石を多く含んでいた。C軽石の二次堆積層は認められなかった。遺物：土坑に伴う遺物の出土はなかった。時期：埋土の状況から古墳時代前期、D-14号土坑と同時期とみられる。

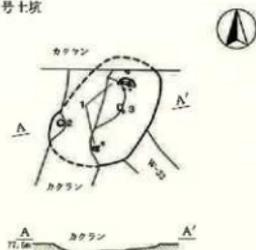
D-16号土坑 (第29図、P.L.18)

位置：調査区中央部X217、Y44で検出された。重複：H-1号住居の区画内に構築されているが、前後関係は確認できなかった。規模・形態：平面形はやや不整の南北に長い長方形で、長辺部が2m強の規模であった。深さは最深部で36cmほどを計る。断面形は箱形状で、底面は北側が一段低くなっており、全体にやや凹凸が見られた。埋没状態：C軽石を少量含む埋土であった。遺物：埋土の上部から壺の半欠片が出土した(第39図)。時期：遺物の状況から古墳時代前期である。H-1号住居の後か。

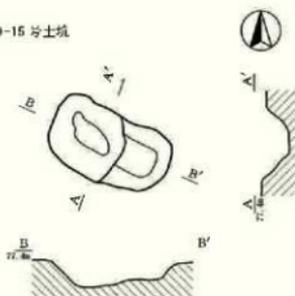
D-17号土坑 (第29図、P.L.18)

位置：調査区の東半部X222、Y53で検出された。重複：W-13号・18号溝に上部を切られていた。規模・形態：東西に長いやや不整な長円形で、長辺部で約2mを計る。深さは40cmほどで、皿状の断面形であった。全体に凹凸が顕著であった。埋没状態：埋土は、自然堆積とはみられない状況であった。時期：埋土の状況から古墳時代前期とみられるが、形態や埋土からみて倒木痕の可能性がある。

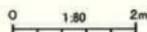
D-6号土坑



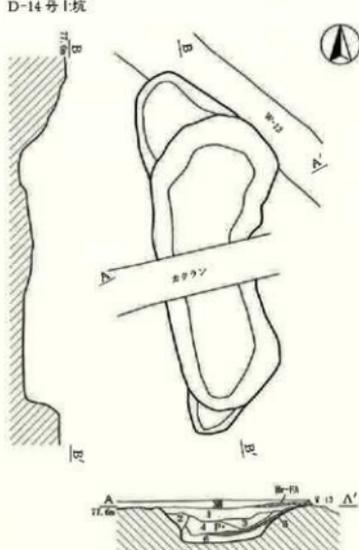
D-15号土坑



D-16号土坑



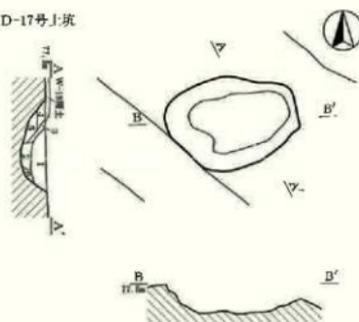
D-14号土坑



D-14号土坑

- | | |
|----------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | A=Cを多く含む。しまりあり。粘性強。 |
| 2 灰色粘質土 | A=Cを少量含む。鉄分少量沈着。しまりあり。粘性強。 |
| 3 灰褐色粘質土 | A=Cを多く含む。鉄分少量多。しまり・粘性強。 |
| 4 明褐色粘質土 | A=Cを多量。黒褐色鉄分を少量含む。鉄分少量に沈着。しまり・粘性あり。 |
| 5 褐色土 | A=C二次厚積層。しまりあり。粘性なし。 |
| 6 黒色土 | 黒褐色鉄分を少量含む。硬質。しまり・粘性弱。 |

D-17号土坑



D-17号土坑

- | | |
|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色土 | A=Cを少量含む。鉄分少量沈着。しまりあり。粘性強。 |
| 2 暗褐色土 | A=Cを少量含む。しまり・粘性あり。 |
| 3 暗褐色土 | 鉄分少量に沈着。しまりあり。粘性強。 |
| 4 黄褐色土 | A=Cを少量含む。鉄分少量に沈着。しまり・粘性強。 |
| 5 灰褐色土 | A=Cを少量含む。鉄分少量沈着。しまり・粘性強。 |
| 6 黒褐色土 | A=Cを少量。灰色粘質土を少量含む。しまり・粘性強。 |

第29図 C区古墳時代十坑

VI 出土遺物

1 平安時代末以降

確実にA s-B下水田に関係する遺物は出土していない。その後の時期の遺構では、W-16号・17号・18号溝跡以外では、混入品以外にはほとんど遺物の出土はなかった。

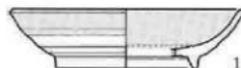
A区出土遺物 (第30図、P.L.19)

A区北辺付近のX217、Y115で出土した。A s-B下水田が構築されている第Ⅱ層黒色粘質土の上面であったが、洪水起源とみられる灰黄褐色シルト質土の堆積する浅い窪地状部分の底面であり、この堆積層の上とみられた。

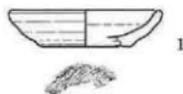
C区出土遺物 (第30図、P.L.19)

C区北辺部の1号南北大土畔の東側X214、Y28で出土した。A s-B層の遺存状況が悪く判然としなかったが、水田面というよりはB軽石の混土層中からの出土とみられた。

A区出土遺物



C区出土遺物



第30図 調査区出土遺物

W-16号溝跡出土遺物 (第31図、P.L.19)

平安末から中世の時期と考えられる最も規模の大きい溝跡で、ほとんどの地点で多数の遺物の出土があったが、多くは古墳時代の土師器片であった。図示した1、2、4は東端付近からの出土であり、3は中央部から、5は北端付近の底面の出土である。

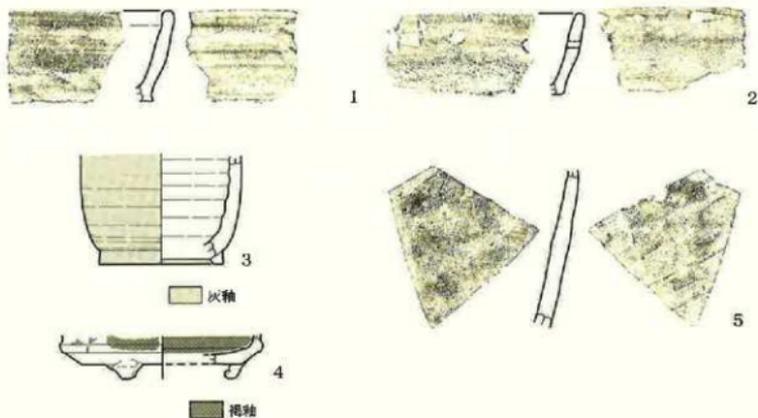
W-17号溝跡出土遺物 (第31図、P.L.19)

近世から近代にかけての溝跡で、陶磁器片などが比較的多く出土した。1は中央部での出土である。

W-18号溝跡出土遺物 (第31図、P.L.19)

中世から近世頃の溝跡と考えられる非常に浅い溝であったが、遺物の出土は多かった。混入品の土師器片以外に軟質陶器や陶磁器の破片も多数みられた。1、2、6は中央部寄り北半から、3～5は北端部付近からの出土である。

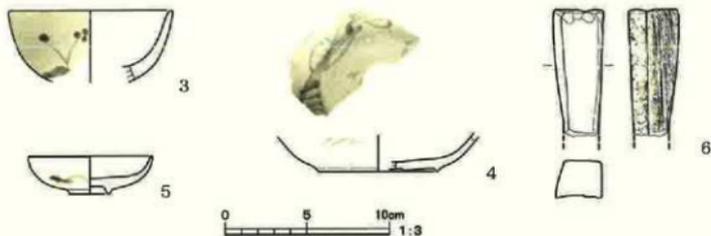
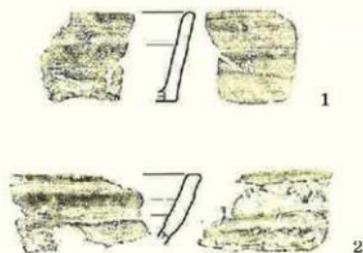
16号溝跡出土遺物



17号溝跡出土遺物



18号溝跡出土遺物



第31図 溝跡出土遺物

2 古墳時代

H-1号、2号住居跡、I)-6号、14号、16号土坑は古墳時代前期、H-3号住居跡は古墳時代後期である。

1 住居跡

H-1号住居跡出土遺物 (第32~35図、P.L.19~22)

第25図に示したように、すべて住居跡の外周溝からの出土である。破片も含めて多量に出土した土器のほとんどが南辺陸橋部の両脇と、北辺から西辺の隅部からの出土であった。2か所とも外周溝が切れた部分の近辺にあたり、出土層位は底面から中層付近にかけてからであった。居住中の使用により破損した土器を手近な場所に廃棄したものと考えられた。多様な器種がみられるが、場所による偏りなどは認められない。13の壺の破片のみがやや広い範囲から出土している。

H-2号住居跡出土遺物 (第36・37図、P.L.22)

第28図のとおり、すべて住居跡の外周溝からの出土である。特に南辺陸橋部の西側の部分からの出土が多かった。東側では調査範囲が狭かったこともあってか遺物の出土はみられなかった。西辺部では全体的に破片が出土しており、北端付近にはS字壺が多くみられた。すべて底面近くからの出土であり、住居の存続中に廃棄されたものと考えられる。

H-3号住居跡出土遺物 (第38図、P.L.23)

第28図のとおり、住居の範囲は明確にとらえられなかったが住居内に散在的に分布しているものとみられた。中央から南にかけて杯類がみられ、3は貯蔵穴とみられるピット内の出土であった。1の瓶の付近からは壺の大型破片の出土があり、北カマドの構造であったと考えられる。

2 土坑

D-6号土坑出土遺物 (第39図、P.L.23)

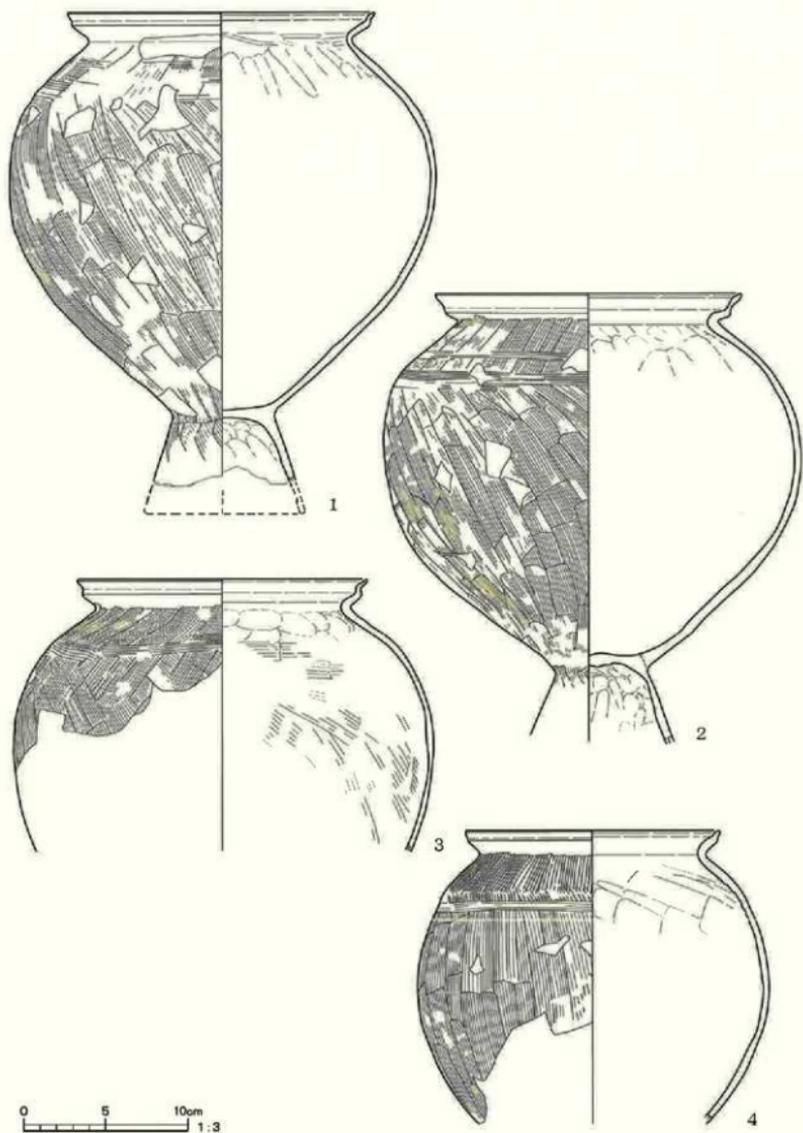
加飾帯I縁部の大型破片が底面から出土している。その他には図示した別個体の2点の壺片が、やはり底面から出土したのみであった。

D-14号土坑出土遺物 (第39図、P.L.23)

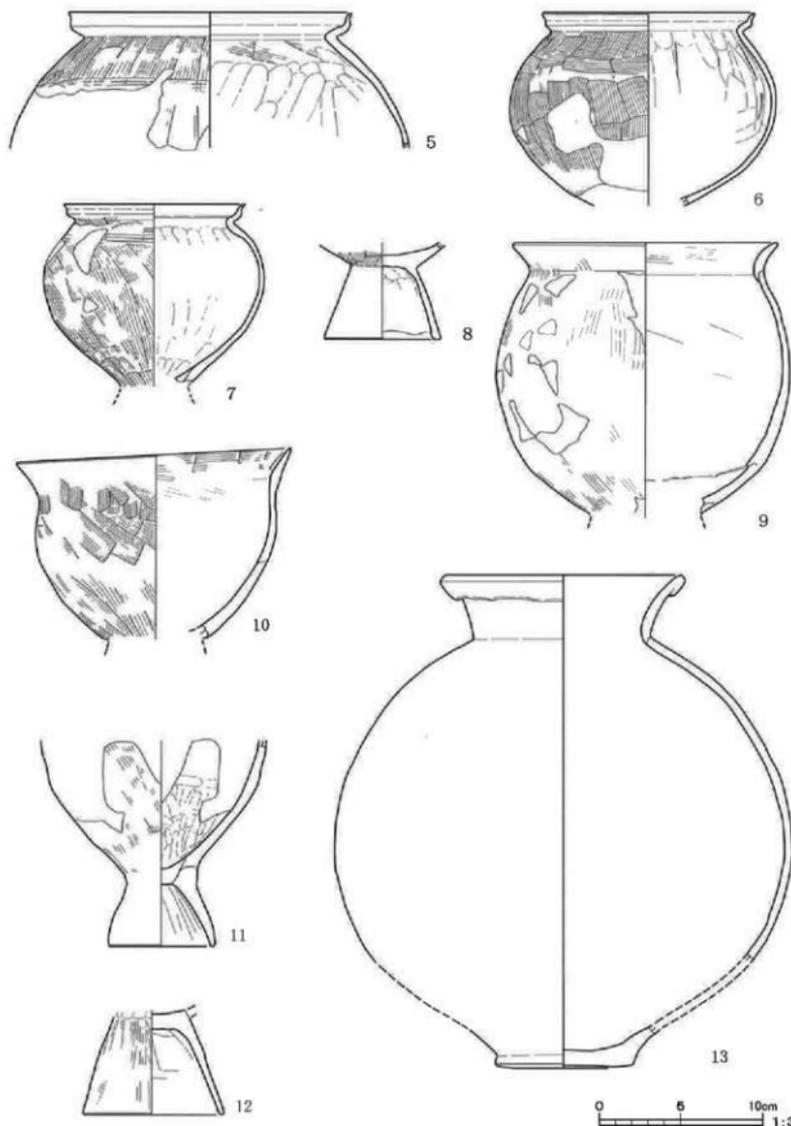
大型の有段高杯の破片が出土したほか、少量の上師器小片が出土した。高杯は底面から25cmほど上位で、As-C軽石の流れ込みの土層の数cm上部からの出土であった。他の上師器片もこれより上位の出土であった。H-2号住居の西辺外周溝の直近に位置しており、C軽石との関係からみて本土坑はH-2号住居に先行するものであり、土坑の埋没過程でH-2号住居が構築されこの高杯が廃棄されたものと考えられる。

D-16号土坑出土遺物 (第39図、P.L.23)

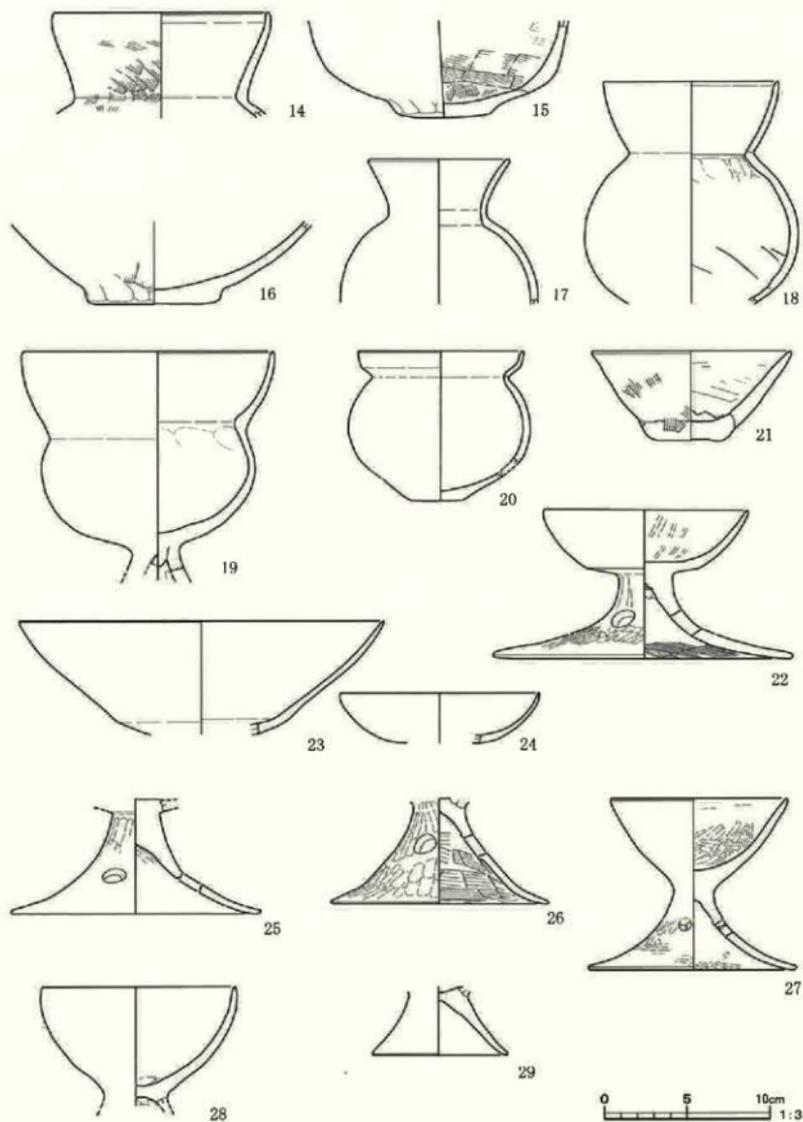
壺の半欠片が出土したほかは、土師器小片2点のみであった。底面から16cmほど上位の埋土上部からの出土であった。



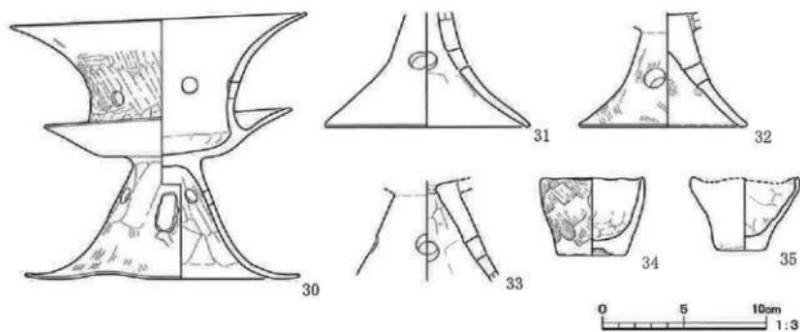
第 32 图 II 1 号住居跡出土遺物 (1)



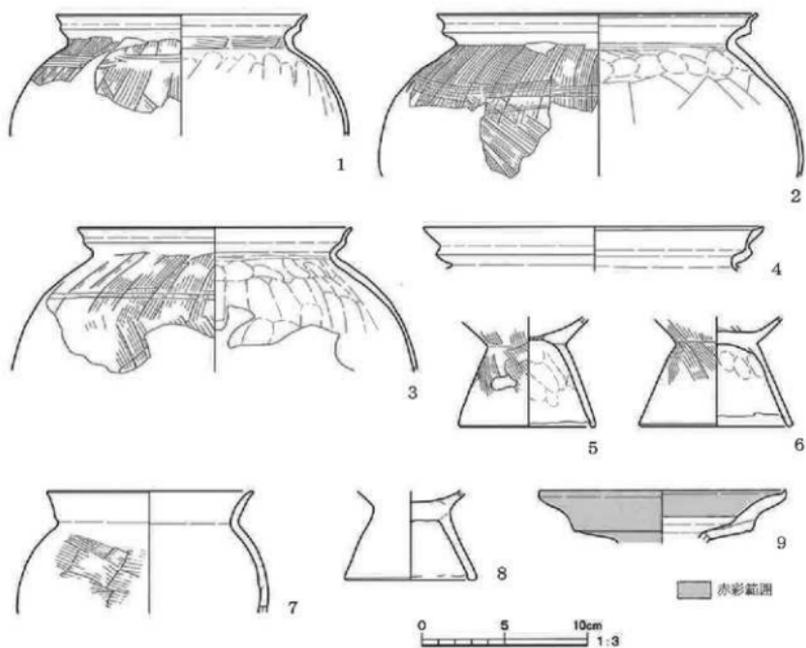
第33图 H-1号住居跡川上遺物(2)



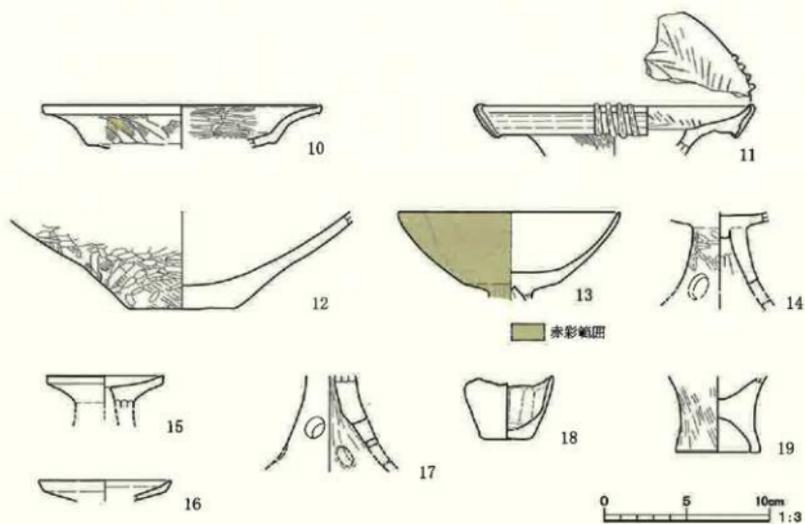
第34图 H-1号住居跡出土遺物(3)



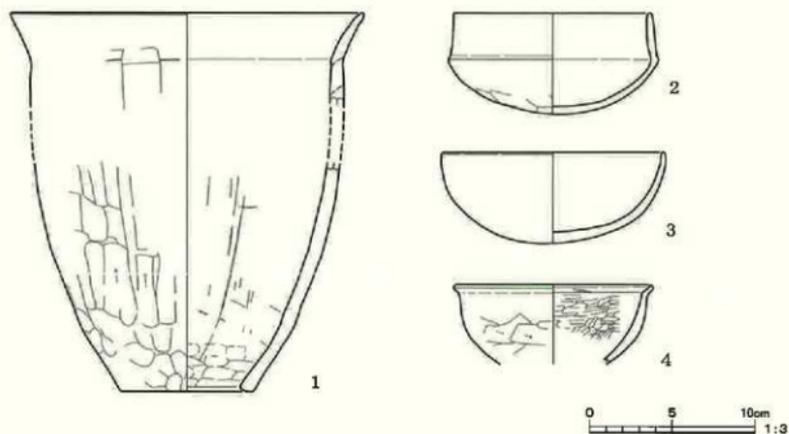
第35图 H-1号住居跡出土遺物(4)



第36图 H-2号住居跡出土遺物(1)

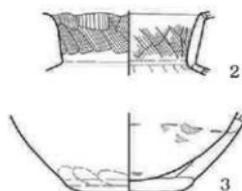
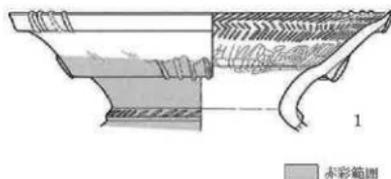


第 37 圖 H-2 号住居跡出土遺物 (2)

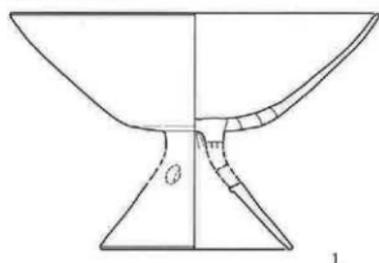


第 38 圖 H-3 号住居跡出土遺物

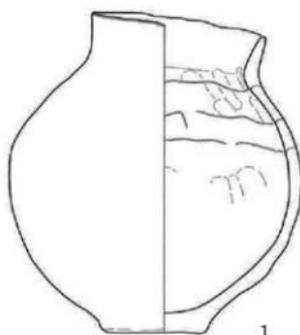
D-6号土坑出土遺物



D-14号土坑出土遺物



D 16号土坑出土遺物



第39図 土坑出土遺物

第2表 A区出土遺物観察表

寸法の()は推定値、()は残存値。

No.	遺物名	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色差	成・製法技法等	備考
1	A-6 甕土甕	陶師皿	口径：(13.8) 底径：(8.6) 器高：3.6	①胎土 ②焼成 ③色差	灰緑、内面全体から体部下部に黒線。 外底：体部口縁部へフケズリ。裏台部張り肉し。 器高：ボタリ調整。	1/8 見込み部に黒ね焼き成。

第3表 C区出土遺物観察表

寸法の()は推定値、()は残存値。

No.	遺物名	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色差	成・製法技法等	備考
1	30号土甕	土師瓦土甕 皿	口径：(5.0) 底径：(3.2) 器高：2.2	①胎土 ②焼成 ③色差	外底：口縁部。裏面口縁部張り肉。 内底：口縁部。	1/4

第4表 溝跡出土遺物観察表 (1)

寸法の()は推定値、()は残存値。

No.	遺物名	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色差	成・製法技法等	備考
1	W 16号甕	軟質陶師 短甕	口径：(33.0) 底径：(20.4) 器高：5.5	①胎土 ②焼成 ③色差	外底：口縁部調整。 内底：口縁部調整。内底の胎付部一部焼。	1/14 内外底、器口に傷が付存。
2	W-16号甕	軟質陶師 短甕	口径：(38.0) 底径：(25.4) 器高：6.4	①胎土 ②焼成 ③色差	外底：上下部口縁調整。 内底：口縁調整。	1/12 底4mmの輪痕孔が1カ所残存。
3	W-16号甕	陶師 短甕	口径：(27.0) 底径：(16.0) 器高：5.0	①胎土 ②焼成 ③色差	灰緑。全面に黒線。 外底：口縁部調整へフケズリ。 内底：口縁調整。	1/5
4	W 16号甕	陶師 短甕	口径：(30.0) 底径：(20.0) 器高：5.0	①胎土 ②焼成 ③色差	底面に器1カ所残存。内面全面と外面の一部に黒線。 外底：下脚ハタリ調整へラクスリ。上脚ハタリ調整。 内底：口縁調整。	1/4
5	W-16号甕	軟質陶師 大甕	口径：(39.5)	①胎土 ②焼成 ③色差	外底：アタリ。 内底：アタリナズリ。	割取部片 欠損

第5表 溝跡山上遺物観察表(2)

No	遺物名	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②胎底 ③胎脚	産・製法技法等	備考
1	W-17号罐	細頸 蓋	口径:18.0 底径:8.0 器高:23.9	①胎底 ②胎底 ③胎脚	肩付。肩縁。 外面:ロクロ成形。底の日高外。 内面:ロクロ成形。	1/2
1	W-18号罐	懸賞陶器 短頸	口径:(34.0) 底径:(31.0) 器高:25.4	①胎底 ②胎底 ③胎脚	外面:ロクロ成形。 内面:ロクロ成形。	1/16
2	W-19号罐	軟筒陶器 短頸	口径:(30.0) 底径:(27.0) 器高:(4.4)	①胎底 ②胎底 ③胎脚	外面:上下部ロクロ成形。 内面:ロクロ成形。	1/15 外面に煤が付着。
3	W-18号罐	筒形 蓋	口径:(6.9) 器高:(1.3)	①胎底 ②胎底 ③胎脚	肩付。肩縁。 外面:ロクロ成形。 内面:ロクロ成形。	1/4
4	W-18号瓶	筒形 瓶	口径:(7.0) 底径:(2.2)	①胎底 ②胎底 ③胎脚	肩付。肩縁。 外面:ロクロ成形。底の日高外。 内面:ロクロ成形。	3/8
5	W-18号罐	短頸 罐	口径:17.4 底径:7.4 器高:12.3	①胎底 ②胎底 ③胎脚	肩付。肩縁。 外面:ロクロ成形。 内面:ロクロ成形。	5/8
6	W-18号罐	七宝 瓶	口径:12.7 底径:3.0 器高:22.2	①胎底 ②胎底 ③胎脚	肩付。肩縁。 外面:ロクロ成形。底の日高外。 内面:ロクロ成形。	1/2? 長頸部一面は朱塗の刷毛目。瓶口 大きく突き出ている。

第6表 H-1号住居跡山上遺物観察表(1)

No	出土位置	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②胎底 ③胎脚	産・製法技法等	備考
1	河原前古田	十輪形 白付罐	口径:18.9 底径:8.2 器高:28.0	①胎底多量:チャート・黒色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。右肩部の底縁部が内縁をなし、肩縁部として使用。 外面:口縁部ロコナダ。胴部彫状ハケム後、肩部ヨコハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヨコハケム。胴部ヘラズリ後、ナダ。 台部ナダ後連続ナメハケム。	胴部の一部分。台部断面。 外面彫部中に煤。内面下 胴部に炭化物が付着。
2	河原前古田	土師器 白付罐	口径:18.4 底径:(27.0)	①胎底多量:石英・片削 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。右肩部の底縁部が見られ、1と肩 部との間に煤あり。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部彫状ハケム後、肩部ヨコハケム。 台部ナダ後連続ナメハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヨコナダ。	胴部部分的に欠。右肩部欠。 外面彫部中に煤。内面下 胴部に炭化物が付着。
3	河原前古田	土師器 白付罐	口径:17.0 底径:(19.0)	①胎底多量:玄母砂 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部彫状ハケム後、肩部ヨコハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ナダ。彫状ハケム。	口縁一部分1/2残 2枚
4	河原前古田	土師器 白付罐	口径:(13.3) 底径:(17.0)	①胎底多量:石英・片削 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部彫状ハケム後、肩部ヨコハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、ナダ。	口縁一部分1/2残 外面彫部中に煤。
5	河原前古田	土師器 白付罐	口径:17.2 底径:(8.2)	①胎底多量:チャート ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム後ヨコハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。肩部ハケム後、ムビナダ。	口縁一部分1/2残
6	河原前古田	土師器 白付罐	口径:13.2 底径:(11.0)	①胎底多量 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部彫状ハケム後、肩部ヨコハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、コピナダ。	口縁一部分3/4残 内面下胴部に炭化物
7	河原前古田	土師器 白付罐	口径:18.0 底径:(11.0)	①胎底多量:石英 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、コピナダ。	胴部一部分1/3欠。 外面下胴部に煤。
8	河原前古田	土師器 白付罐	口径:(16.0) 底径:(16.0)	①胎底多量:チャート・黒色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、コピナダ。	胴部一部分1/3欠。 外面下胴部に煤。
9	河原前古田	土師器 白付罐	口径:(16.0) 底径:(16.0)	①胎底多量:チャート・黒色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、コピナダ。	胴部一部分1/3欠。 外面下胴部に煤。
10	河原前古田	土師器 白付罐	口径:14.3 底径:(11.0)	①胎底多量:黒色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ナダ?上縁部定なハケム。下縁部埋いハケム。 内面:口縁部ヨコハケム。胴部ヘラズリ後。	口縁一部分1/3欠。 内面下胴部に炭化物。
11	河原前古田	土師器 白付罐	口径:13.3 底径:(12.0)	①胎底多量 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、コピナダ。	胴部一部分のみ残
12	河原前古田	土師器 白付罐	口径:14.4 底径:(8.0)	①胎底多量:オールド・石英 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:ハケム。胴部上の接合部に煤あり。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後。	胴部一部分1/2欠。
13	河原前古田	土師器 白付罐	口径:14.3 底径:(8.0)	①胎底多量:チャート・黒色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム。 内面:口縁部ヨコナダ。胴部ヘラズリ後、コピナダ。	胴部一部分1/3欠 底縁部定な1/4欠
14	河原前古田	土師器 白付罐	口径:13.0 底径:(8.0)	①胎底多量:チャート・黒色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:ハケム。 内面:?	口縁一部分5/8残 2枚
15	河原前古田	土師器 白付罐	口径:(6.9) 底径:(5.9)	①胎底多量:赤色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:ヘラズリ後ヘラズリ後コピナダ。 内面:ハケム。	下胴部一部分残
16	河原前古田	土師器 白付罐	口径:8.0 底径:(8.0)	①胎底多量 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:ハケム。 内面:?	下胴部一部分残
17	河原前古田	土師器 白付罐	口径:10.3 底径:(8.0)	①胎底多量:石英 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ?胴部ヘラズリ後。 内面:口縁部ヘラズリ後?胴部ヘラズリ後?	1/2残
18	河原前古田	土師器 白付罐	口径:10.3 底径:(13.0)	①胎底多量:チャート・片削・石英 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:ヘラズリ後? 内面:ヘラズリ後ヨコハケム後ムビナダ。	胴部一部分1/2残
19	河原前古田	土師器 白付罐	口径:15.2 底径:(13.0)	①胎底多量:チャート・石英・赤色粒 ②胎底 ③胎脚	S字状口縁。 外面:口縁部ヨコナダ。胴部ナメハケム。 内面:?	口縁一部分5/8残 3枚

第7表 H-1号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	出土位置	遺物	寸法 (cm)	①粘土 ②成色 ③色相	成・形状技法等		備考
					成・形状技法等	備考	
20	周溝南辺	土師器 鉢	口径: 11.0 底径: 3.2 高さ: (6.1)	①砂粒多: チャート・黒色粒・片岩 ②良好 ③にない	右面口縁。 外面: 口縁部ヨコナダ? 底部ヘラミガキ? 内面: 口縁部ヨコナダ? 底部?	口縁部1/2段 11組・1組・表部の3点から 向上推定。	
21	周溝北辺	土師器 鉢	口径: 12.0 底径: 4.0 高さ: 5.8	①砂粒多: 石英・黒石 ②良好 ③にない	外面: 口縁部ヨコナダ。底部ナブ。 内面: 口縁部ヨコナダ。底部ヘラタズリ。	山江元形。	
22	周溝南辺	土師器 高杯	口径: 12.3 底径: 18.2 高さ: 9.1	①砂粒多: 石英・チャート・片岩 ②良好 ③にない	右面口縁。縦筋三方向に門形通し。 外面: 底部ヘラミガキ? 脚部ヘラミガキ。脚部ヨコナダ。 内面: 底部ヘラミガキ? 脚部ヨコナダ。	ほぼ完成。	
23	周溝南辺	土師器 高杯	口径: (22.2) 底径: (6.9)	①砂粒多: 石英・赤色粒・チャート・片岩 ②良好 ③にない	右面口縁。 外面: 下部コロコヘラタズリ。 内面: ?	断面1/4段	
24	周溝南辺	土師器 高杯	口径: (13.0) 底径: (2.1)	①砂粒多量: 石英・石英・チャート ②良好 ③にない	外面: ? 内面: ?	断面1/4段	
25	周溝南辺	土師器 高杯	口径: 15.0 底径: 15.0	①砂粒多 ②良好 ③にない	断面? 方向に門形通し。L。 外面: ヘラミガキ。 内面: 断面? 方向にミガキ? 脚上部ソボリ。脚部ヨコナダ?	断面1/2次	
26	周溝北西側	土師器 高杯	口径: 12.9 底径: (6.4)	①砂粒多: 赤色粒・黒石 ②良好 ③にない	二方向に門形通し。L。 外面: ヘラミガキ。 内面: ヘラミガキ後。中央。縦筋ヨコナダ。	断面のみ。	
27	周溝北辺	土師器 高杯	口径: 10.6 底径: 11.6 高さ: 15.4	①砂粒多 ②良好 ③にない	断面? 方向に断面形状の通し。L。 外面: 口縁部ヨコナダ。底部ヘラミガキ? 脚部ヘラミガキ。 内面: ヨコナダ? 後。ヘラミガキ。脚部ヘラミガキ? 脚部ヘラミガキ。	口縁部 筋欠。断面人部分 欠。	
28	周溝南西側	土師器 高杯	口径: (11.7) 底径: (2.7)	①砂粒多: 石英・赤色粒 ②良好 ③にない	外面: 底部ヘラミガキ? 内面: 断面由縁面。底部ヘラミガキ? 台形化面。	断面2/3段	
29	周溝南西側	土師器 高杯	口径: 8.3 底径: (4.2)	①砂粒多: チャート・石英 ②良好 ③にない	断面良好。 外面: ? 内面: ?	断面一筋欠	
30	周溝南辺	土師器 野台	口径: 18.0 底径: 16.6 高さ: 16.2	①砂粒多量: チャート・石英 ②良好 ③にない	断面良好。縦筋4方向に門形通し。1方向に足形通し。L。体部 7か所に門形通し。 外面: 断面? 方向。底部ヘラミガキ? 脚部ヘラミガキ後。ヘラミガキ。 内面: ヘラミガキ? 断面? 脚部ヘラミガキ後。ヨコナダ?	11組・受盤・脚部断面を各 部分に欠。	
31	周溝南西側	土師器 小形野台	口径: 12.4 底径: (7.0)	①砂粒多量: 石英・赤色粒 ②良好 ③にない	断面方向に門形通し。L。内面由縁面。 外面: ? 内面: コロコヘラタズリ?		
32	周溝北東側	土師器 小形野台	口径: 10.2 底径: (7.0)	①砂粒多量: 石英・片岩 ②良好 ③にない	三方向に門形通し。L。 外面: ハケミ。 内面: ハケミ後。ナブ。	断面1/2次。	
33	周溝南辺	土師器 小形野台	口径: (8.2) 底径: 4.0	①砂粒多量: チャート・赤色粒 ②良好 ③にない	断面方向に門形通し。L。内面由縁面。 外面: ヘラミガキ? 内面: ヘラタズリ。	断面片	
34	周溝北西側	土師器 平盤状土師	口径: 6.2 底径: 4.0 高さ: 4.7	①砂粒少: 粗石 ②良好 ③にない	断面中くぼみ。 外面: ハケミ。 内面: ヨコナダ?	ほぼ完成。	
35	周溝南東側 礎十中	土師器 平盤状土師	口径: (8.3) 底径: 3.9 高さ: 4.5	①砂粒粒少 ②良好 ③にない	外面: 断面。 内面: ヘラミガキ。	口縁部の人部分欠。	

第8表 H-2号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	出土位置	遺物	寸法 (cm)	①粘土 ②成色 ③色相	成・形状技法等		備考
					成・形状技法等	備考	
1	周溝北西側	土師器 台付甕	口径: 15.2 底径: (7.4)	①砂粒: 石英・片岩 ②良好 ③にない	S字状口縁。縦筋内面にヨコナダ。 外面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヘラミガキ後。脚部ヨコナダ。 内面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヨコナダ。	口縁部一筋断	
2	周溝北西側	土師器 台付甕	口径: 13.0 底径: (10.0)	①砂粒多: チャート・石英・赤色粒 ②良好 ③にない	S字状口縁。縦筋内面にヨコナダ。 外面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヘラミガキ後。脚部ヨコナダ。 内面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヨコナダ。	口縁部1/4次	
3	周溝南側	土師器 台付甕	口径: (16.9) 底径: (8.8)	①砂粒多 ②良好 ③にない	S字状口縁。縦筋内面にヨコナダ。 外面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヘラミガキ後。脚部ヨコナダ。 内面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヨコナダ。	11組部→断面1/3段	
4	周溝南側 礎土中	土師器 台付甕	口径: (20.4) 底径: (7.0)	①砂粒多: 石英・片岩・赤色粒 ②良好 ③にない	S字状口縁。 外面: ヨコナダ? 内面: ヨコナダ?	口縁部1/7段	
5	周溝北西側	土師器 台付甕	口径: 8.0 底径: (5.7)	①砂粒多: 石英・片岩 ②良好 ③にない	断面内面筋面通し。 外面: 断面? 方向。台形ナブ後。ハケミ。 内面: 断面? 方向。台形ヨコナダ後。ハケミ。	断面部→断面 筋欠。 内面筋面に欠。	
6	周溝北西側 礎土中	土師器 台付甕	口径: (9.1) 底径: (6.7)	①砂粒多: 石英・チャート・赤色粒 ②良好 ③にない	断面内面筋面通し。 外面: 断面ナブ後。不連続ナブハケミ。 内面: 断面ヘラミガキ後。ナブ。台形ヨコナダ後。ナブ。	断面1/8段 内面筋面に多量の砂粒を食ひ 粘土を付着。	
7	周溝南側	土師器 台付甕	口径: (12.0) 底径: (7.4)	①砂粒多: チャート・赤色粒・石英 ②良好 ③にない	く字口縁。 外面: 口縁部ヨコナダ。脚部ハケミ。 内面: 口縁部ヨコナダ。脚部ヨコナダ。	口縁→断面1/4段	
8	周溝南側	土師器 台付甕	口径: 7.9 底径: (5.4)	①砂粒多: 石英・チャート・赤色粒 ②良好 ③にない	断面? ナブ? 内面: 断面? ナブ?		
9	周溝南側	土師器 甕	口径: (14.8) 底径: (3.2)	①砂粒少: 石英・片岩・赤色粒 ②良好 ③にない	二重口縁。 外面: ヨコナダ? 断面? 断面? 断面? 断面? 内面: ヘラミガキ? 断面? 断面? 断面?	口縁部1/2段	
10	周溝南側	土師器 甕	口径: (17.0) 底径: (2.6)	①砂粒少: 赤色粒 ②良好 ③にない	二重口縁。 外面: ハケミ後。口縁部ヨコナダ。 内面: ヘラミガキ。		

第9表 II 2号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	出土位置	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②地味 ③色調	成・整形状況等	備考
11	岡原南跡	土師器 壺	口径：(18.0) 器高：(23.0)	①胎土多 ②良好 ③地味	パレスタイムル蓋。11号器外面に軌上帯を付し編成の厚面土。 4本?一筋の條状文を4単位で附け。 外面：11編成2本の横方向溝文。頸部ハケム。 内面：11編成1筋の縦方向溝文。	口縁部1/8残
12	岡原南跡	土師器 壺	口径：6.4 器高：(5.0)	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：頸部ハケム蓋。ヘラミガキ。 内面：ナダク	胴下部へ底面残
13	岡原南跡	土師器 高杯	口径：13.4 器高：(8.3)	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：?全体を赤染。 内面：杯部ヘラミガキ?胴部ヘラミガキ	杯部1/2残
14	岡原南跡	土師器 高杯	口径：(4.8)	①胎土少 ②赤染・軟赤 ③地味	頸部三方方向に円溝通し孔。 外面：ヘラミガキ。 内面：杯部輪ノミミガキ?杯部シボリミ。	杯部部へ胴上縁残
15	岡原南跡 埋土中	土師器 小型高杯	口径：(7.0) 器高：(5.0)	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：ヘラミガキ? 内面：?	杯部部1/2残
16	岡原南跡 埋土中	土師器 小型高杯	口径：(7.4) 器高：(1.3)	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：? 内面：?	杯部部1/4残
17	岡原南跡	土師器 小型高杯	口径：(4.8)	①胎土多 ②良好 ③地味	頸部二股・三方方向に円溝通し孔。 外面：ヘラミガキ? 内面：シボリミ。	胴上縁残
18	岡原南跡	土師器 平口土瓶	口径：b.2 器高：3.9 器底：3.8	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：ナダク 内面：ムビナク	11編成一部欠
19	岡原南跡 埋土中	土師器 手懸ね土器	口径：(5.0) 器高：(4.0)	①胎土少 ②良好 ③地味	唇部ニエミア? 外面：ハケム。 内面：ムビナク。	胴下部へ杯部1/2残

第10表 H-3号住居跡出土遺物観察表

No.	出土位置	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②地味 ③色調	成・整形状況等	備考
1	埋土中	土師器 瓶	口径：(21.4) 器高：(8.0) 器底：(23.0)	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：口縁部ナダク。胴部下部にエヘラミガキ。 内面：口縁部ナダク。胴部部ハケミガキ?ヘラミガキ。他ヘラミガキ。	口縁部1/6、下部部1/3残 2片を留上還元。
2	埋土中	土師器 杯	口径：18.0 器高：6.1	①胎土多 ②良好 ③地味	頸部部凹部。11編成厚面附り。 外面：口縁部ヨコナダク?杯部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナダク?杯部ナダク	11編成1/2欠。 11編成外面の一部に黒色の付着跡。
3	貯蔵穴内	土師器 杯	口径：13.8 器高：5.5	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：ヘラミガキ? 内面：口縁部ヨコナダク?杯部ナダク	口縁部一部欠
4	ピット1内	土師器 杯	口径：(12.0) 器高：(4.8)	①胎土多 ②良好 ③地味	内側口縁。 外面：口縁部ヨコナダク。杯部ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	11編成杯部1/8残

第11表 土坑出土遺物観察表

No.	遺物名	器種	寸法 (cm)	①胎土 ②地味 ③色調	成・整形状況等	備考
1	D-6号	土師器 壺	口径：23.1 器高：11.2 器底：(7.4)	①胎土多 ②良好 ③地味	右縁口縁部凹部。口縁部外側に土土帯を付加した編成の厚面に、4本一筋の條状文を4単位で附け。設備外面には4単位附け。 外面：11編成2本ヨコナダク?頸部凸部に編成の條状凹部。設備の條状凹部以下を赤染。 内面：ヘラミガキ後。口縁部に外側面に3本の條状の凹文。	口縁部頸部1/5残
2	D-6号	土師器 壺	口径：5.1 器高：(3.9)	①胎土多 ②良好 ③地味	厚面凹部凹部。 外面：ハケム。 内面：11編成。胴部ムビナク。	深部
3	D-6号	土師器 壺	口径：(6.0) 器高：(4.9)	①胎土多 ②良好 ③地味	外面：ナダク 内面：ハケミガキ後ナダク	底部1/4残
4	D-14号	土師器 高杯	口径：(9.9) 器高：(11.4) 器底：(14.4)	①胎土少 ②良好 ③地味	頸部内側通し孔。一方方向? 外面：杯部ヘラミガキ。胴部ナダク 内面：杯部ヘラミガキ?胴部ナダク	1/5残 3片を留上還元。 杯部内面に黒色の付着跡。
5	D-16号	土師器 壺	口径：(18.4) 器高：5.8 器底：(9.5)	①胎土多 ②良好 ③地味	胴部内面に括弧着上げ筋。 外面：ナダク 内面：11編成ヘラミガキ?胴部ムビナク?後ナダク?	1/2残 唇部上縁部。

Ⅶ まとめ

調査において気付いた点を記してまとめとする。なお、隣接地点で同時に調査された南部拠点地区遺跡群No. 11について、調査担当者の永井智教氏より種々の資料を提供いただき参考とさせていただいた。

1 平安時代末以降

条里型地割りについて (第40図)

A s-B下水田は、調査区A、B、Cの範囲の全域に広がっていたと考えられる。この中で東西大畦畔が3条(A区・1号、B区・2号、C区・3号)、南北大畦畔が2条(C区・1号及び2号)確認された。これらを隣接の南部拠点地区遺跡群No. 4、No. 7、No. 8、No. 11、さらに北方の横手湯田遺跡などの調査結果と重ね合わせると第40図のようになった。これにみるように周辺では109～110m間隔の大畦畔で区画された条里型地割りが整然と施行されている。今回検出された1号から3号の東西大畦畔、さらに2号南北大畦畔については、この周辺の条里区画の基準に整合していた。しかしB区からC区にかけて250m以上の間で検出された1号南北大畦畔については、この基準に合致していない。一方で、No. 7の調査で検出された南北大畦畔から想定された区画とは、110mほどの間隔や走向の方位が適合していた。本調査区の1号南北大畦畔や、No. 7-1a区西端部とNo. 8-B区東端部などで検出された南北大畦畔は、その規模や形態などからみて大畦畔であることは確実である。過去にこれに似た状況で区画の基準に合致しない南北大畦畔が、900mほど東方の下阿内前田遺跡でも確認されている。いずれも東西大畦畔の方位は一致しているので、異なる区画基準であったとは考えにくい。坪界を構成しない内部の区画割りのための畦畔であったものか、あるいは条里施行の時間的な差などにより区画の基準が異なったものかなど、さらなる今後の検討が必要である。



第40図 条里型地割り想定図

土坑について

D-10号土坑と11号土坑については、B軽石を多量に含む埋土で形態・規模も同様のものであった。また重複するW-16号溝との位置関係も共通しており、I-1号井戸跡がやはり似た状況にあることからみて、W-16号溝の流水や湧水を利用した溜井状の井戸と考えられる。D-7号土坑も立地は異なるが似た形態で、同様に溜井施設とみられる。後述する東側微高地の畑地、あるいは西側の微高地への灌溉に利用するための便宜的な施設ではなかったかとみられる。

溝跡について (第41図)

C区では平安時代末以降の溝跡が多数検出されたが、このうち平安末から中世にかけての溝跡は、埋土の様子から大きく3時期に区分できた。最初の時期はA s-Bの降下で直接埋没しているもので、W-2号・4号・6号・9号・10号・12号・15号・27号・31号・38号溝である。このうちW-2号・6号・10号・31号溝については大畦畔に伴う溝跡であった。W-9号溝はC区の谷地部に位置し、X-1号窪地から南方へ派生していた。W-12号・15号溝は谷地の西辺を走り、規模・形態が同様で一連のものともみられる。さらに規模は異なるが前記のW-9号溝とも走向が一致し、連続している可能性がある。これらは、流水などの痕跡は認められなかったが溜井状のX-1号窪地からの水路であった可能性が考えられる。排水のための溝跡であろう。W-27号・38号溝は水田の畦畔を切って不定方向に走っており、溝跡としたが非常に浅く底面は凹凹が目立つものであった。N₁₁で想定されたような道の跡の可能性もある。いずれにしてもこれらの溝は水田面や畦畔を切って構築されていることから、この時点ではこれらの区画は水田として耕作されていたこととなる。

次は、A s-Bの降下からさほど時間を隔てない時期に開鑿された溝で、第X層あるいは第IX層山来とみられるB軽石を主とする暗褐色の泥土層で埋まったもので、W-7号・13号・16号・33号・34号溝である。W-7号溝は北の調査区外から続いており、X-2号窪地に接続して終わっているようであった。W-16号溝は、調査区内の谷部と微高地の地形の変換線を南北に縦断する規模の大きい溝で、水流も相当あったことが知られた。その後の近世から現代にかけてのW-17号溝がこれを忠実にトレースして走っていることや、東西方向の溝跡がすべてW-16号溝を基準としているようであることなど、後世の土地利用にまで大きな影響を有した溝跡である。

最後が、軽石の流入量がやや少ないB混土で埋没している溝で、第VII層の黄褐色砂質土の影響とみられる黄灰褐色を呈するB混土層であった。W-8号・11号溝・14号・19号～26号・28号～30号・32号・35号～37号・39号溝と最も多く、いずれも規模は小さい。このうちW-11号溝は流砂の堆積などから排水路と考えられた。その他の多くは調査区東半の微高地上に構築されており、I字形に屈曲したり、T字形、十文字に交差するものが多かった。底面の高低差もほとんどなく、水路というよりは区画のための溝とみられ、畑地の境界溝と考えられた。第41図のとおり区画は東西に長い長方形を基調としているが、すでに条里区画とは異なり地形に応じた区画となっているようである。中世以降は東側の微高地部分は畑地としての利用であったと考えられる。



第41図 C区平安時代末以降の溝跡位置図

2 古墳時代

後期の住居跡について

H-3号住居は古墳時代後期の住居跡であった。№11の調査区でも同時期の土器がまとまって出土しており、周辺部の過去の調査では、徳丸件田遺跡I区で後期の住居跡が1軒検出され、河道跡からは須石器杯蓋などが出土している。西田遺跡では土坑・ピットが検出され、溝跡からも後期の土器が出土し、横手早稲田遺跡C区とD区では土器が集中する部分が検出された。このほかにも周辺部で後期の土器の出土があり、いずれも後期でも比較的早い段階の時期とみられる。住居跡自体の検出例は本遺跡で2例目であるが、周辺でのこのような状況を見ると、古墳時代後期の初め頃には微高地上の各所に数軒単位程度で住居が散在していたことがうかがわれる。

前期の住居跡について

前期のH-1号・2号住居は外周溝部分のみの検出で、内部の構造は不明である。このような浅く不整形な外周溝をめぐらす形態の住居の検出例として、隣接する№11地点、北西900mほどの横手湯田・横手早稲田遺跡、南方の玉村町の上之平八王子遺跡、太田市新田の唐樋田遺跡、さらに内溝の形態が異なるが伊勢崎市三和工業団地I遺跡などがある。低地帯に立地する該期の住居跡に認められ、特に前橋台地南部で多くの発見例がある。H-1号・2号住居はともに隅丸方形の平面形を基調とするとみられ、H-1号住居は内法の一边が11mで、住居の本体部分も大型であったとみられる。

遺物は、H-1号・2号住居とも良好な土器群が出土した。特に大型のH-1号住居では土器の出土量も多かった(第32～35図)。台付甕には、S字甕1～8とく字甕9～12がある。破片も含めS字甕が主体であり、すべて外面肩部にハケによる平行線が施され、1～4は口縁部が外反して内面に平坦面をつくる。1は頸部内面にヨコハケを残す。壺は、折り返し口縁で球形胴の13と内湾口縁の14がみられ、15は下ぶくれの胴部である。小型壺は口縁部が外反する17と内湾口縁の18があり、胴部は球形化している。脚付の鉢19は大型で口縁部が大きく内湾する。甕例が横手早稲田遺跡で出土している。鉢20は有段口縁を持ち底部は小さな平底である。杯21は厚く粗雑なつくりで、弥生系の器種である。有段高杯22は杯部が浅くなっており、脚部部が大きく開く。有段高杯23は口縁が大きく開き縁は弱い。25も裾が大きく開く脚部で、有段高杯の脚部とみられる。高杯27・28は椀状の杯部で、在地の弥生系の土器とみられる。結合器台30は受け部が蹄状に大きく発達した特異な形態であるが、似た器形が太田市中溝・深町遺跡で見られる。小型器台31は脚部にわずかに屈折が残っている。H-2号住居(第36・37図)では、S字甕1～6とく字甕7・8があり、やはりS字甕が主体である。1～3は頸部内面にヨコハケを残す。壺は口縁部片のみだが伊勢型二重口縁の10やパレス壺の11がみられる。11は口縁部内面の平坦面が下がり気味でやや新しい様相とみられる。有段高杯13は杯部が浅めである。小型器台は受け部が皿状の形態である。なお、両住居跡とも手捏ね土器を数点ずつ出土していることは興味深い。

以上のようにく字甕やII-1号住居の結合器台30、さらにわずかな在地系とみられる土器などを除いて、ほとんどの器種が東海系といわれる土器であった。S字甕については、井野川流域での田川一郎氏による分類・編年⁽²⁾が示されており、これによればH-1号住居、H-2号住居ともIIb類に比定されるものが主であり、両住居はほぼ同時期と考えられる。また、S字甕の故地である濃尾平野の廻間編年ではH-1号住居の3はB類の新段階に相当し、廻間Ⅱ式の新段階にあたる⁽³⁾。全体に壺や鉢などに内湾口縁の形態を残すものの、II-1号住居17・18は球形の胴部でやや新しい様相であり、有段高杯や有段高杯は杯部が浅くなり、パレス壺もやや時期が下るとみられることなどから、廻間Ⅱ式期でも末頃に位置づけられ3世紀末の年代が与えられる⁽⁴⁾。

出土土器の様相からは、石田川式土器様式の確立される直前の時期にあたとみられ、№11地点や横手湯田・横手早稲田遺跡の集落とともに、この前橋台地南部の低地帯に最初に灌出した集団の一部と考えられる。その後、

県内平野部を中心に広範囲に石田川式土器が展開し、前橋八幡山古墳や元島名将軍塚古墳などの大型古墳が築造されていくのであろう。

土坑について

前期のD-6号、14号～17号土坑のうち、D-6号土坑では底面から加飾帯の口縁部が出土した。棒状浮文を口縁部に二段に貼付し、内面に矢羽状の刺突文、外面には赤彩が施されている。器形は柳ヶ坪型壺の二重口縁に近い形態で、バレス壺とは異なる。頸部の形態は異なるがこれに似た口縁形態で棒状浮文を口縁端部に貼付した加飾帯が、バレス壺とともに高崎市貝沢柳町遺跡の方形周溝墓から出土している。加飾帯は特殊な土器であったとみられることから、木土坑については意壺であって、加飾帯はこれに副葬あるいは供献された土器ではないかと考えられる。

D-16号土坑では、埋土上部から直1口緑塗の半欠品が出土した。器形や、内面の輪積み痕など弥生系の土器と考えられる。土壺墓に供献されたものとみられ、H-1号住居廃絶後の構築とみられる。

D-14号、15号土坑はH-2号住居にやや先行する土坑で、D-17号土坑は倒木痕の可能性が高い。

今回の調査では、古墳時代前期は作居跡2軒と土壺墓2基が検出された。作居跡がさらに東にも存在する可能性はあるが、いづれにしても小規模な集落であったとみられる。同時期の集落は、谷地部を隔てて西に隣接するNo.11で9軒が、横手湯田・横手早稲田遺跡でも10軒ほどの集落跡が発見されている。そのほか周辺部でも該期の土器の出土が認められた地点は多く、低地に面した微高地上にいくつかの小集落が分布していたと考えられ、その景観は古墳時代後期と似た状況であったとみられる。

注(1) 図のデータを南部拠点地区遺跡群No.11担当者の永井智教氏に提供いただいた。

(2) 田口一郎 1981「S字状口縁台付壺の分類と鑑別」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会

(3) 赤塚次郎氏のご指示による。

(4) 同上

主な参考文献

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.1』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.2』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010『南部拠点地区遺跡群No.3』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.4』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.5』
前橋市教育委員会 2011『南部拠点地区遺跡群No.6』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.7』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.8』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.9』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.1』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.2』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010『南部拠点地区遺跡群No.3』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.4』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.5』
前橋市教育委員会 2011『南部拠点地区遺跡群No.6』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.7』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.8』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.9』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『横手湯田II遺跡・西田II遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『横手湯田II遺跡・地丸仲田II遺跡・西善八司II遺跡・下湯田越後II遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999『西田II遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『横手湯田遺跡・横手湯田遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『西田遺跡・村中遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『鏡光路橋遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『地丸仲田遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『下河内心町遺跡・下河内前田遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『亀生平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手川原遺跡』
田口一郎 1981「S字状口縁台付壺の分類と鑑別」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
赤塚次郎 1990「V. 考証」『遺跡調査』(財)愛知県埋蔵文化財センター・飯島義雄 1998「古墳時代の前期における「周溝を持つ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号
深沢敦仁 1998「上野における「器の交流と展開」Ⅱ内式土器研究XVI」
庄内式土器研究会
坂口 1999『周溝の語る住居について』『三ノ川集団II遺跡(2)』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

写真図版



調査地から横名山方向を望む（南東から）



A区（左）・B区（右）全景（右が北）



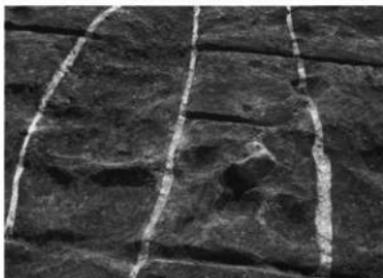
A区 全景 (右が北)



A_s-B下水田 1号東西大畦畔・W-2号溝跡 (上が北)



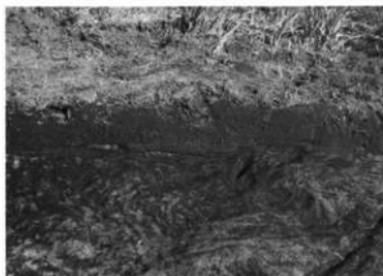
A_s-B下水田 1号東西大畦畔 水口1 (東から)



A_s-B下水田 1号東西大畦畔 S-1 (東から)



A_s-B下水田 1号東西大畦畔 S-2断ち割り (東から)



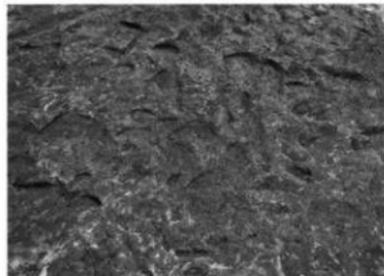
A s-B 下水田 1号東西大畦畔・W-2号溝跡 土層断面 (西から)



A区東半部 A s-B 下水田 (南東から)



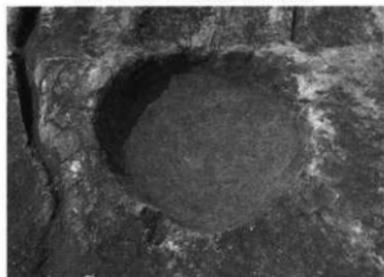
A区西半部 A s-B 下水田 (西から)



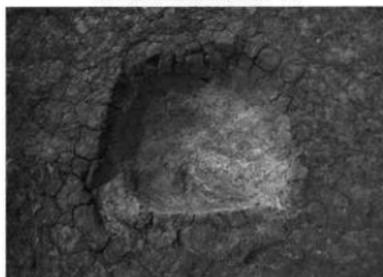
A s-B 下水田面 耕具痕 (北西から)



A区 遺物出土状態 (北東から)



D-1号土坑 (東から)



D-2号土坑 (南東から)



W-1号溝跡 (南から)

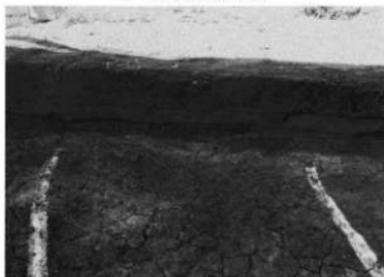
PL. 4 A・B区



W-3号溝跡 (北から)



W-4号溝跡 (北西から)



W-4号溝跡 土層断面 (南から)



A区 基本層序 (東から)



B区 全景 (右が北)



A s-B 下水田1号南北大畦畔・W-6号溝跡 (右が北)



A s-B 下水田1号南北大畦畔・W-6号溝跡 (北から)



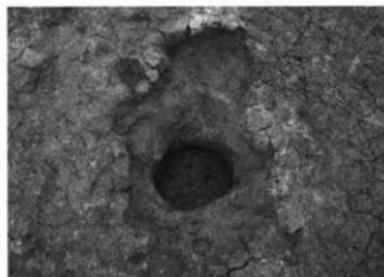
A s-B 下水田1号南北大畦畔・W-6号溝跡 土層断面F (北から)



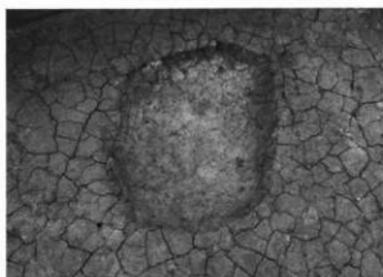
A s-B 下水田2号東西大畦畔 (東から)



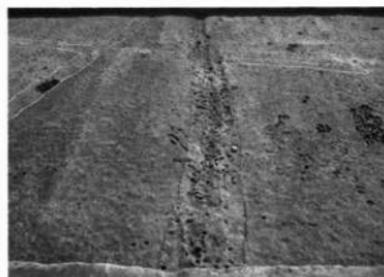
B区南半部 A s-B 下水田 (北東から)



D-3号土坑 (西から)



D-4号土坑 (南から)



W-5号溝跡 (西から)



C区 全景 (上が北)



C区 全景 (南から)



C区北半部 A-13下水田と1号南北大畦畔 (上が北)

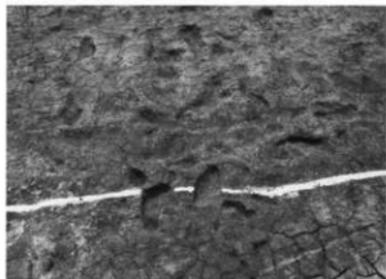
PL. 8 C区



C区南半部 As-B下水田とH-2号・3号住居跡 (上が北)



As-B下水田1号南北大畦畔 (南東から)



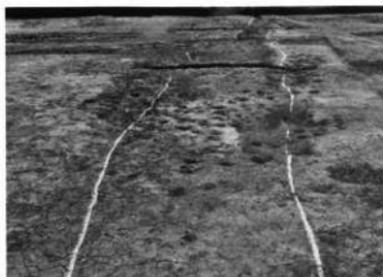
As-B下水田1号南北大畦畔 西脇の足痕 (東から)



As-B下水田1号南北大畦畔 断ち割りA (南から)



As-B下水田3号東西大畦畔 西半部・W-10号溝跡 (西から)



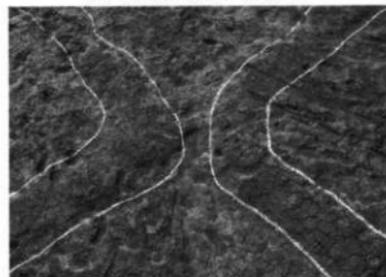
As-B下水田3号東西大畦畔・W-10号溝跡 (東から)



As-B下水田 水口1 (南東から)



As-B下水田 水口3 (南東から)



As-B下水田 水口5 (南東から)



As-B下水田 2号南北大畦畔 水口6 (南から)



As-B下水田 水口7 (南から)

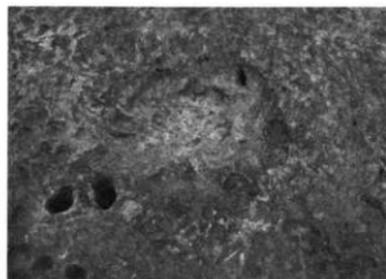


As-B下水田面 凹凸状況 (西から)

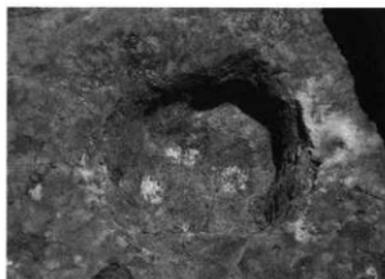


As-B下水田 畦畔断ち割りD (北から)

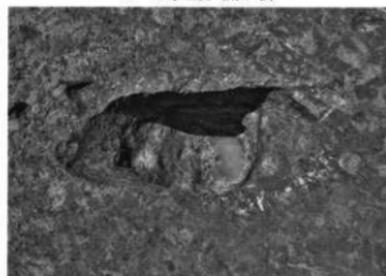
PL. 10 C区



D-5号土坑 (南から)



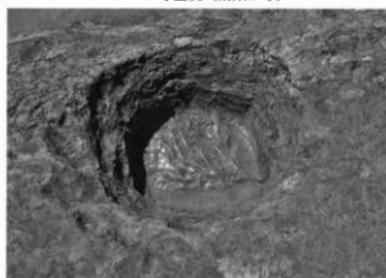
D-7号土坑 (北から)



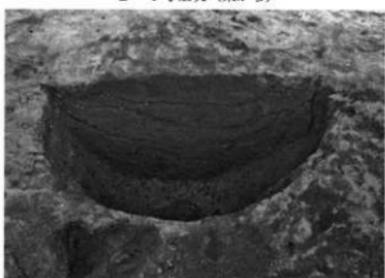
D-8号土坑 (南東から)



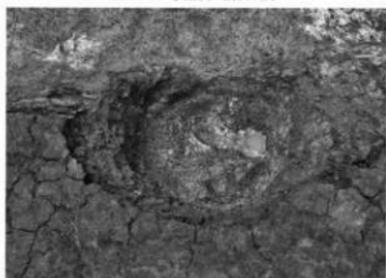
D-9号土坑 (東から)



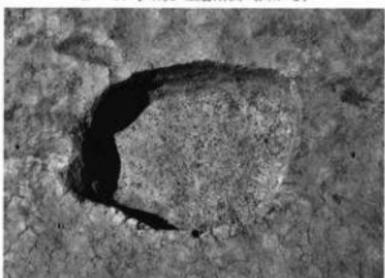
D-10号土坑 (東から)



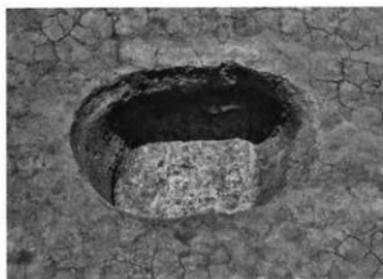
D-10号土坑 土層断面 (西から)



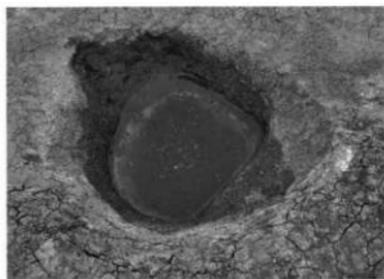
D-11号土坑 (東から)



D-12号土坑 (南から)



D-13号土坑(北から)



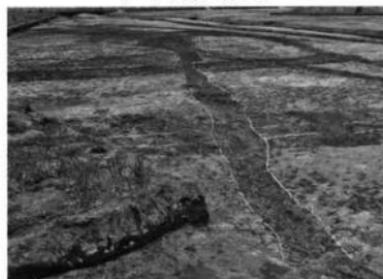
I-1号井戸跡(北東から)



W-7号溝跡(北から)



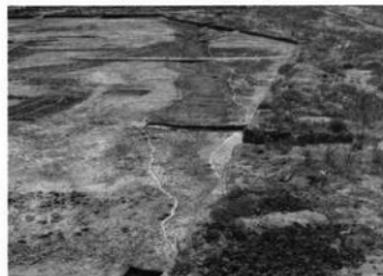
W-8号溝跡(南から)



W-9号溝跡・X-1号窪地(南西から)



W-11号溝跡(東から)

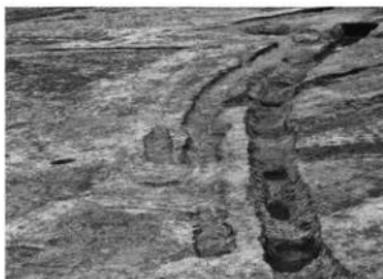


W-12号溝跡(北から)



W-13号溝跡(中)、16号・17号溝跡(右)(南東から)

PL. 12 C区



W-14号溝跡 (北東から)



W-15号溝跡 (北西から)



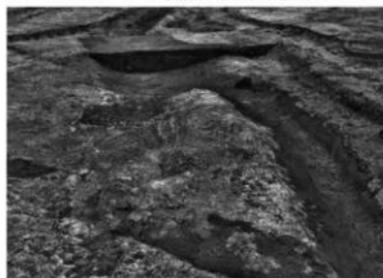
W-15号溝跡 土層断面 (北西から)



W-16～18号溝跡 北端部 (北から)



W-16～18号溝跡 土層断面A (南から)



W-16号・17号溝跡 中央付近屈曲部 (南から)



W-19号溝跡、21号溝跡 (東から)



W-20号溝跡 (東から)



W-22号溝跡(東から)



W-22号溝跡 土層断面A(西から)



W-23号溝跡(南から)(2)



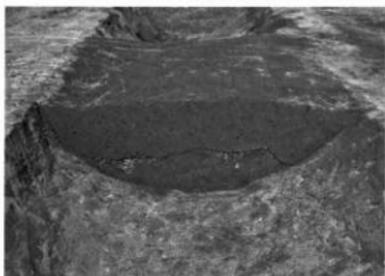
W-24号溝跡(東から)



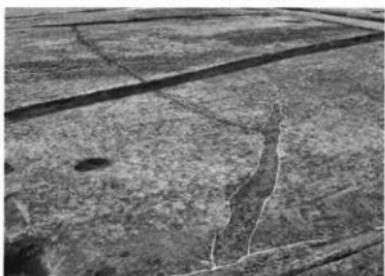
W-24号・25号・29号溝跡 交差部(南から)



W-25号・26号・28号溝跡(北から)



W-26号溝跡 土層断面A(西から)



W-27号溝跡(北から)

PL. 14 C区



W-30号溝跡 (西から)



W-31号(右)・32号(左)溝跡 (東から)



W-31号・32号溝跡 土層断面 (西から)



W-33号溝跡 (南から)



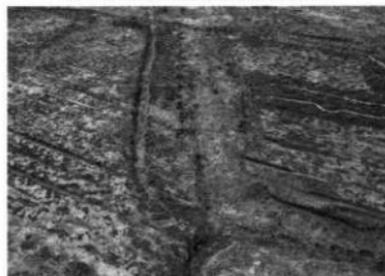
W-34号溝跡 東辺 (南東から)



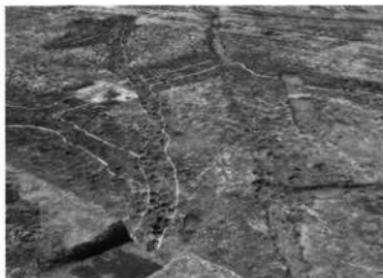
W-34号溝跡 東辺最深部 (南東から)



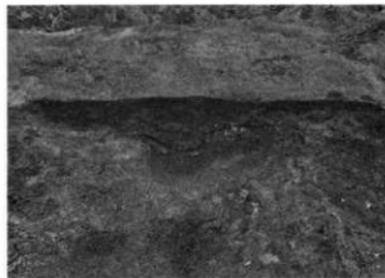
W-34号・39号溝跡 交差部土層断面A (北西から)



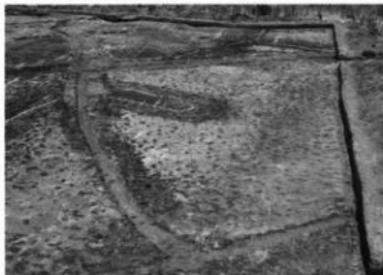
W-35号溝跡 西辺、36号溝跡 (南東から)



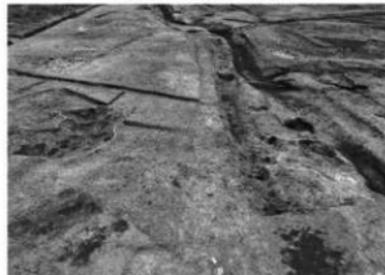
W-37号溝跡 西辺(右)・38号溝跡(左)(東から)



W-38号溝跡 土層断面A(南東から)



W-39号溝跡(西から)



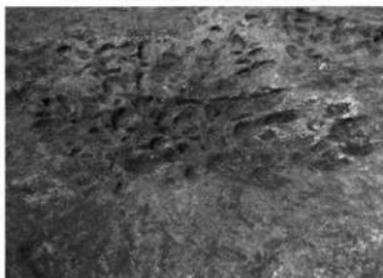
W-40号(左)、16号・17号(右)溝跡(北から)



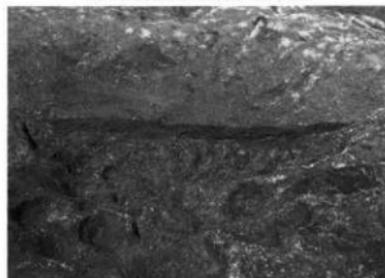
X-1号窪地・W-9号溝跡(北から)



X-1号窪地 土層断面(南から)



X-2号窪地(南東から)



X-2号窪地 土層断面(南東から)



C区、古墳時代遺構 全景 (右が北)



H-1号住居跡 (東から)



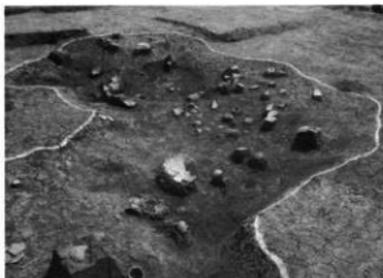
H-1号住居跡 外周溝南辺 (南から)



H-1号住居跡 外周溝東辺 (南から)



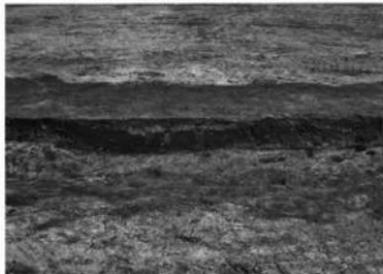
H-1号住居跡 外周溝北辺 (北西から)



H-1号住居跡 外周溝南辺遺物出土状態 (北東から)



H-1号住居跡 外周溝北辺遺物出土状態 (南から)



H-1号住居跡 外周溝北辺部土層断面 (西から)



H-2号住居跡 (西から)



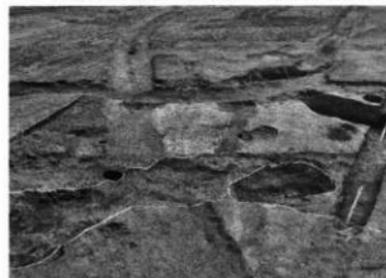
H-2号住居跡 外周溝南西部 (北西から)



H-2号住居跡 外周溝南西部遺物出土状態 (西から)



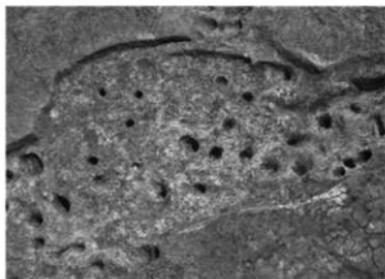
H-2号住居跡 外周溝土層断面A (南から)



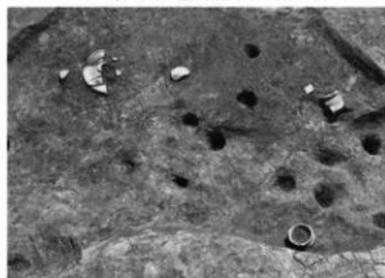
H-3号住居跡 (東から)



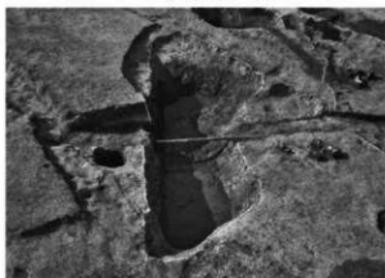
H-3号住居跡 遺物出土状態 (北から)



D-6号土坑 (西から)



D-6号土坑 遺物出土状態 (西から)



D-14号土坑 (南から)



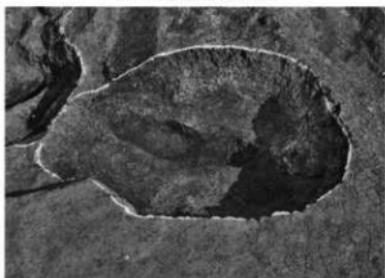
D-14号土坑 土層断面 (南から)



D-15号土坑 (西から)



D-16号土坑 (東から)



D-17号土坑 (北から)

A区出土遺物



C区出土遺物



溝跡出土遺物

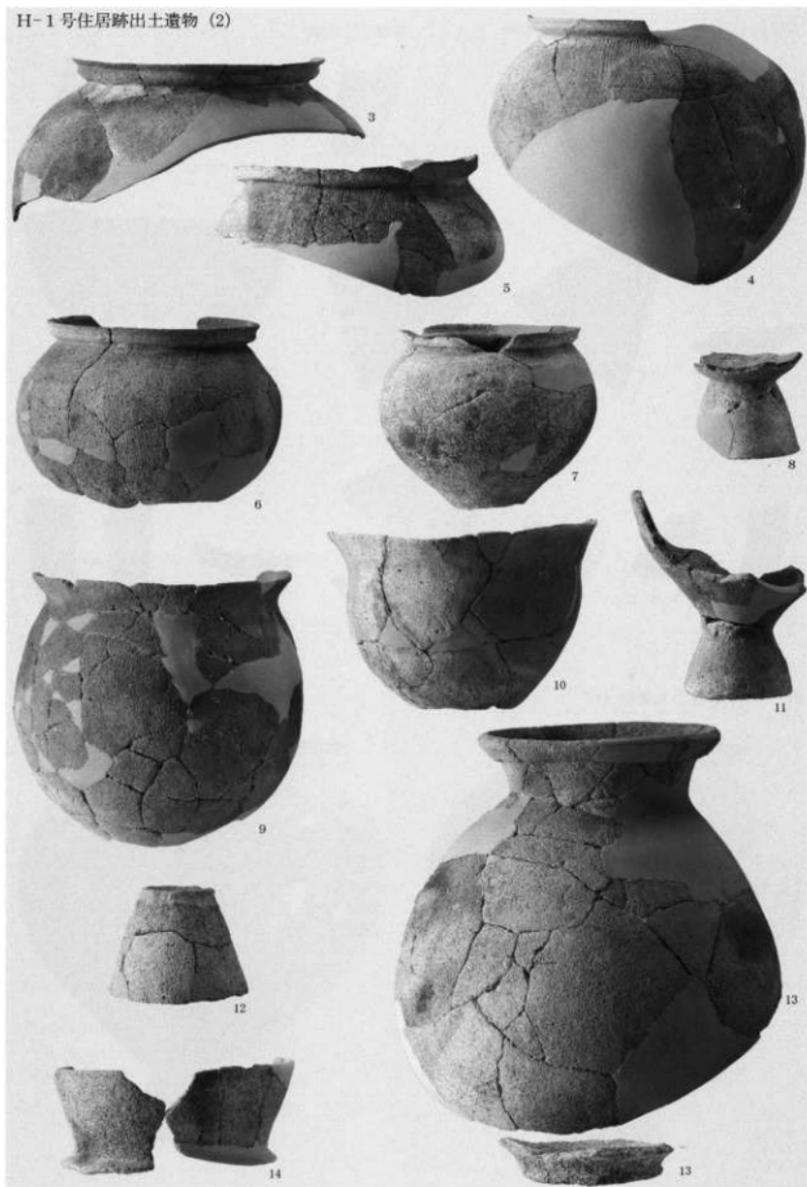


W-18 6

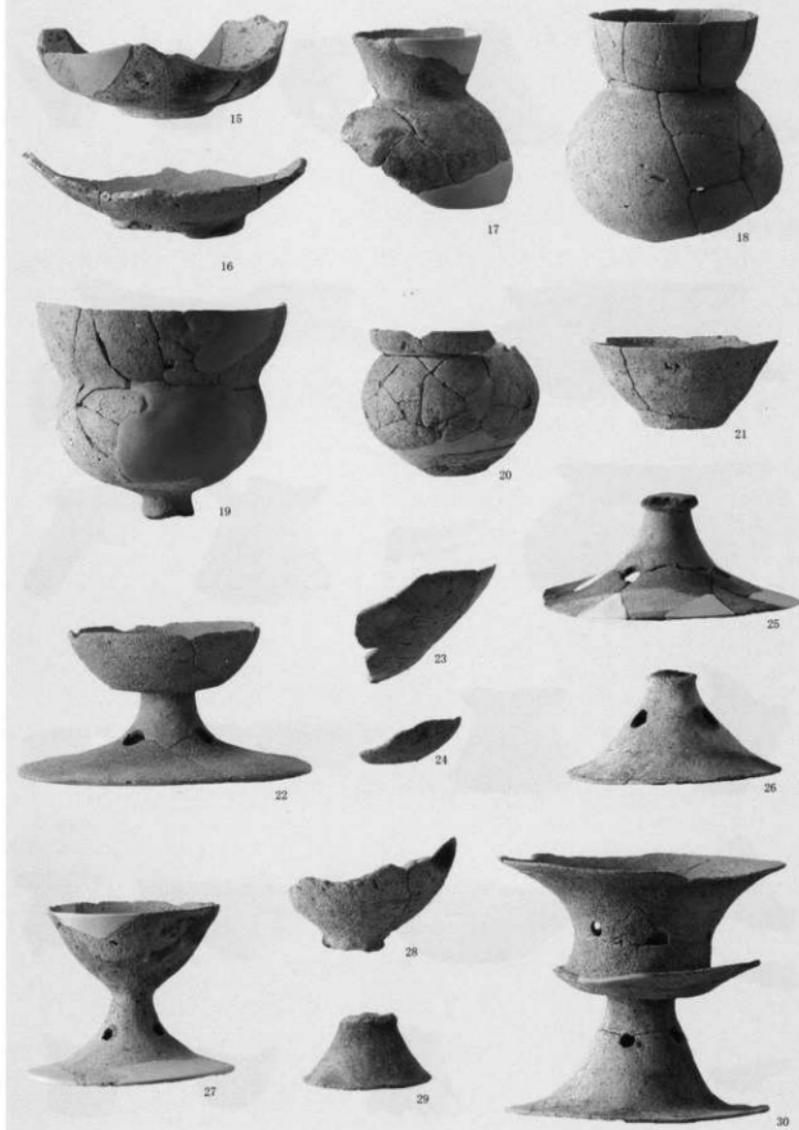
H-1号住居跡出土遺物 (1)



H-1 号住居跡出土遺物 (2)



H-1号住居跡出土遺物 (3)



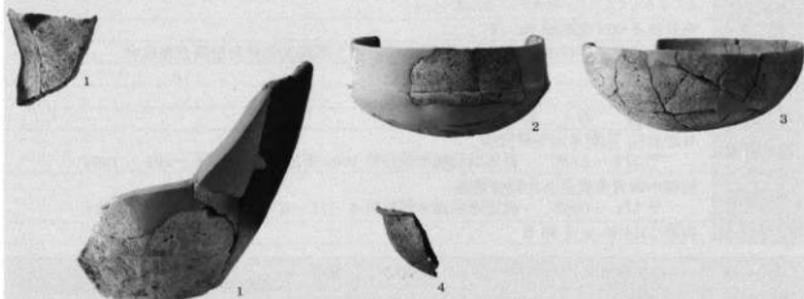
H1-号住居跡出土遺物(4)



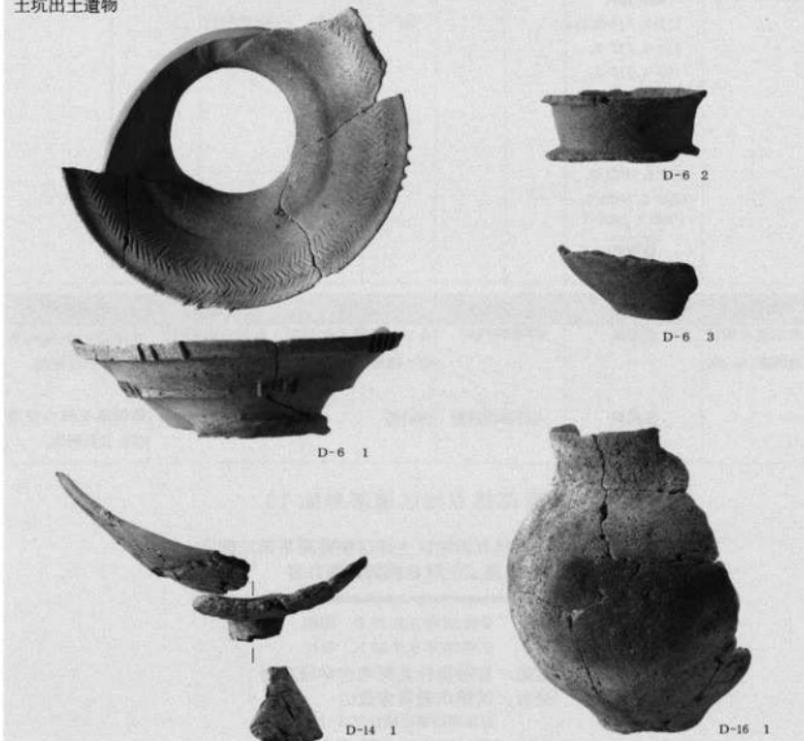
H-2号住居跡出土遺物



H-3号住居跡出土遺物



土坑出土遺物



抄 録

ふりがな	なんぶきよてんちくいせきぐん なんぼーじゅう
書名	南部拠点地区遺跡群 No. 10
副書名	前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	藤坂和延 井上 太
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 TEL 027-265-1804
発行機関	前橋市教育委員会文化財保護課 〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4 TEL 027-280-6511
発行年月日	西暦2014年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南部拠点地区 遺跡群 No. 10	群馬県前橋市 鶴光路町 113-2, 113-3, 114-4, 117-2, 117-4, 117-5, 118-2, 119-2, 119-3, 120-2 亀屋町 960-3, 1002-3, 1003-2, 1003-3, 1006-2, 1007-7 新堀町 6-2, 77-2	10201	00785 (25684)	36° 19' 58"	139° 5' 32"	20140310 ～ 20140524	9,850 m ²	上地区西 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南部拠点地区 遺跡群 No. 10	生産跡	平安時代末	A s - B層下水田 跡・溝跡	中・近世の陶磁器片	平安時代末期の条 形水田を検出。
	集落跡	古墳時代前期	住居跡	土師壺	外周溝を持つ住居 跡を2軒検出。

南部拠点地区遺跡群No. 10

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26年9月25日 印刷

平成26年9月30日 発行

編集／有限会社毛野考古学研究所

発行／前橋市教育委員会

群馬県前橋市総社町3-11-4

印刷／朝口印刷工業株式会社